

974は軒平瓦で、775型式。凸面は頭の部分まで縄目叩きを施す。
第IV～V期の遺構とみられるが、詳細時期は明らかにしがたい。

土坑SK119 Fig.97

第5次調査区の北東部に位置する。SK86の南端に位置し、これと重複する。SK119は擾乱坑やピット等に多く切られており、平面プラン等が明確でなく、SK86との先後関係も不明である。現状で隅丸長方形様の平面プランで、南北長1.6m、東西長1.3m以上。断面逆台形で、深さ40cmである。

SK119出土遺物 Fig.98

中国産陶磁器(邢窯系・景德鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器)が少量と、瓦がコンテナ2箱出土した。

975は華北産白釉緑彩陶器の皿か。軟陶質胎で、釉下に化粧掛けしているとみられる。

976～978は粗製越州窯系青磁である。釉下に白化粧を施し、体下半から外底は露胎。見込みに粗い白目土が付着したままである。976は階級坏、他は碗で、977は輪花口縁。

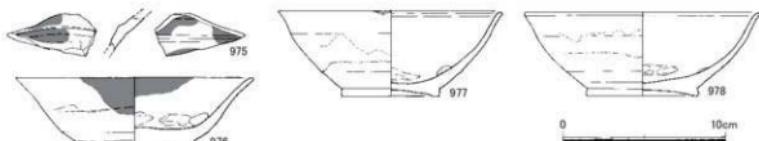


Fig.97 土坑 SK119 実測図 (1/40)
Fig.98 SK119 出土遺物実測図 (1/3)

4. 第6次調査の検出遺構と出土遺物(福岡城跡第15次調査／9005)

第6次調査区は平和台野球場南側テニスコート部分のうち、中央の緑地帯と、その東側のテニスコート2面分である。中央緑地帯には藤棚があったため、この撤去と調査は第7次調査と並行して行った。東側テニスコートは外周にスタンド盛土とフェンスがあり、この外周部分の調査は第7次・第9次調査として実施した。

検出した古代遺構は、前年度報告の建物遺構(第II期布掘り層SA150、第III期礎石建物SB50の一部、第IV・V期の溝群SD357他)のほか、本書で報告する土坑11基である。その他、古代の可能性があるが、出土遺物が少なく明確でない土坑が5基ほどある。

土坑SK151 Fig.99

第6次調査区西端のテニスコート中央緑地帯部分の調査区で検出した土坑である。SK151とSK152の2基の土坑が重複するが、切り合ひ関係は不明である。ともに礎石建物SB50に伴う排水溝である石組み暗渠SD270を破壊している。SK151は東半部が調査区境にかかるが、楕円形プランとみられ、南北長1.6m、東西1.4m以上。浅い窪みで、底面は東へ段をなして落ち、最深部で深さ20cmである。土坑内には石組み暗渠SD270に伴うとみられる石材が散乱している。

S K 151 出土遺物 Fig.100・101, PL.21

土師器、須恵器、綠釉陶器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器コンテナ4箱、瓦がコンテナ17箱、石製品・土製品が少量出土した。

979～983は土師器である。979は壺で、磨滅して調整不明。復元口径11.4cm、器高3.5cm。980は楕で、高台が高い。調整不明。981は壺、982・983は甕である。984・985は中国産綠釉陶器碗である。986・987は黒色土器A類の壺で、磨滅するが987内面にミガキ痕が僅かに残る。

988～1005は越州窯系青磁である。988～992は精製輪状高台の碗で、989～991は高台が低く、992は高めである。いずれも全釉。993・994は平底碗で、外面は露胎。995は精製の輪花口縁皿で全釉。996・997も精製鉢で、体外面下半は露胎で、口縁端部は釉剥ぎする。998～1004は釉下に白化粧を施す粗製の越州窯系青磁である。998は碗の口縁部片で体外面下半は露胎。999は円盤状高台に削りを入れて蛇の目高台風にする。体外面下半は露胎である。1000・1001は小碗で、体外面下半は露胎とする。1002は蓋で、横長の外耳が付く。内面露胎。1003は盤口壺。1004は壺の底部で、外面露胎。内面は部分的に釉がかかる。

1005は碗で、体外面下半以下は露胎で、内面に大きな目跡が付く。広東省産の可能性がある。

1006～1011は朝鮮半島産の無釉陶器である。内外面横ナデ調整で、1009を除き黒塗りされる。

1012は軒平瓦で、663型式。1013は丸瓦で、凸面の叩きは単線の斜格子目である。1014は素文磚の角部分である。1015は土鍤である。1016は黒色の円形の石製品で、墓石の可能性がある。

第IV期(9世紀後半～10世紀前半)の遺構であろう。

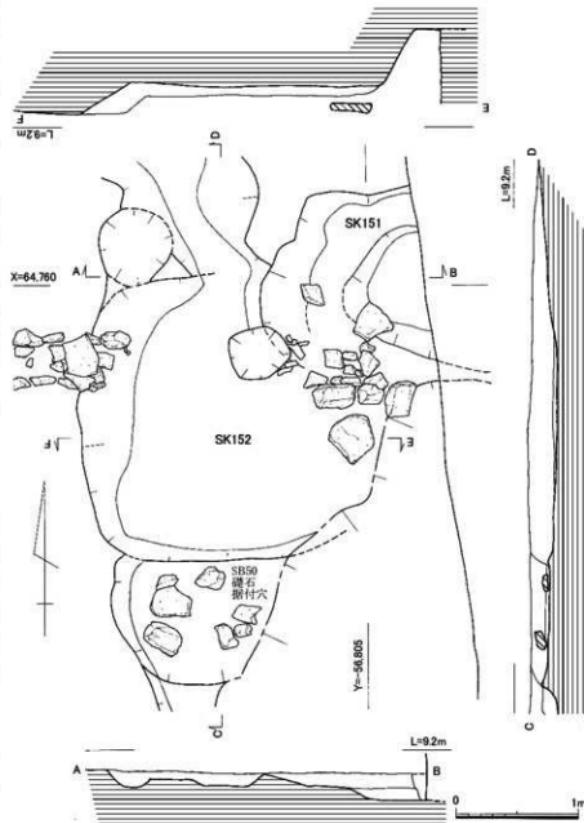


Fig.99 土坑 SK151・152 実測図 (1/40)

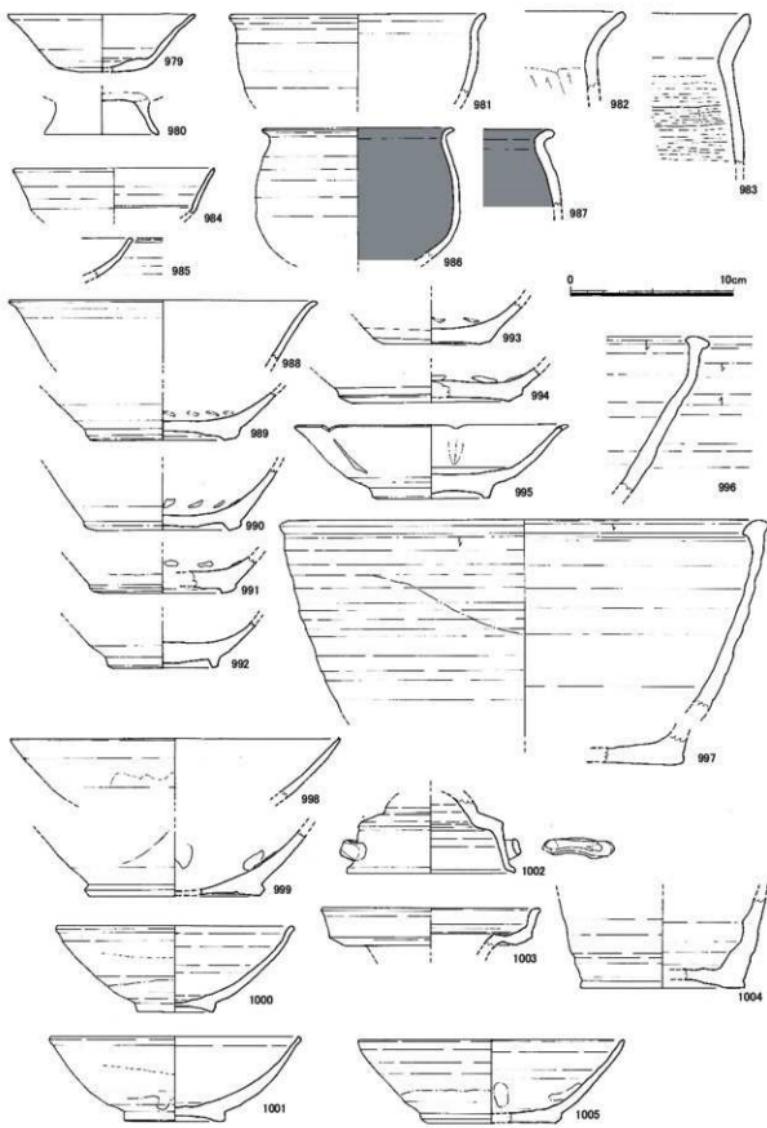


Fig.100 SK151出土遗物实测图1 (1/3)

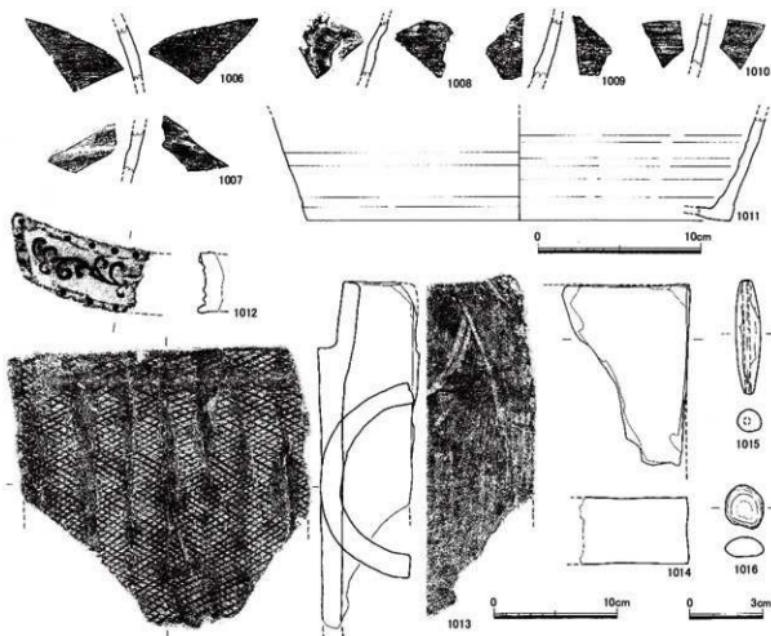


Fig.101 SK151 出土遺物実測図2 (1012～1014は1/4、1015・1016は1/2、他は1/3)

土坑SK152 Fig.99

第6次調査区西端のテニスコート中央緑地帯部分の調査区で検出した土坑で、SK151の南西側に重複する。削平のため北側のプランが不明瞭で、南東側は近世遺構により破壊されている。南側は礎石建物SB50の礎石据付穴を切っている。隅丸方形プランをなすとみられ、南北長2.4m前後、東西長2.6m以上。深さ20cm以下の浅い窪みである。

S K 152出土遺物 Fig.102

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・景德鎮窯白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器)がコンテナ5箱、瓦が3箱出土した。

1017は須恵器蓋である。口縁端部を僅かに下方へつまみ出す。

1018～1020は邢窯系白磁碗である。1018は小さな玉縁口縁である。1019は蛇の目高台で、高台脇に施釉時に使用したと思われる鉗子痕が残る。1020は輪状高台の碗で、口縁にかけて外に大きく開く。1021～1023は景德鎮窯白磁である。1021は玉縁口縁の碗、1022は皿、1023は碗の底部で、疊付から外底は露胎である。

1024～1037は浙江省産の精製の越州窯系青磁である。1024は碗で、蛇の目高台のタイプである。1025は碗の口縁部で、外反する。1026～1035は碗の底部片である。1026～1029は低い輪状高台で、1030は高めの輪状高台、1031・1032はさらに高めで、細く尖り気味となる輪状高台である。1033～1035は平底である。1036は碗の小片とみられ、体内面に片切彫りで花文を施している。1037は広口壺。

1038～1043は福建省産の粗製の越州窯系青磁で、軸下に白化粧を施す。1038～1042は碗もしくは小碗で、1038～1040は円盤状の外底に削りを加えて蛇の目高台風にする。いずれも体外面下半から高台は露胎である。1043は小壺の底部か。外底は露胎である。

1044は青磁碗で、外面は露胎、内面に大きな目跡が残る。1045は施釉陶器の壺の外耳部分である。

1046・1047は朝鮮半島産の陶器である。ともに底部で、横ナデ調整。

第V期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構である。

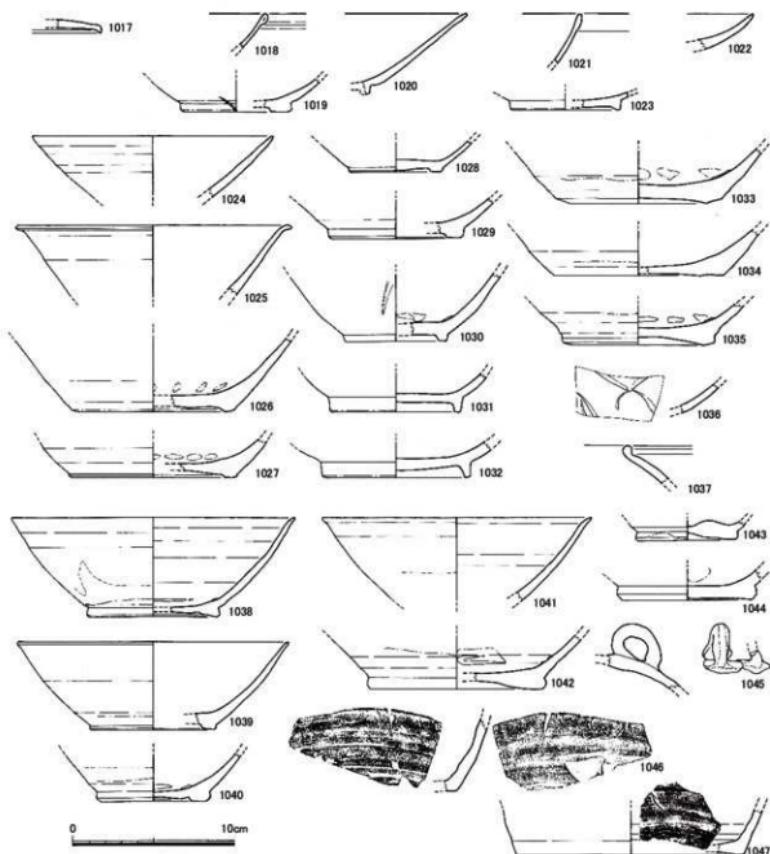


Fig.102 SK152 出土遺物実測図 (1/3)

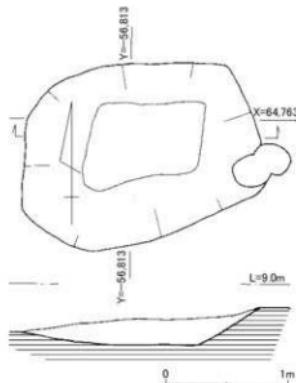


Fig. 103 土坑 SK155 実測図 (1/40)

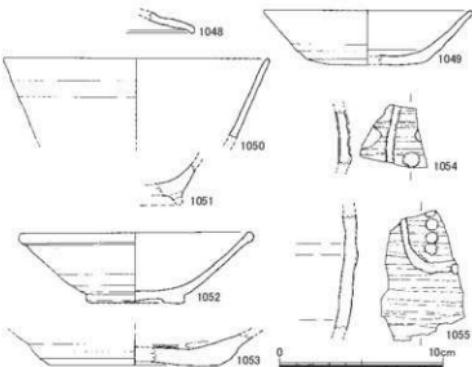


Fig. 104 SK155 出土遺物実測図 (1/3)

土坑SK155 Fig.103, PL.14

土坑SK151の西側6mに位置する土坑である。他遺構との切り合いはない。東西に長い不整な隅丸長方形プランで、西側は削平により残りが悪い。東西長2.0m、南北長1.5m。断面逆台形をなすが、壁の立ち上がりは緩やかである。深さ30cmで、底面は平坦である。

SK155出土遺物 Fig.104, PL.21

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器)、イスラム陶器がコンテナ2箱、瓦が5箱出土した。底部糸切りの土師器小皿が混入して出土している。

1048は須恵器蓋である。端部の返りは丸みを帯びる。1049は土師器坏で、磨滅して調整不明。外底はへラ切りで、体部との境は丸みを持つ。復元口径12.8cm、器高3.4cm。1050・1051は土師器碗で、磨滅が著しく調整不明。1052は邢窯系の白磁碗で、口縁は玉縁、底部は蛇の目高台である。釉下に白化粧を施したとみられ、疊付から高台内は露胎で、疊付にかかるたる釉は削る。高台脇に施釉時の鉗子痕がある。1053は福建省産無釉陶器の鉢で、見込みに大きめの目跡が付く。

1054・1055はイスラム陶器で、外面に貼付文を施す。1054の胎土は淡い黄白色で陶質精良、釉は外面が濃いエメラルドブルーで釉層が厚く、内面が濃い水色半透明である。1055は軟質の胎土で、釉調は1054に近似する。

9世紀代の遺構と考えられる。

土坑SK159 Fig.105・106, PL.13

第6次調査区の南西隅に検出した土坑である。中央を南北にテニスコートの側溝が横切っていたため、この部分は後で調査した。後述の土坑SK160を切っている。東西にやや長い楕円形プランで、東西長3.5m、南北長2.7m。断面逆台形で、深さ70~80cm。底面は平坦で、底面の北側に径0.85mの円形の窪みを掘る。窪みの深さは20cmである。

SK159出土遺物 Fig.107・108, PL.21

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・景德鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器)、イスラム陶器、近世陶器(混入遺物)がコンテナ2箱、瓦17箱、銅製品・骨が少量出土した。

1056は須恵器双耳壺で、外面格子目叩き、内面ナデ。長方形縦耳を貼付し、内面を布で押さえる。1057は

土師器坏で底部へラ切り。口径13.4cm、器高3.4cm。1058は土師器碗、1059は黒色土器A類坏。

1060～1071は白磁である。1060・1061は邢窑系白磁碗の底部で、蛇の目高台。1060は全軸で豊付を軸剥ぎ、1061は高台脇から外底が露胎。1062～1071は景德鎮窯白磁である。1062～1069は輪状高台の皿で、1065・1066は玉縁口縁。体外面下半以下は露胎とする。1065は外底に墨書がある。1070は平底の皿で、外底軸剥ぎ、1071も平底の皿で、外面は露胎である。

1072～1084は越州窯系青磁である。1072は蛇の目高台の碗で全軸。体外面にヘラ押しを加える。1073は輪花口縁の碗。1074・1075は、体外面下半以下が露胎となる碗。1076は輪状高台の碗で、全軸。1077は貼り付け高台の碗で、全軸、目跡が高台内側に付く。体外面をヘラ押しし、見込みに毛彫りで施文する。1078は碗で外面に片切彫りで施文する。1079は脚で、脚内は露胎。1080は広口壺。1081は壺の底部で、アミで示した部分に粗砂粒を含む土を用いる。全軸で豊付は釉剥ぎする。1082～1084は軸下に白化粧を施す粗製越州窯系青磁の碗で、体外面下半は露胎。見込みには白土目が付着する。

1085～1087はイスラム陶器である。いずれも胎土は軟陶質で淡黄白色、釉は外面が濃いエメラルドブルー、内面が淡い水色の半透明釉である。

1088は丸瓦で斜格子目叩き。1089も丸瓦で、斜格子文が陰文の「平井」文字瓦である(901E型式)。

後世の遺物の混入があるが、第V期(10世紀後半～11世紀前半)の土坑であろう。

土坑SK160 Fig.105・106, PL.13・14

土坑SK159に切られる。第6次調査の遺構検出時に東西10m×南北6mの範囲に遺構が広がると考えて掘削した結果、いくつかの土坑に分かれることが判明した。東からSK160a, SK160b, 西側の大型土坑をSK160cとする。a→b→cの順に新しく、最後にSK159が3基の重なる部分に切り込まれている。SK160aの南にも円形プランの土坑があるが、ここからは遺物が出土していない。

SK160aは不整な円形プランで、径2.8m、断面逆台形で、深さ80cm。3基のうちでは最も深く、最も古い。底面は平坦な円形をなす。SK160bは円形プランで、径2.2m前後。断面逆台形で、深さ60cm。底面は平坦な円形である。SK160cは大型の土坑で、東西に長い隅丸長方形プランをなす。東西長7m弱、南北長6.1m。断面逆台形で、南壁の一部が段をなす。深さ70cmで、底面は平坦である。土層図に示すとおり、多量の遺物が含まれていた。SK159・160a～cの複数の土坑群は、いずれも廃棄物を埋めて処理するためのものと考えられ、同じ場所に繰り返しぴみ穴が掘られたことを意味するものであろう。その中には数十点のイスラム陶器片も含まれている。

SK160出土遺物 Fig.109～122, PL.21

底面近くで3つの土坑に分かれることが判明したため、遺物の大半はSK160として一括で取り上げている。土師器、須恵器、国産陶器、中国産陶磁器(邢窑系・景德鎮窯白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器)、イスラム陶器のほか、混入遺物として中世国産陶器・明代白磁・龍泉窯系青磁・近世陶磁器がある。あわせて土器類がコンテナ8箱、瓦類が396箱、鉄製品、土製品が少量出土した。

1090～1101は須恵器である。1090・1091は蓋で、口縁端部は断面三角形で内面に棱を持つ。1092・1093も蓋で返りは消失する。1094～1096は高台付壺、1097は平底壺、1098は壺の口縁、1099は壺の底部、1100は甕口縁部である。1101は壺で、外面格子目叩き、内面半円文の当て具痕がある。外底に木葉圧痕が付く。

1102～1133は土師器である。1102～1106は小皿で、底部へラ切り。板圧痕が付くものがある。口径は順に10.4cm、11.5cm、11.2cm、12.8cm、11.0cm。1107は脚付小皿で底部へラ切り。口径11.5cm。1108～1111は深い壺で底部へラ切り。口径は順に12.9cm、13.0cm、13.5cm、14.0cm。1112～1115は皿で底部へラ切り。口径は12.5cm、15.0cm、18.6cm、14.8cm。1116は浅めの壺で、口径13.0cmである。1117～1123は碗で、口縁が直線

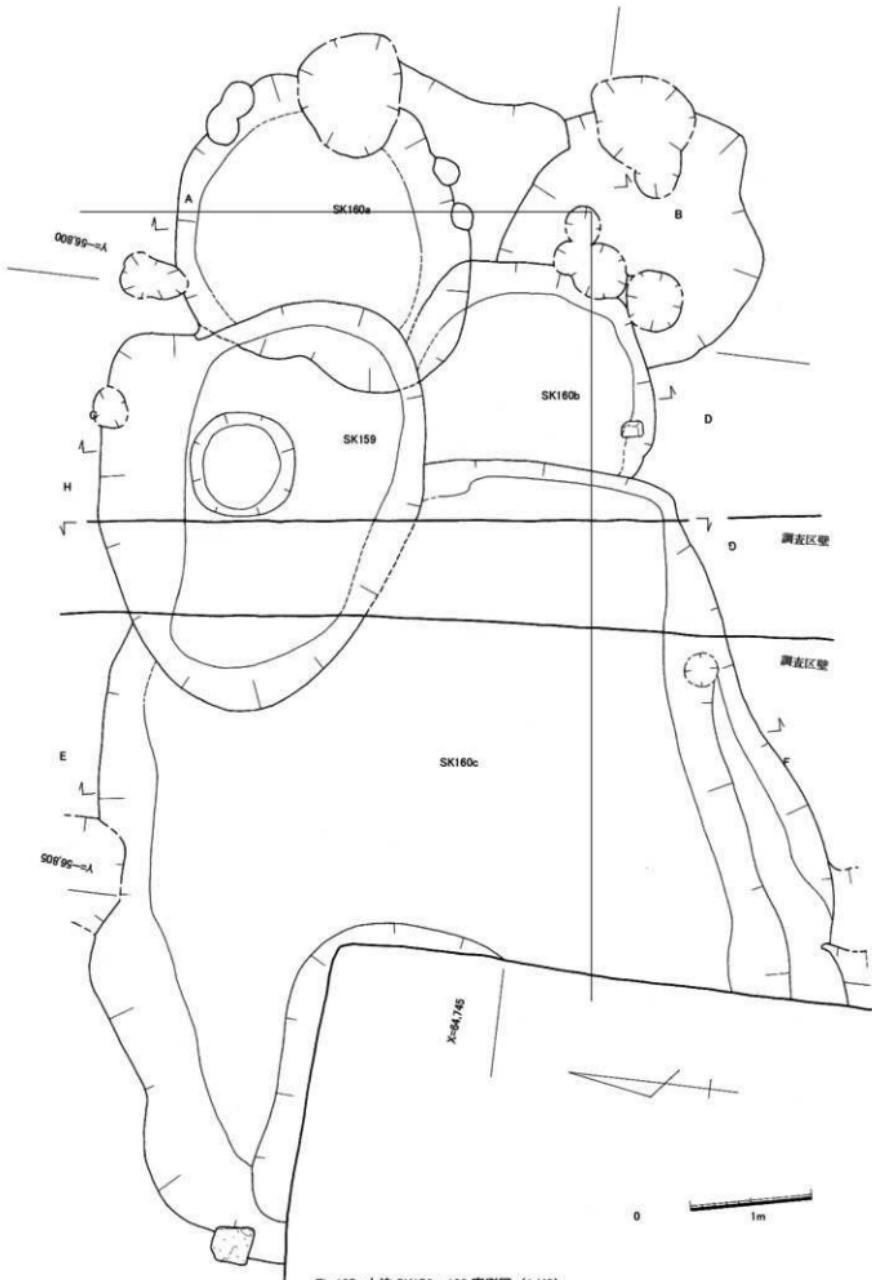


Fig.105 土坑 SK159・160 実測図 (1/40)

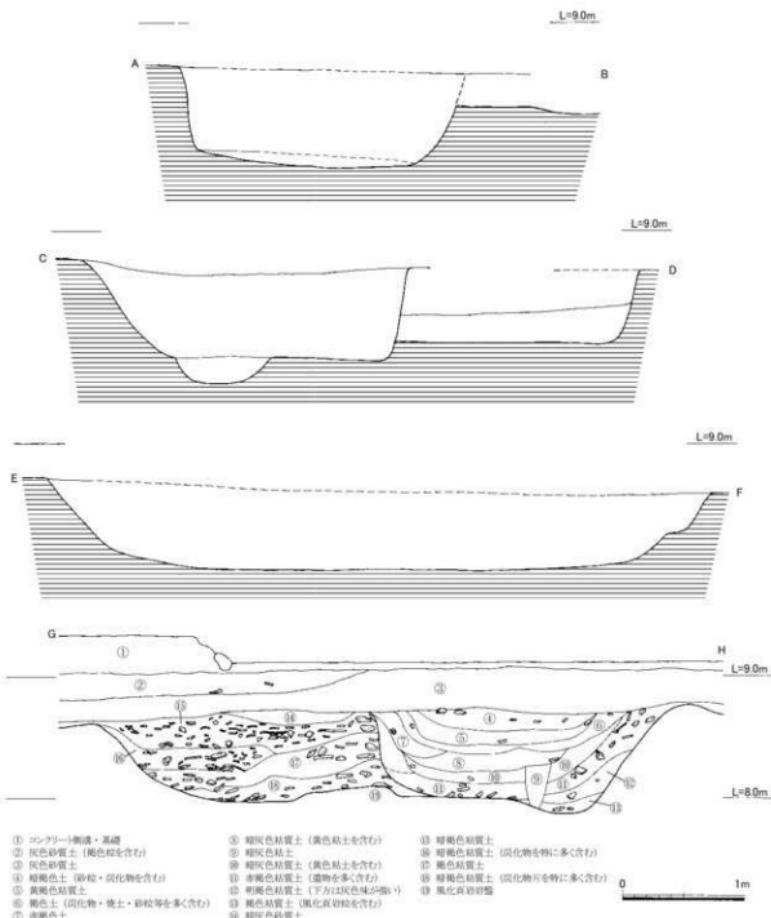


Fig.106 土坑SK159・160断面・土層断面実測図(1/40)

的に開くものと、内湾するものがある。1124～1126は黒色土器A類の椀で、内面に雑なヘラミガキ痕が残る。1127は大型の脚、1128は小壺である。1129～1133は壺で、胴部外面に縦刷毛目、内面にヘラ削り、口縁内面に横刷毛目を施す。

1134は猿投窯産の灰釉陶器皿。内底と外底は露胎である。1135は国産緑釉陶器で唾壺とみられる。1136～1155は邢窯系白磁である。1136～1143は玉縁口縁の碗で、底部は蛇の目高台。全釉で高台疊付は釉剥ぎする。1144は皿で小片のため口径は不確実。1145～1149は蛇の目高台の底部片。1150～1153は口縁部小片で、1150・1151は内湾口縁の皿、1152・1153は輪花口縁である。1152は白化粧を施す。1154・1155は輪状高台の底部片で、高台疊付から外底は露胎。1156～1163は景德鎮窯白磁である。1156～1158は碗の口縁部片で折り返しの玉縁が付く。1159は小碗で、小片のため径は不明瞭。1160は輪花口縁の碗。1161

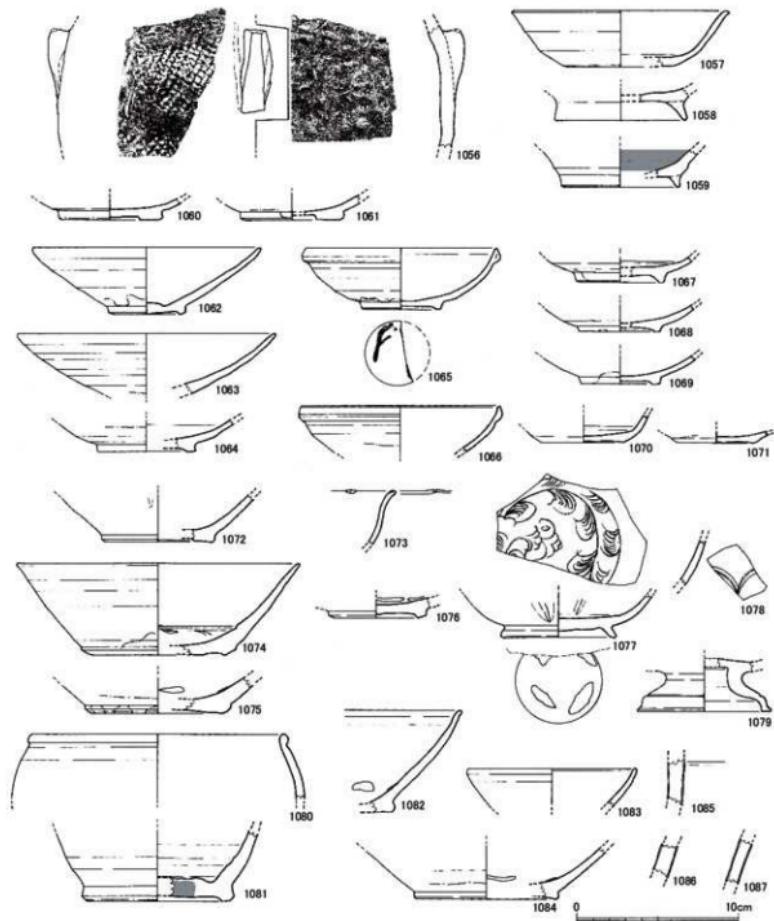


Fig.107 SK159 出土遺物実測図1 (1/3)

～1163は輪状高台の底部片で、基本的には体外面下半以下が露胎である。1162の外底にはハマ痕が残る。1164は白磁の大皿で、見込みに沈圈線が巡る。内面から高台疊付まで施釉し、高台内に砂目跡が付く。1165は明代白磁で、外底に点状の墨書がある。

1166～1207は越州窯系青磁で、1193までが浙江省産、1194以下は福建省産である。1166～1172は蛇の目高台の碗で1171・1172以外は全軸。1171・1172は見込みに白土目が付く。1173・1174は輪花口縁の碗。1175～1182は碗の底部である。1175～1177は削り出しの浅い輪状高台で全軸。見込みの目跡は整然と並ぶ。1178～1180は輪状高台で全軸。1181・1182は平底で体外面下半から外底は露胎である。1183・1184は

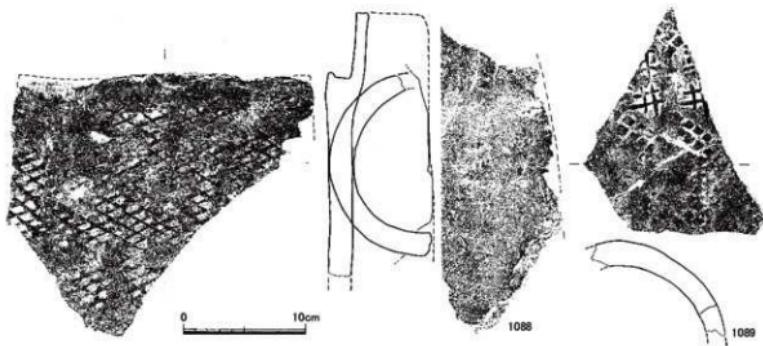


Fig.108 SK159出土遺物実測図2 (1/4)

厚手の小碗、1185は皿、1186は脚で外底まで施釉する。1187は合子蓋、1188は壺蓋、1189・1190は香炉の蓋で、内面まで施釉し口縁を釉剥ぎする。1191は壺で頸部内面まで施釉する。1192は壺の底部。1193は水注の胴部片で、外面に片切彫りで施文する。1194～1203は粗製の碗皿類で、軸下に白化粧を施し、体外面下半から高台は露胎。見込みに粗い白土目が付着する。1194～1199は碗で、円盤状高台。1194は外底を削って蛇の目高台風とする。1195は輪花口縁。1200・1201は皿で輪花口縁。1202・1203は平底坯で褐彩を施す。1204は蓋、1205は水注で口縁に孔があく。1206は盤口壺、1207は壺。

1208～1213は褐釉陶器である。1208は盤口水注で、接合しないが把手と外耳がある。頸部内面の途中まで施釉する。1209は盤口壺の口縁部小片。1210は壺で体内面は露胎である。1211は四耳壺で全釉。1212は甕の口縁部小片で、内外面に施釉し口縁は釉剥ぎする。1213も甕の胴部小片で、外面に平行タタキを加える。1214～1218は福建省産無釉陶器で、いずれも捏ね鉢であろう。1215は底部に粗砂粒を含む土を使用する。

1219・1220・1222・1223は長沙窯黄釉陶器である。1219・1220は同一個体の水注で、肩部に貼付文を施す。外面底部付近まで施釉し、内面は露胎。1222・1223は二彩水注である。1221は華北産白釉緑彩碗。

1224～1226は朝鮮半島産の無釉陶器である。1224・1225はやや上げ底の平底、1226は胴部片で、いずれも横ナデ調整。1227は朝鮮王朝陶磁器の緑褐釉陶器で、口縁部片。横ナデ調整である。混入品。

1228は中世国産黄釉陶器(瀬戸焼)の菊皿である。混入品であろう。

1229～1238はイスラム陶器である。1238を除き体外面に凹線が多条に巡り、1229・1231・1232・1234は貼付文を施す。胎土は淡い黄白色の軟陶質で、外面に濃いエメラルドブルーの厚い透明釉を、内面に淡い水色の半透明釉をかける。

1239は土製品で、支脚か。1240～1242は土錘である。1243は鉄釘で、断面方形である。

1244～1248は素文磚。幅は15.0cm前後で揃うが、厚みは5.5cm?7.5～8.0cmの二群に分かれる。

1249～1268は軒丸瓦である。1249～1254は全て鴻臚館式(223a型式)である。凸面はナデ消されているが繩目叩きである。瓦当の厚みに差がある。1255・1256は224a型式で、外区珠文は32を数える。1257は内区の花弁数が2→3→1→2と変わるもので、外区珠文は20ないし21個を数え、中房は1:6である。1258は143型式である。1259～1261は082A型式で、中房先端に珠文様の小さな突起があるもの(1259、1260は突起が剥がれている)と、ないもの(1261)がある。1262は082A型式に類似するが、汎型の外区部分を彫り直しており、外区の高さと珠文の大きさ・数が異なり、瓦当径がやや小さい。1263～1268は082B型式で、瓦当面の汎キズの特徴が

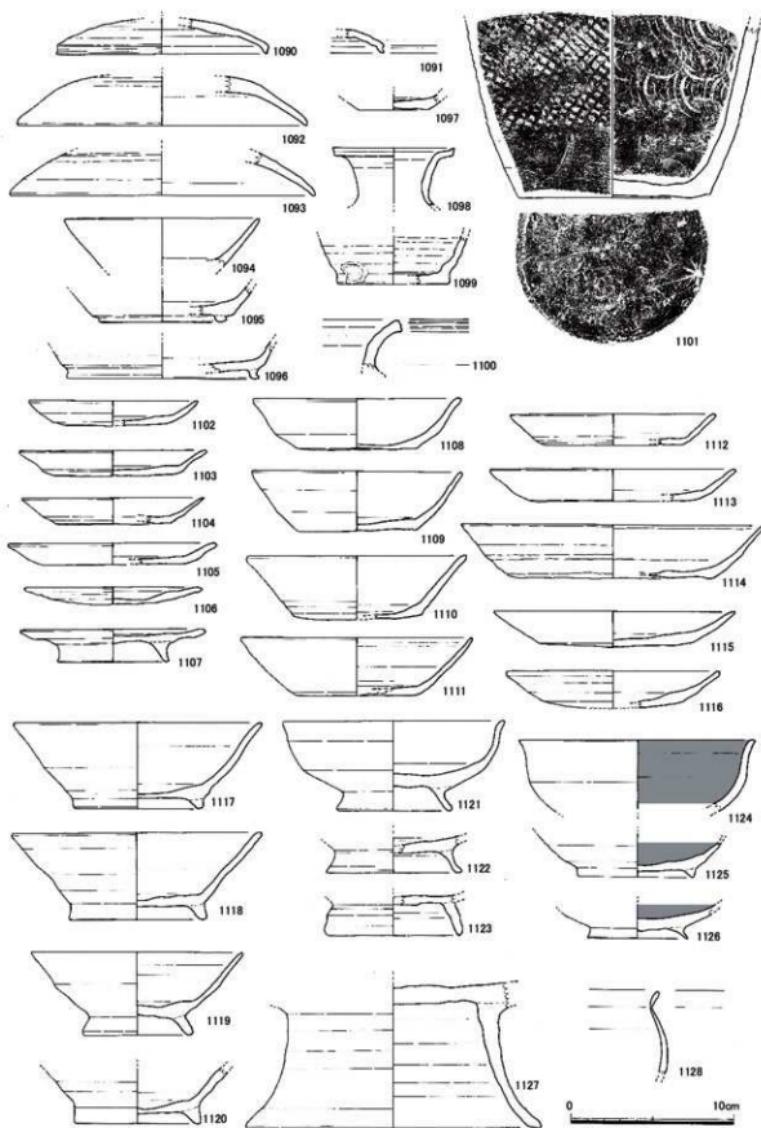


Fig.109 SK160 出土遺物測量圖1 (1/3)

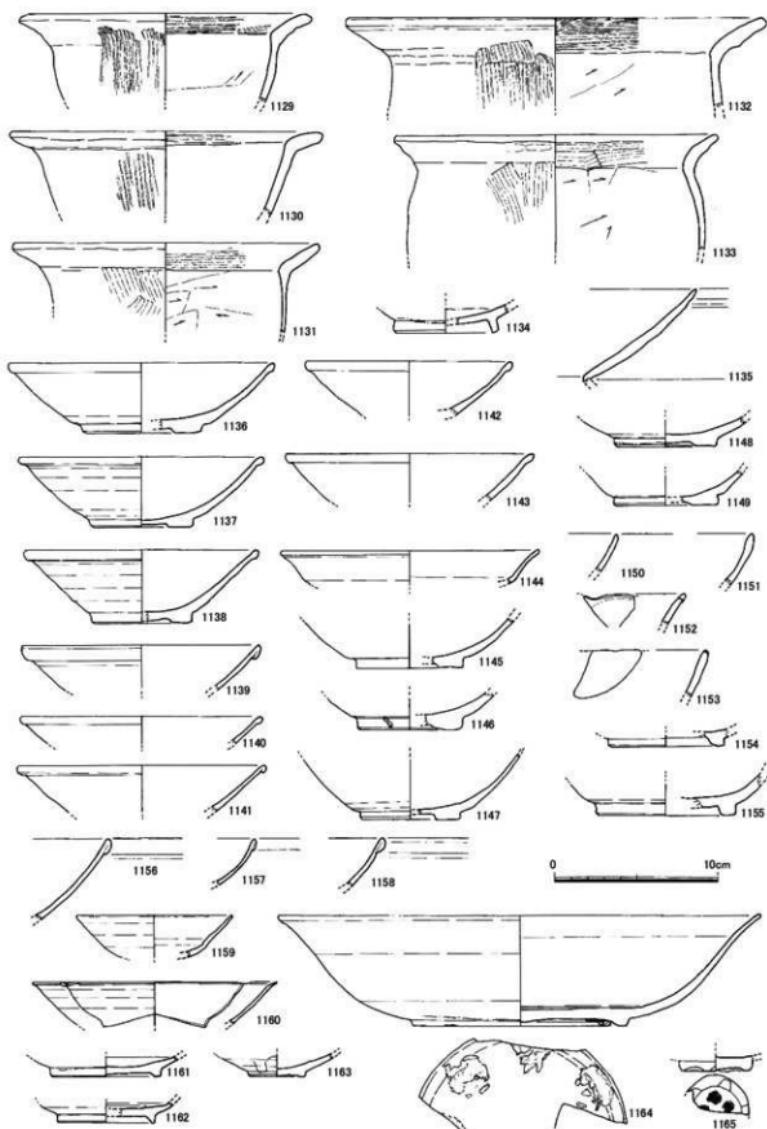


Fig.110 SK160 出土遺物測量圖2 (1/3)

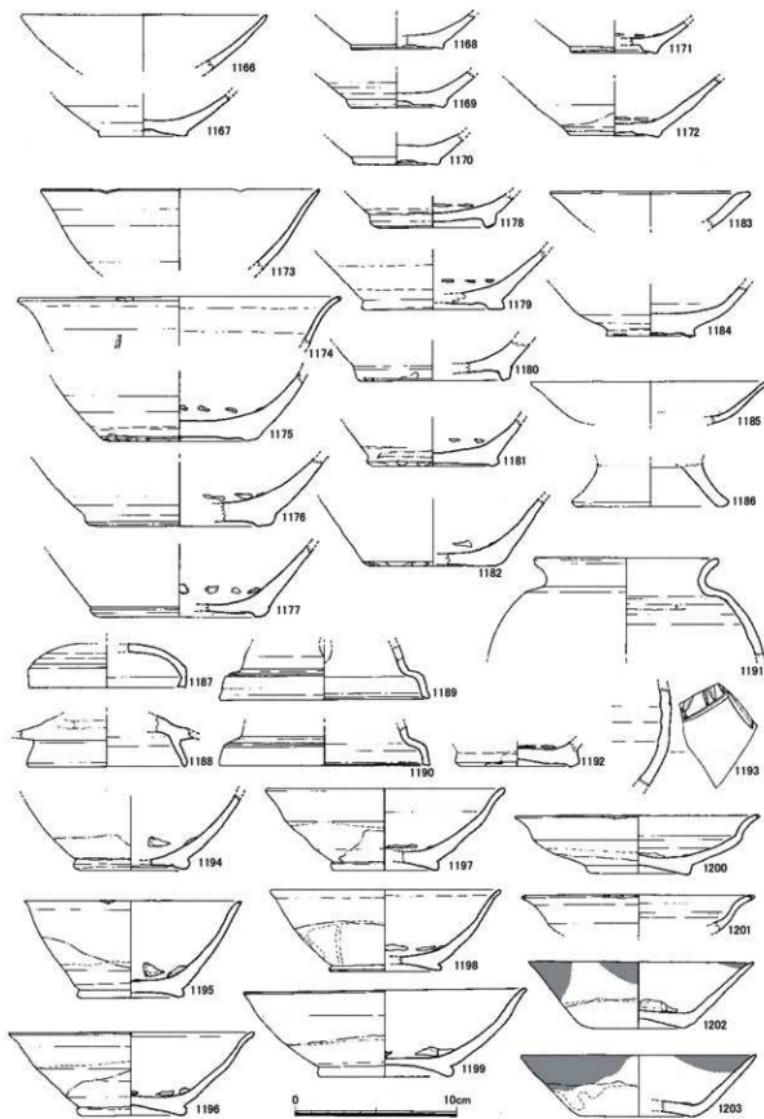


Fig.111 SK160出土遺物実測図3 (1/3)

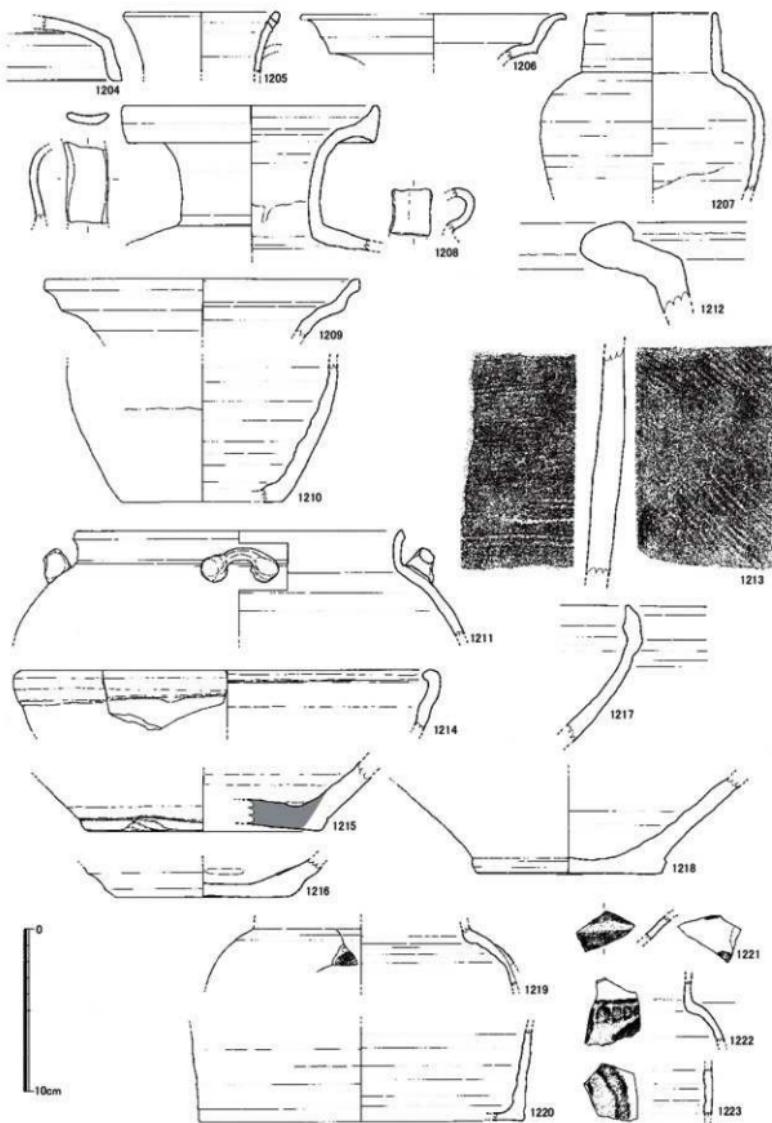


Fig.112 SK160出土遗物实测图4 (1/3)

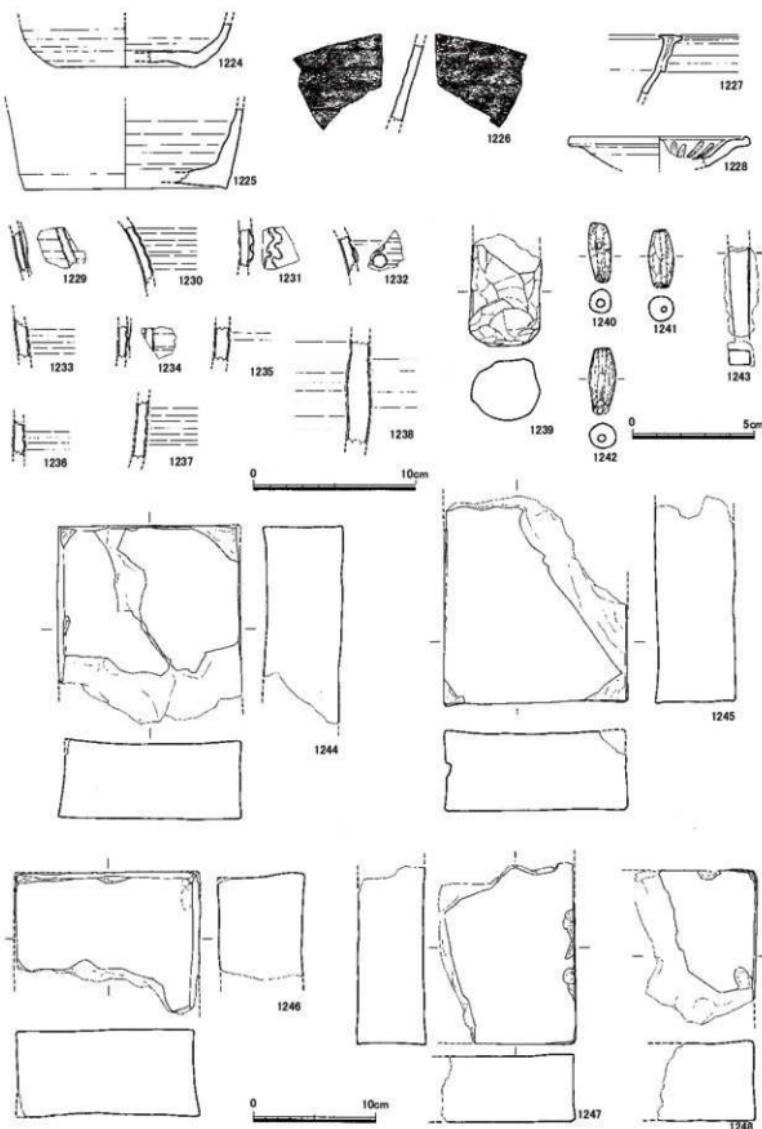


Fig.113 SK160出土遺物実測図5 (1224～1242は1/3、1243は1/2、他は1/4)

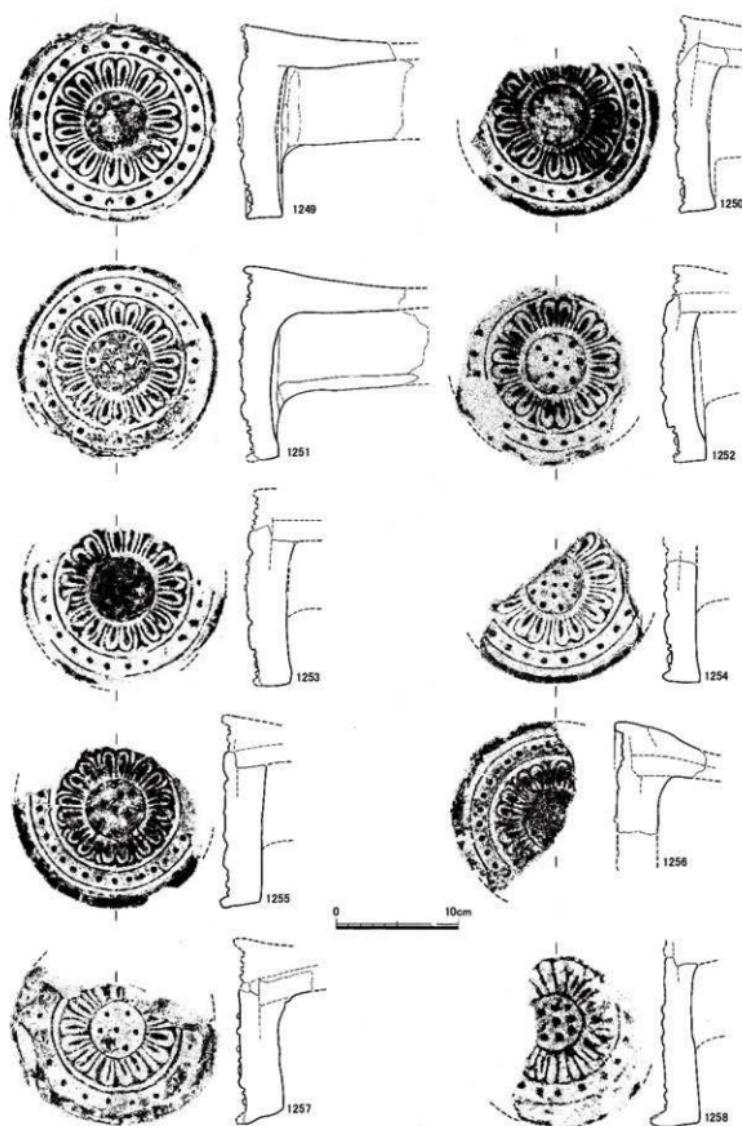


Fig.114 SK160出土遗物实测图6 (1/4)

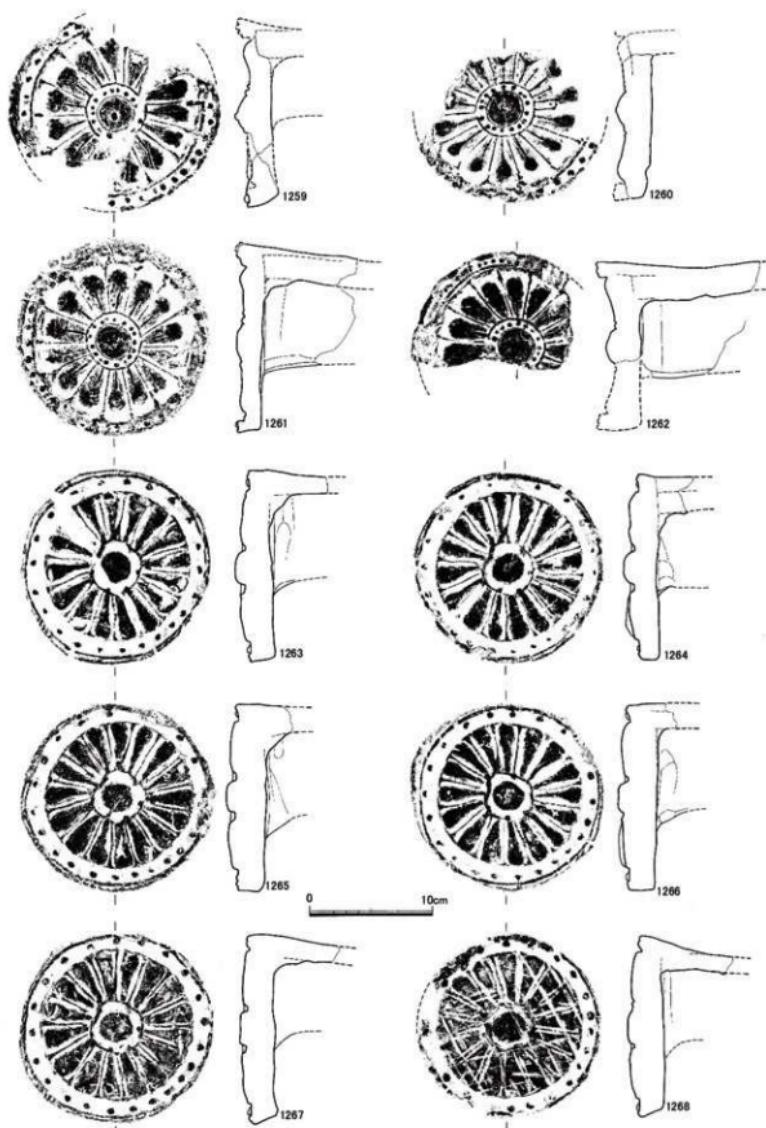


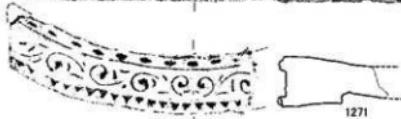
Fig.115 SK160出土遗物实测图 7 (1/4)



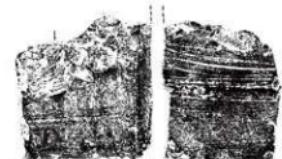
1269



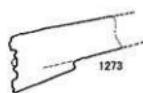
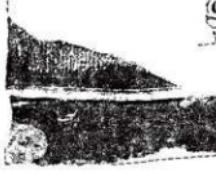
1270



1271



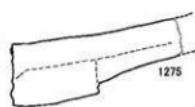
1272



1273



1274



1275

0

10cm

Fig.116 SK160 出土遺物実測図8 (1/4)

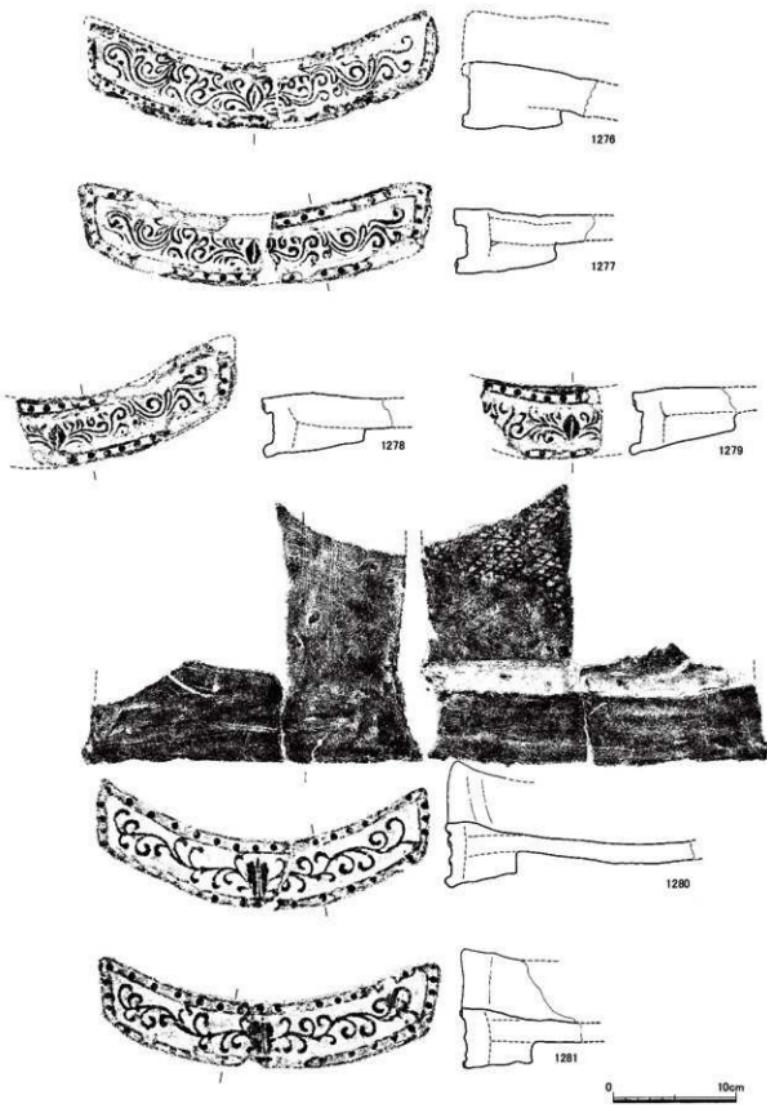
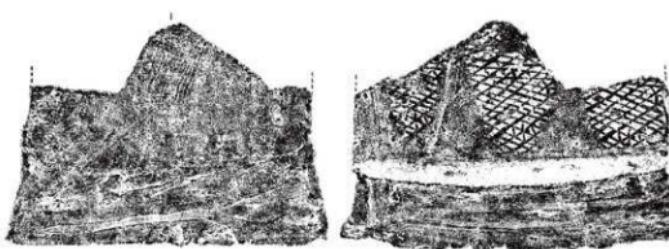
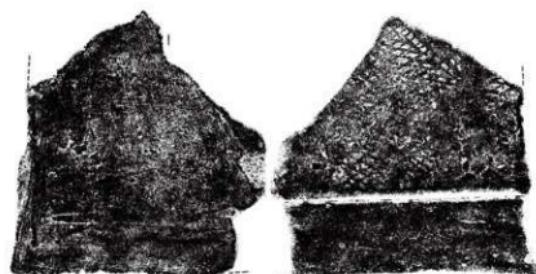


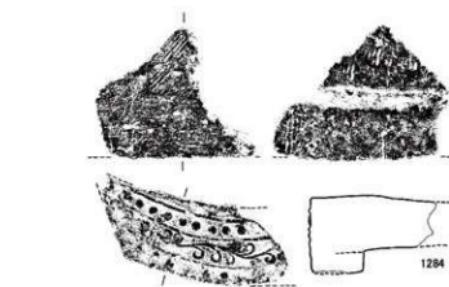
Fig.117 SK160出土遗物实测图9 (1/4)



1282



1283



1284

0 10cm

Fig.118 SK160 出土遺物実測図 10 (1/4)

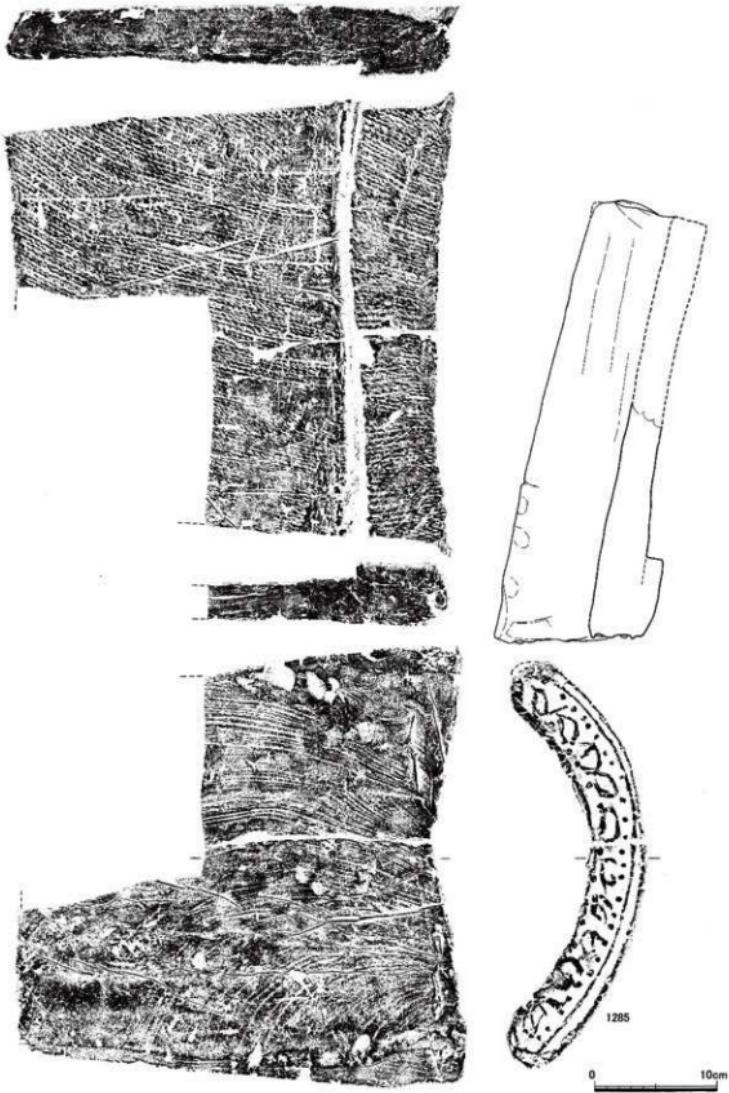


Fig.119 SK160 出土遺物実測図 11 (1/4)

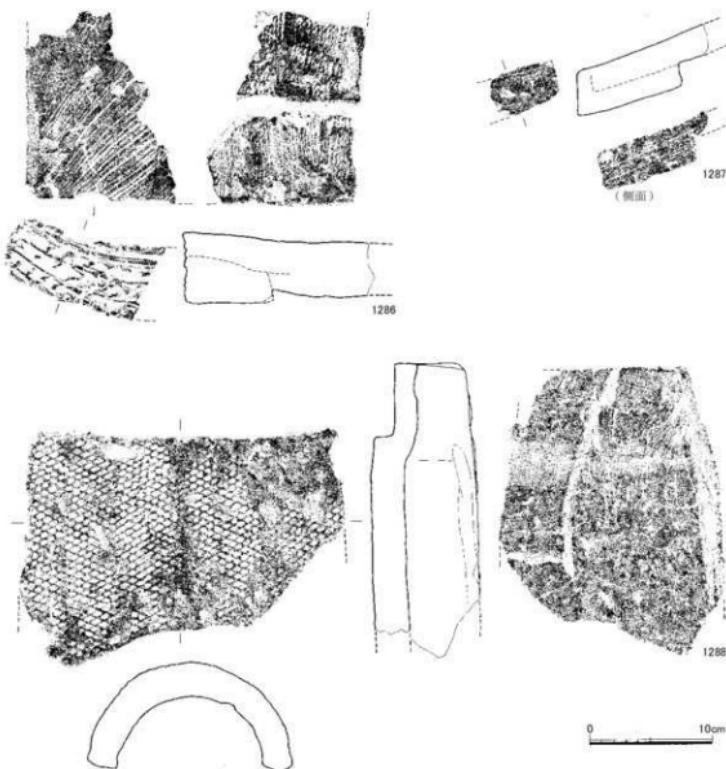


Fig.120 SK160 出土遺物実測図 I2 (1/4)

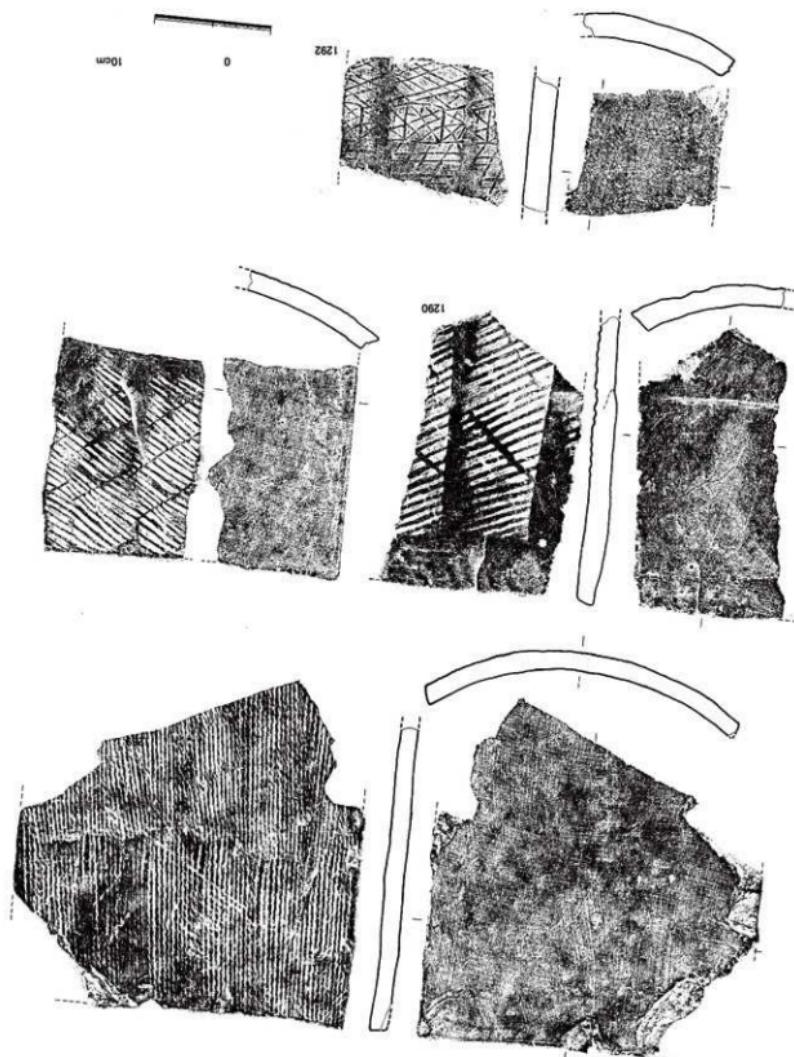
ら、同じ瓦型を用いた瓦当と考えられる。

1269～1287は軒平瓦である。1269は600A型式。1270は小片で不確実だが600A型式か。1271は鴻臚館式(635型式)で、凸面は縄目叩きをナデ調整。1272～1274は下外区右端の凸掘齒文が内向きの鴻臚館式(635A型式)で凸面は縄目叩き。1275は657b型式。1276は662Aa型式。1277～1279は662Ab型式。1280～1283は663型式で、凸面に斜格子目叩きを施す。1284は688Aa型式で凸面の頸の部分まで縄目叩きを施す。1285は幾何学的な文様を瓦当に施す775型式で、頸を含めた凸面全体に縄目叩きを施している。1286も瓦当に幾何学的な文様を雑に施すが、775型式とは異なる。1287は瓦当面にヘラ削りを加えており無文。側面もヘラ削りする。

1288は丸瓦で斜格子目叩きを施す。1289～1292は平瓦で、1289は縄目叩き、1290・1291は平行叩き、1292は斜格子目叩きを施す。1293～1295は熨斗瓦、1297は面戸瓦である。1296は平瓦で、「伊賀作瓦」の文字瓦である。1298は縄目叩きの丸瓦で、乾燥前に線刻文字を入れている(Fig.16-65参照)。

第V期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構である。

Fig.121 SK160 出土漆绘陶器图 13 (1/4)



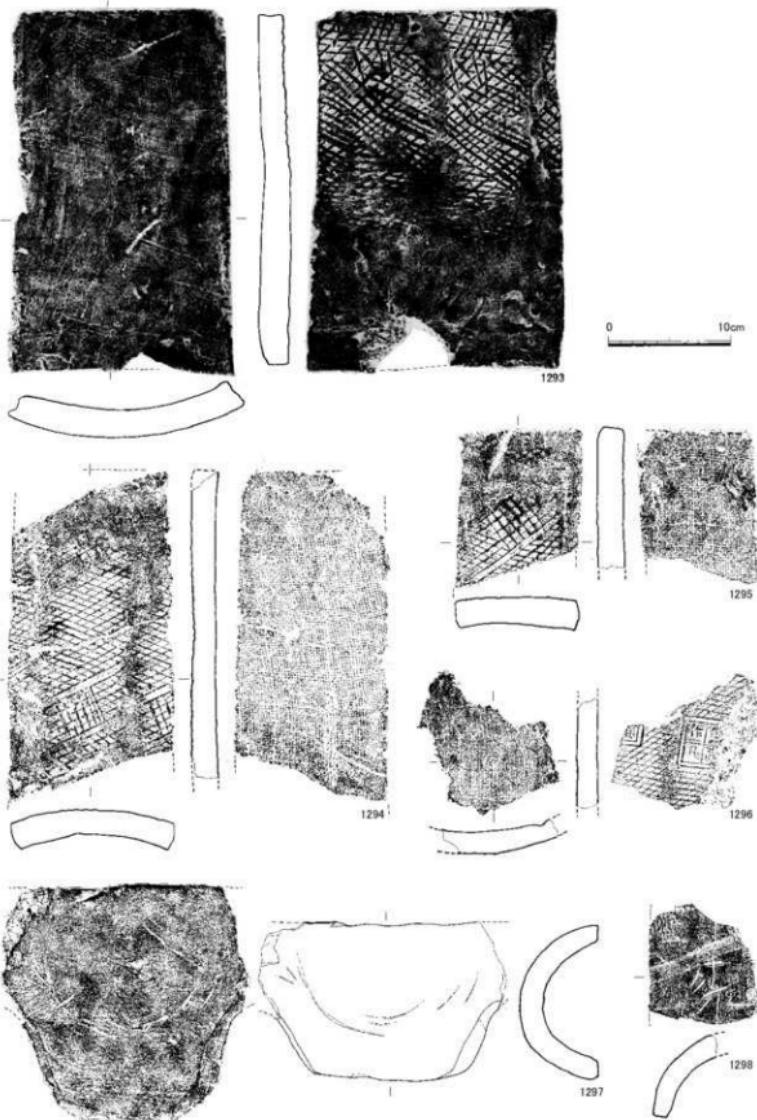


Fig.122 SK160 出土遺物実測図 14 (1/4)

土坑SK207 Fig.123, PL.15

第6次調査区の北東部に位置する。南北に伸びる浅い溝状の窪みの中に瓦が堆積した遺構で、西辺が直線的な形状をなしており、建物基壇(雨落ち溝)の痕跡を示す可能性もあると考えたが、これに対応する建物関係遺構は確認されず、不確実である。南北端ともに近世遺構に切られ、当遺構にも近世遺構3基が切り込む。南北に蛇行気味に伸びる溝状の浅い窪みで、南北長7.0m以上、東西幅1.4~2.5mを測る。横断面形は浅い皿状を呈し、深さ10~15cmで、窪み内には多数の瓦が堆積していた。

SK207の主軸方位は座標北から 5° 前後東偏するが、鴻臚館跡第II・III期建物群の主軸は $1^{\circ}30'$ 東偏であり合致していない。ちなみに第I期建物群の主軸方位は 5° 東偏でSK207と同じであるが、出土遺物が示す時期からみて第I期建物群に伴う遺構とは考え難い。

SK207出土遺物 Fig.124・125

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窑系白磁、越州窑系青磁、陶器)がコンテナ1箱、瓦が26箱出土した。

1300~1309は土師器である。1300は皿で底部へラ切り。復元口径12.8cm。1301~1303は壺で、底部へラ切り。復元口径は順に12.0cm、12.8cm、13.0cm。1301の口縁には油煙が付着する。1304~1305は椀である。1304は口縁が真っ直ぐ開く椀、1305は口縁が内湾し、高台がやや高い。1306は甕で、胴部外面刷毛目、内面へラ削り調整。1307~1309は黒色土器A類で、1307~1308は椀、1309は壺である。

1310~1313は越州窑系青磁である。1310は碗で、低い削り出し高台。外面下半から高台は露胎で、見込みに白土目が付く。1311は香炉の脚か。全軸で疊付を釉剥ぎする。1312は壺の底部か。側面を面取りして多角形の容器をしている。高麗青磁の可能性もある。1313は粗製の越州窑系青磁で、円盤状高台内を削って蛇の目高台風とする。外面下半は露胎で、見込みに白土目が付く。1314は福建省產無釉陶器

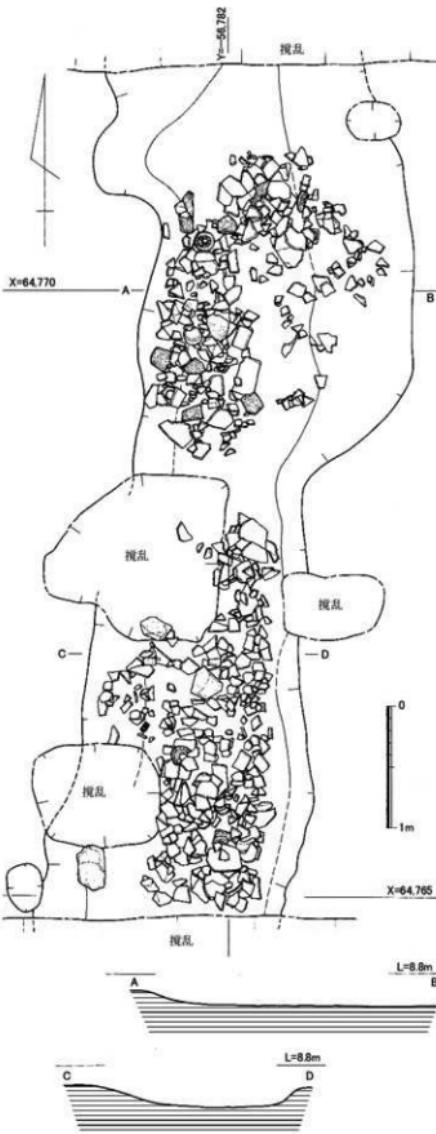


Fig.123 土坑SK207実測図(1/40)

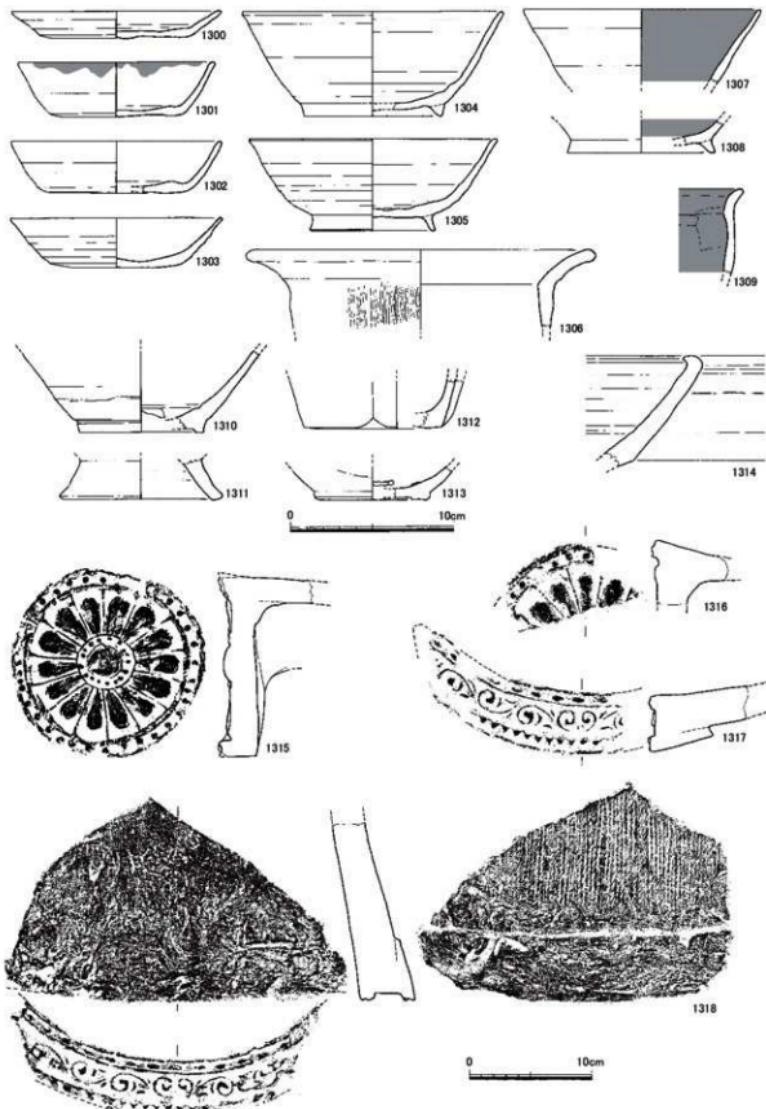


Fig.124 SK207 出土遺物実測図1 (1300～1314は1/3、他は1/4)

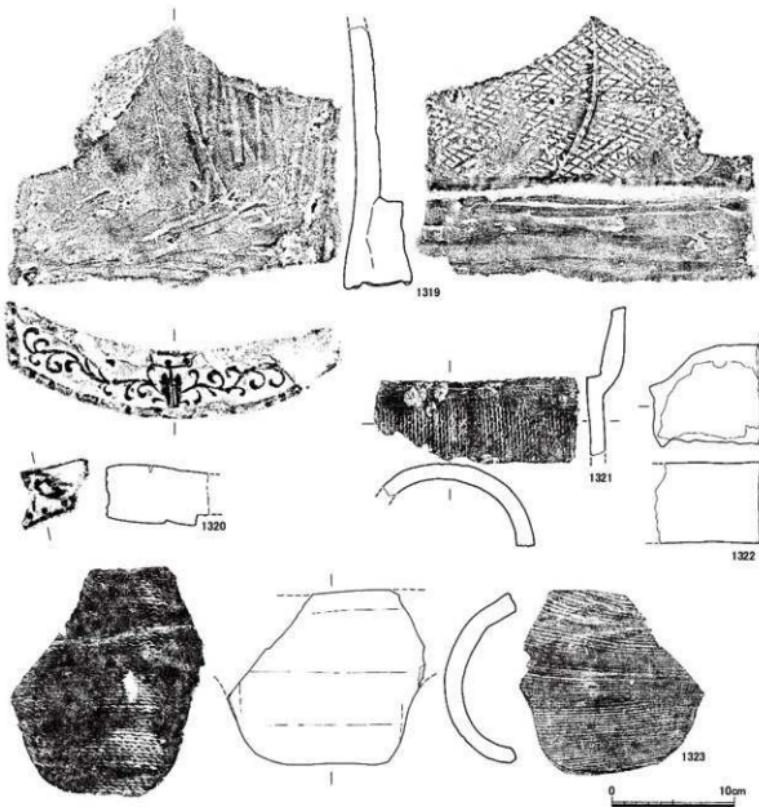


Fig.125 SK207 出土遺物実測図 2 (1/4)

の鉢である。口縁外面に重ね焼きの痕跡かとみられる黒色の付着物がある。

1315・1316は軒丸瓦で、ともに082A型式である。瓦の凸面はナデ調整しており、叩き目文様は消されている。1317～1320は軒平瓦である。1317・1318はいずれも鴻臚館式(635型式)で、瓦の凸面は縄目叩きである。1319は軒平瓦663型式。瓦凸面の叩きは斜格子に短線を加えた文様で、663型式に共通する叩き目文様である。1320は軒平瓦775型式で、SK160に完形品がある(Fig.119-1285)。1321は玉縁式の丸瓦の小片で、凸面に縄目叩きを施す。1322は素文磚の残欠である。1323は面戸瓦で、凸面縄目叩きである。円筒粘土を二分したものに加工を加えており、焼成前の丸瓦を用いて作成したことが分かる資料である。

第IV期(9世紀後半～10世紀前半)の遺構であろう。

土坑SK208 Fig.126, PL.15

第6次調査区北端で一部を確認し、主要部分は第7次調査区において調査を実施した。東西に長い隅丸長方形の端正なプランの土坑で、南北長3.5~3.8mで西側がやや広く、東西長4.1~4.4mで北へ少し広い。断面逆台形で、南壁の立ち上がりがやや急である。深さ60cmで、底面は南北長約3m、東西長3.3~3.6mの隅丸長方形をなす。土坑内からは多数の遺物が出土しており、ゴミ捨て用の土坑と考えられる。

底面中央に1.85m×2.0mの不整円形の掘り込みがあり、この円形掘り込みの西側に寄せて方形の木柱を立て、木柱の根元を径30~50cmの躰で押さえている。土層図ではSK208に切り込む後世の遺構は確認できていないが、土質や類例などから古代の遺構とは考えられず、おそらく土坑SK208に重複して近世もしくは近代の柱穴が掘り込まれているものと考えられ、角柱を立てた不整円形の掘り込みはこの柱穴の底面に相当するものとみられる。遺構からは近世以降に下る遺物は出土していないが、Fig.131-1434の瓦質土器捏ね鉢など、中世の大型土器が2点含まれている。

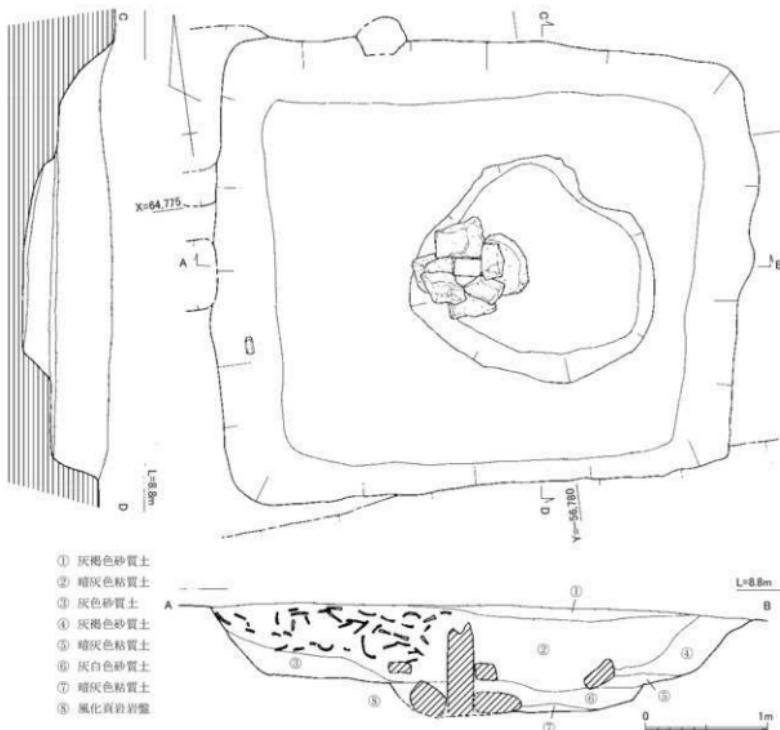


Fig.126 土坑 SK208 実測図 (1/40)

S K 2 0 8 出土遺物 Fig.127~134, PL.22

土師器・須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・景德鎮窯白磁・越州窯系青磁・陶器)、朝鮮半島産陶器の他、中世国产陶器、土製品が合わせてコンテナ7箱、瓦が103箱、石製品・土製品等が少量出土した。

1324~1342は土師器である。1324~1331は皿で底部へラ切り。口径は順に10.4cm、11.0cm、10.2cm、10.6cm、10.0cm、10.4cm、10.0cm、11.3cm。1332は高台付き皿で口径14.2cm。1333~1335は坪で底部へラ切り。口径は12.4cm、12.8cm、12.4cm。1336~1337は碗である。1338~1341は黒色土器A類楕碗で、磨滅するが1340内面に雑なヘラミガキが残る。1342は土師器甕で、磨滅して調整不明。

1343~1368は景德鎮窯白磁である。1343は大形の碗と思われ、内底に白土目が付く。1344~1355は碗である。1344・1345は玉縁口縁で、1345は高台内側まで施釉する。1346は体外面に白堆線を入れ、高台外側まで施釉する。1347・1348は体外面に削り出しによる鎧蓮弁文を施す珍品で、1347は高台の外側まで施釉し、外底に輪状のハマ痕が残る。1349・1350は体内面に圈沈線が巡る。1351は玉縁口縁の小碗である。1352~1354は体外面にヘラ押しを加える碗である。1355は底部で、外底に墨書がある。花押か。1356~1362は皿で、1356~1358は輪花口縁、1359は稜花口縁である。1360は腰折れの皿で、見込みが一段産む。1361・1362は平底の皿の底部片である。1363は蓋で、口縁端部にヘラ押しの刻みを入れる。1364~1366は小壺で、1364は体部外面からヘラ押しを加え、1365は外耳が付き、1366は外面に施文した文様の一部が残る。1367・1368は碗の底部を打ち欠いて遊具としたものである。1369は用途不明。リング状に成形し、受け部の2ヶ所に穿孔する。釉は残っていないが極めて精良な白色の胎土で、白磁とみられる。

1370~1409は越州窯系青磁である。1370~1372は蛇の目高台の碗で、全釉。1376は平底の小碗、1373~1375・1377~1379は低い輪状高台の碗で、1380・1381は高め、1382・1383はさらに高めの輪状高台の碗である。1373~1375・1380・1382・1383は全釉、他は体外面下半以下を露胎とする。1384~1386は平底碗。体外面下半以下露胎である。1387は体外面下半以下は露胎で、体内面にかなり大きい目跡があり、広東省産か。1388・1389は越州窯系の花文碗で、片切彫りと毛彫りで施文する。1390~1396は碗で、全釉で目跡は外底に付く。1390~1392は見込みに圈沈線が巡る。1393は片切彫りと毛彫りで、1394はヘラ彫りで、それぞれ内面に花文を施文する。1397は小型壺蓋で、天井頂部に鈕が剥げ落ちた痕跡がある。下端に白色目土が残る。1398は稜花皿。1399~1402は水注ないしは壺である。胴部内面を除き施釉する。1403~1409は釉下に白化粧を施す粗製の越州窯系青磁で、いずれも体外面下半から高台は露胎。見込みには粗い白土目が付く。1403は円盤状高台に削りを加えて蛇の目高台風にする。1404・1405は輪花口縁である。1408は外底に糸切り痕が残る。1409は灯蓋で口縁外面まで施釉する。

1410は褐釉陶器の鉢で外面にヘラ彫りで施文する。受け部を釉剥ぎする。1411は長沙窯系青磁碗の底部片で削り出し高台。外面露胎。1412は大形の青磁鉢である。平底で、口縁を折り返す。釉は全て剥落する。1413はすり鉢で、内外面露胎である。産地、時期は不明。

1414~1418は福建省産無釉陶器である。1414~1417は捏ね鉢か。1418は薬研(茶碾輪)である。

1419~1433は朝鮮半島産陶器である。1419~1421は口縁部で外反する。1422・1423は肩部で頸部に三角突帯を貼付する。1424~1432は胴部、1433は底部で平底である。1423・1424・1426~1430は格子目叩き、1431・1432は平行線叩きを外面に施す。内面の当て具痕は、太い平行線文様の1428・1429・1431・1432、細い弧状の平行線文様にナデを加える1423・1424・1426・1427、松葉様の

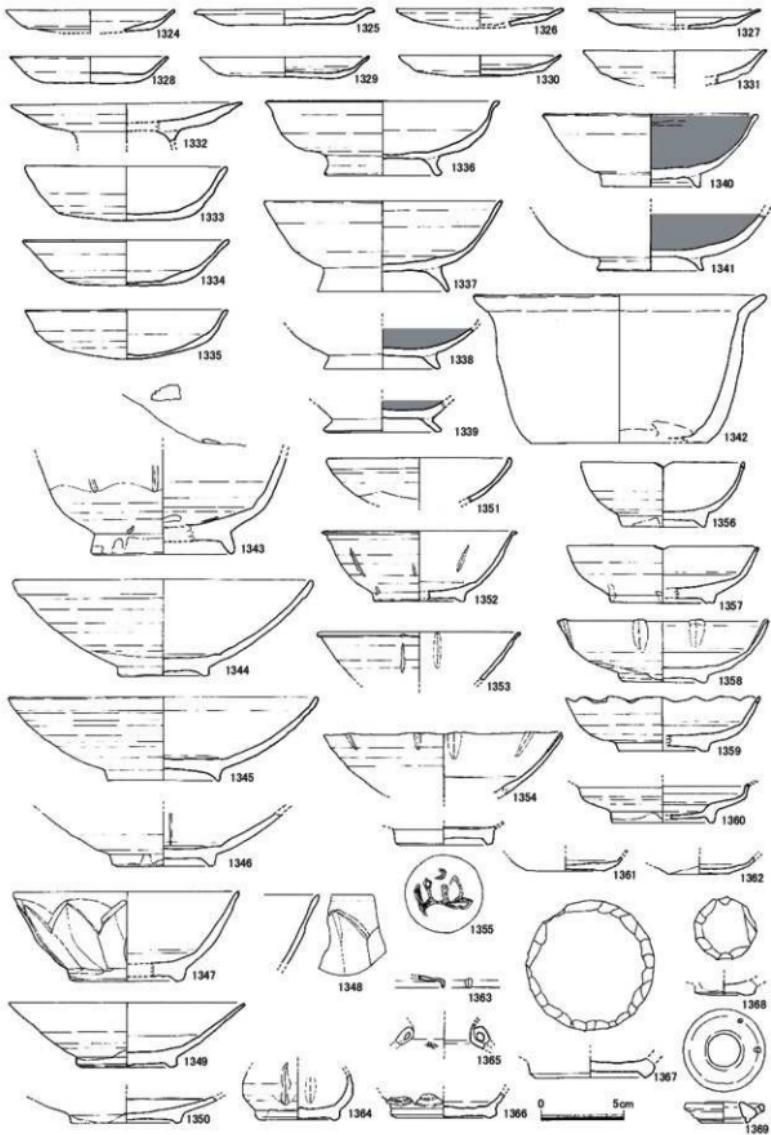


Fig.127 SK208 出土遺物実測図 1 (1/3)

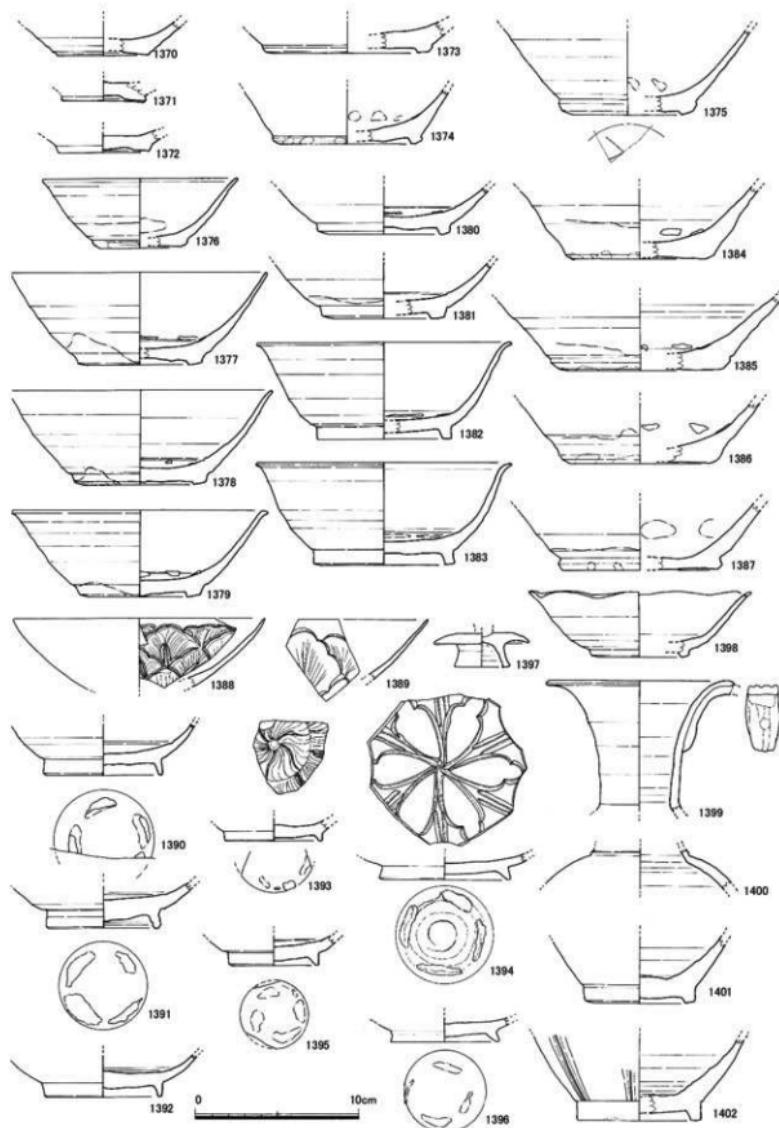


Fig.128 SK208出土遺物変遷図2 (1/3)

1430がある。他は内外面を横ナデ調整する。

1434は中世国産陶器で、瓦質陶器捏ね鉢。片口が付く。他に須恵質土器の捏ね鉢1点がある。

1435～1438は軒丸瓦である。1435は鴻臚館式(223型式)。1436は082A型式。1437は243a型式で、福岡市西区の女原瓦窯出土資料により型式設定。1438は135Bb型式で、SK243でも出土している。1439～1443は軒平瓦である。1439は鴻臚館式(635型式)、1440・1441は666B型式、1442は

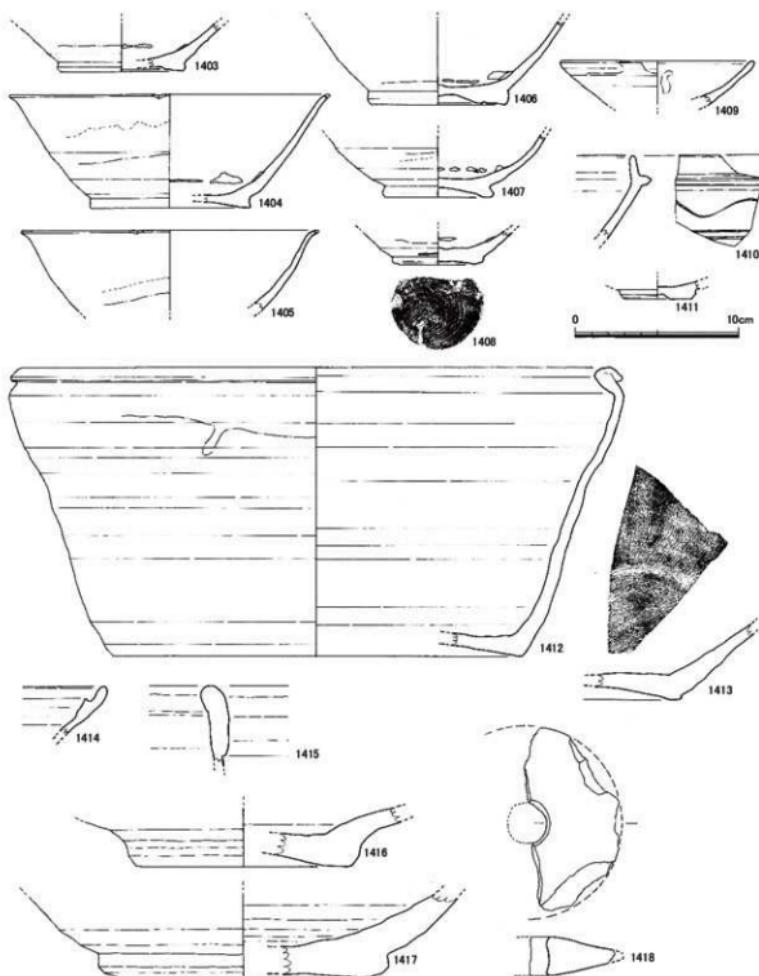


Fig.129 SK208 出土遺物実測図3 (1/3)

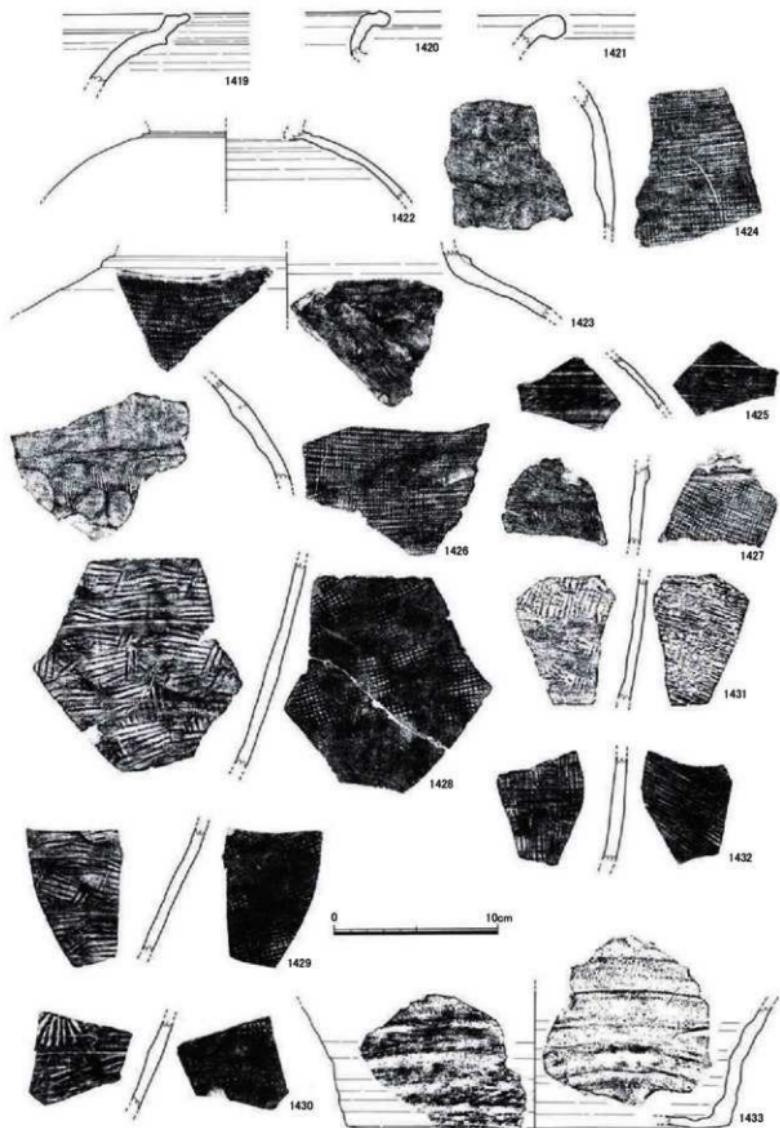


Fig.130 SK208出土遗物实测图4 (1/3)

657b型式、1443は662型式である。1444・1445は丸瓦である。ともに凸面に大きめの斜格子目叩きを施す。1445は全長32cm、玉縁長4.5cm。1446・1447は平瓦である。凸面は斜格子目叩きで、1447は格子に縦線が加わる文様である。

1448～1464は文字瓦で、1449・1450・1453・1454・1457は丸瓦、他は平瓦である。1448は「平井」の左字(901J)である。1449・1452は「賀」で、複線斜格子目の同じ叩きである。1450は「賀」のくずし文字で、複線斜格子目叩き。1451は「賀」で単線の斜格子目叩き。1453は「介」(912型式)で単線の斜格子目叩き。1454～1461は「佐」で、いずれも単線の斜格子目叩きに文字の空間を設ける。

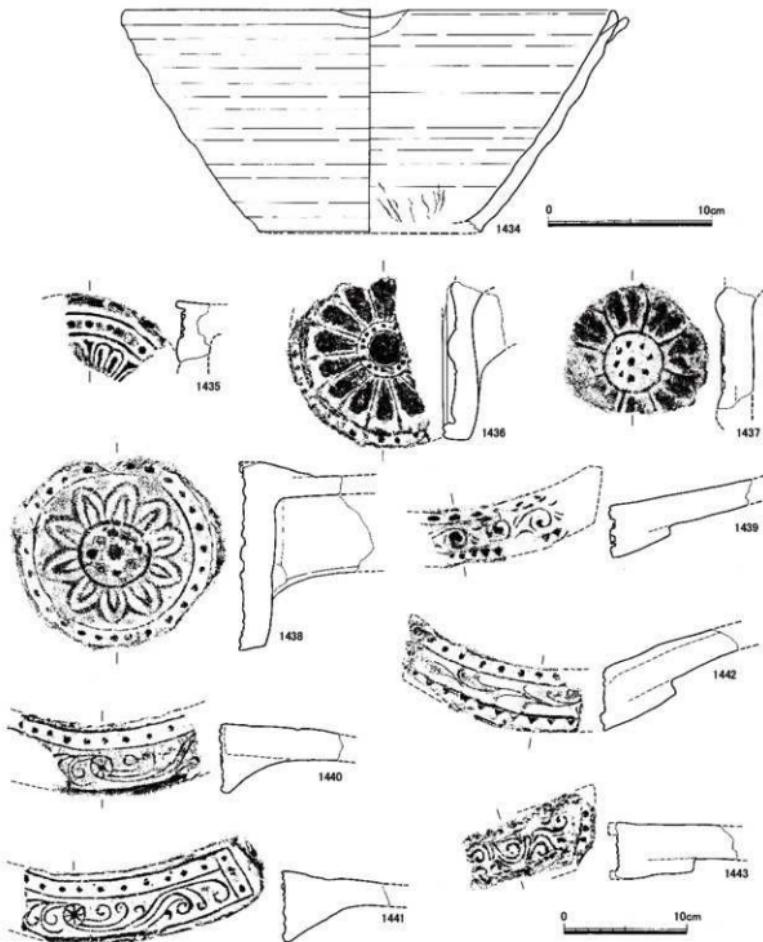


Fig.131 SK208 出土遺物実測図5 (1434は1/3、他は1/4)

1454～1456の902E型式と、1457～1461の902J型式の2種類がある。902J型式は未図化分が3点ある。1462は「佐」の左字(902F型式)である。1463は「伊貴作瓦」、1464は釣り針状の文様を入れる。

1465・1466は瓦玉で、未掲載の瓦玉が他に6点ある。1467はガラスの小破片で、周辺から剥離を加えて円形に整形されている。緑色で気泡が入る。1468は取瓶である。1469・1470は土錘。1471は滑石製品で、紡錘車もしくは遊具か。1472・1473は砥石である。

遺構説明で述べたように後世遺構が切り込んでいる可能性が高いが、1434等の後世遺物の混入は少なく、出土遺物はある程度の一括性は保っているものと考えられる。

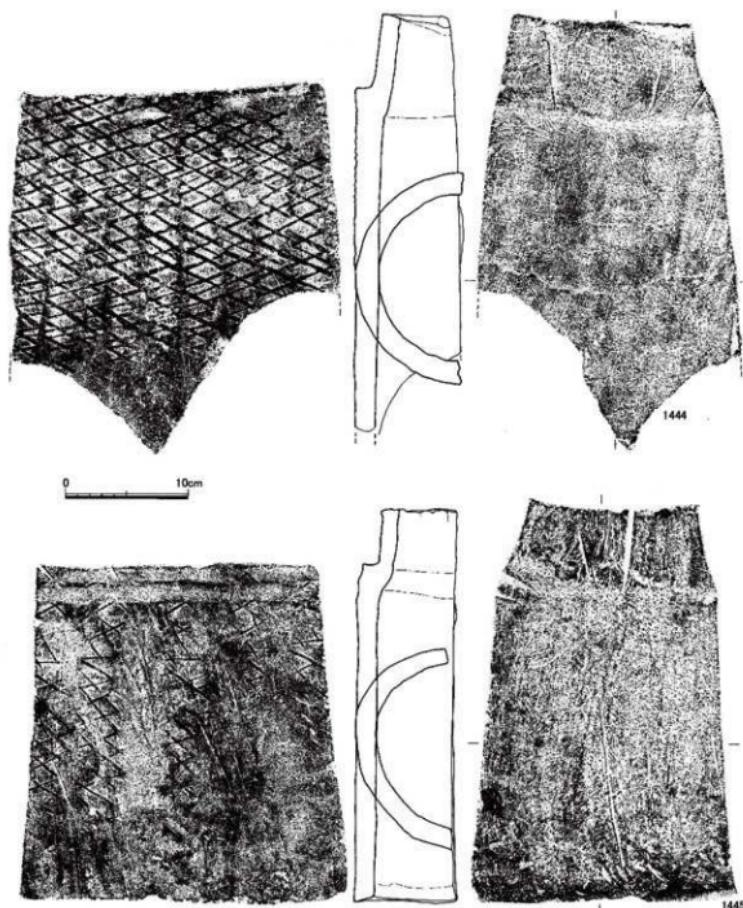


Fig.132 SK208 出土遺物実測図6 (1/4)

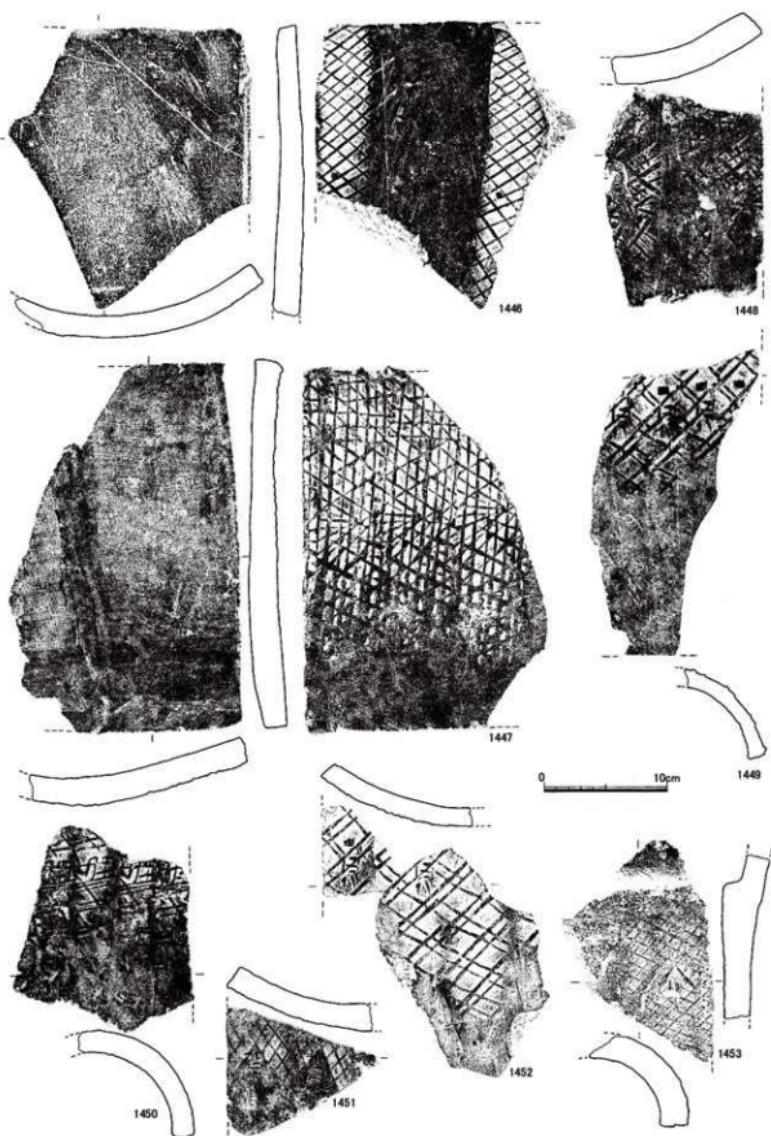


Fig.133 SK208 出土遺物実測図 7 (1/4)

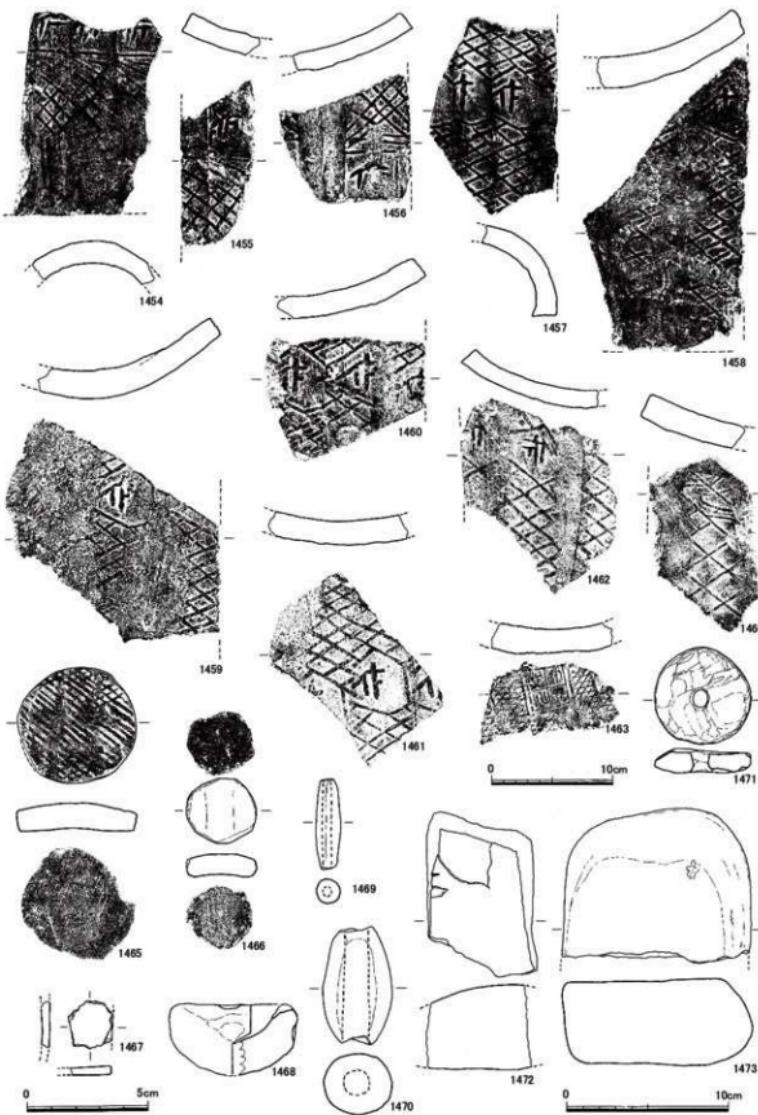


Fig.134 SK208 出土遺物実測図8 (1454～1466は1/4、1467は1/2、他は1/3)

土坑SK211 Fig.135

第6次調査区の北西部に位置する土坑である。南北に長い不整開丸方形プランで、南北長2.0m、東西長1.65m。断面逆台形で壁の立ち上がりは緩く、深さ25cmで底面平坦である。径30cm前後の砾2つが浮いた状態で出土した。

SK211出土遺物 Fig.136

土師器、須恵器、中国産陶磁器（越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器がコンテナ1箱、瓦が16箱出土した。

1474・1475は土師器坏で、磨滅して調整不明。
1474は復元口径12.0cm。1476・1477は土師器碗。

1478～1482は越州窯系青磁碗で、1480・1481は輪花口縁。1478を除き全釉である。

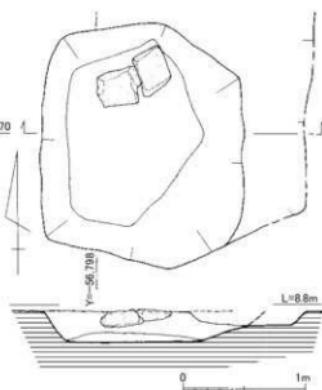


Fig.135 土坑 SK211 実測図 (1/40)

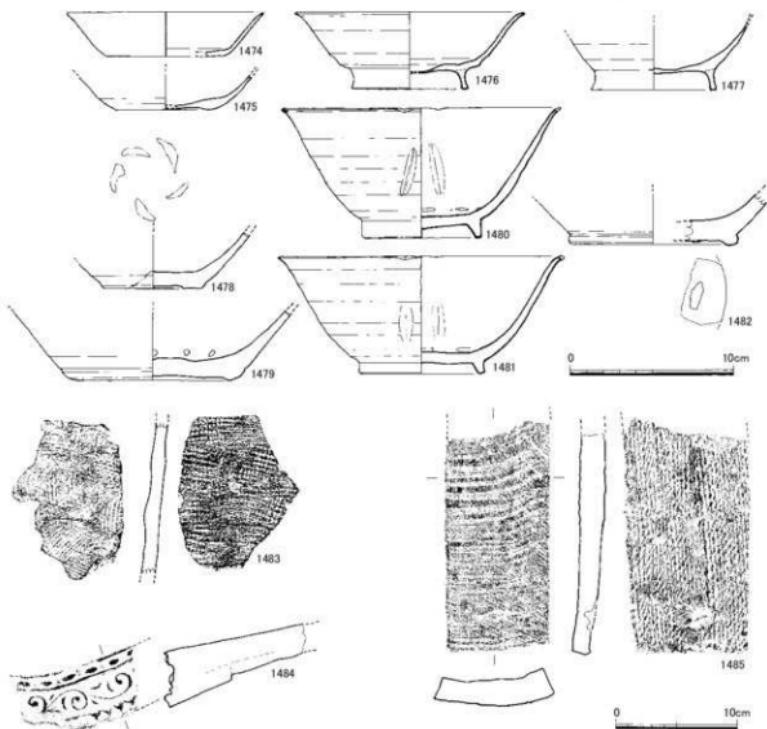


Fig.136 SK211 出土遺物実測図 (1474～1483は1/3、他は1/4)

1483は朝鮮半島産陶器で、外面格子目叩き、内面に細い弧状文の当て具痕がある。

1484は鴻臚館式軒平瓦(635型式)、1485は熨斗瓦で、凸面繩目叩きである。

第V期(10世紀後半～11世紀前半)の土坑であろう。

土坑 SK224 Fig.137

SK160の東に約1m離れて位置する土坑である。楕円形プランとみられるが、東～南側は削平により消滅しており、規模は不明である。断面逆台形で浅く、深さ15cm。底面や壁際に柱穴多数があるが、土坑との関係は明らかにできない。

SK224出土遺物 Fig.138, PL.22

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系・明代龍泉窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器、近世国産陶磁器がコンテナ1箱、瓦が13箱のほか石製品が出土した。

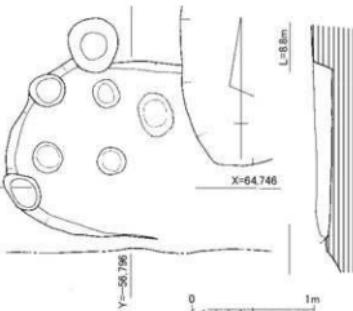


Fig.137 土坑 SK224 実測図 (1/40)

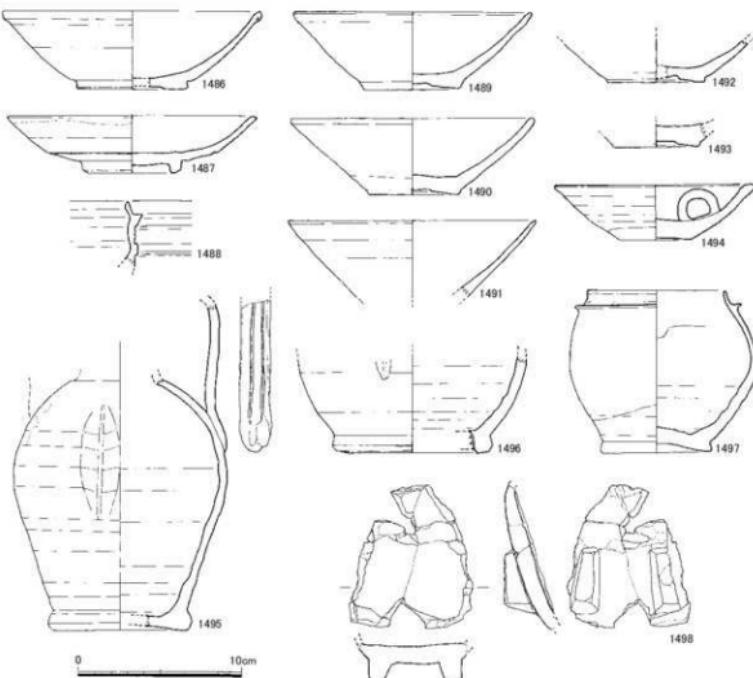


Fig.138 SK224 出土遺物実測図 (1/3)

1486・1487は邢窯系白磁である。1486は碗で、口縁は折り返して玉縁とし、底部は蛇の目高台である。1487は皿で、体部下半で屈折する。ともに疊付から高台内は露胎となる。

1488～1496は越州窯系青磁である。1488は香炉であろう。内外面に施釉しており、受け部に白土目が付く。1489～1493は蛇の目高台の碗である。胎土精良で全釉、1492を除き高台への釉剥ぎを行わず、疊付に目土が付着する。1494は青磁の灯蓋である。褐釉陶器の灯蓋に比べると低い位置に灯台を貼付している。1495は水注で、ヘラ押して胴部を瓜状にする。内面露胎で、外底は釉剥ぎする。1496も水注の底部か。内外全面に施釉し、高台疊付は釉剥ぎする。底部に粗砂粒を含む土を使用(アミかけ部分)している。

1497は褐釉陶器の壺である。深緑～黒緑色の不透明釉を口縁内面から体外面下半まで施釉し、受け部の釉は搔き取る福建省産か。

1498は石製の風字硯である。断面台形の脚が二つ付く。上端に立ち上がる部分が僅かに残る。

中・近世遺物は柱穴等からの混入遺物と思われる。中国産陶磁器は古い時期のものが占めており、第Ⅲ期(8世紀後半～9世紀前半)に遡る遺構の可能性がある。

土坑SK229 Fig.139

第6次調査区の北西隅に位置する土坑である。第Ⅰ期掘立柱建物SB322の南側柱穴を切る。近世遺構や攪乱坑に切られており、平面形が明確でなく、全容を把握しづらい。東側の壁のみが痕跡を留めており、楕円形プランとなろう。平面規模は不明である。深さ10cmで残りが悪い。

SK229出土遺物 Fig.140, PL.22

土師器、須恵器、中国産陶器(邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器)がコンテナ1箱、瓦が2箱出土した。

1499～1501は邢窯系白磁である。1499は碗で、小さな玉縁口縁が付く。1500は輪花口縁の碗である。1499・1500は釉下に白化粧を施す。1501は碗の底部で、内面から高台外側まで施釉する。1502は小片のため不明瞭だが小型壺か。極めて薄手で、産地不明。

1503～1521は越州窯系青磁である。1503～1505は蛇の目高台の碗で、全釉である。1504は疊付に釉剥ぎを行わず、白土目が付く。1505は疊付を釉剥ぎし、白土目が付く。1506は碗の口縁部である。1507は輪状高台の碗の底部で全釉。1508は平底の碗で、体外面下半から外底は露胎である。1509～1511は腰折れ皿で、いずれも底部が火彌れし、同じ窯の可能性がある。1512は棱花皿とみられ、見込みに圓沈線が巡る。全釉。1513は灯蓋で、Fig.138-1494に類似する。1514は広口壺で、口縁を玉縁とする。

1515～1521は粗製の越州窯系青磁碗で、釉下に白化粧を施し、体外面下半は露胎とする。見込みに粗い白土目が付着する。1515～1518は円盤状底部に切り込みを入れて蛇の目高台風とするものである。1521は口縁端部

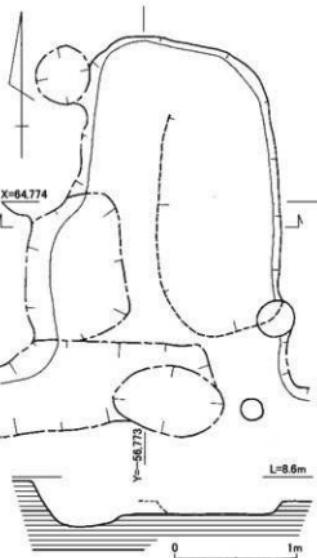


Fig.139 土坑SK229 実測図 (1/40)

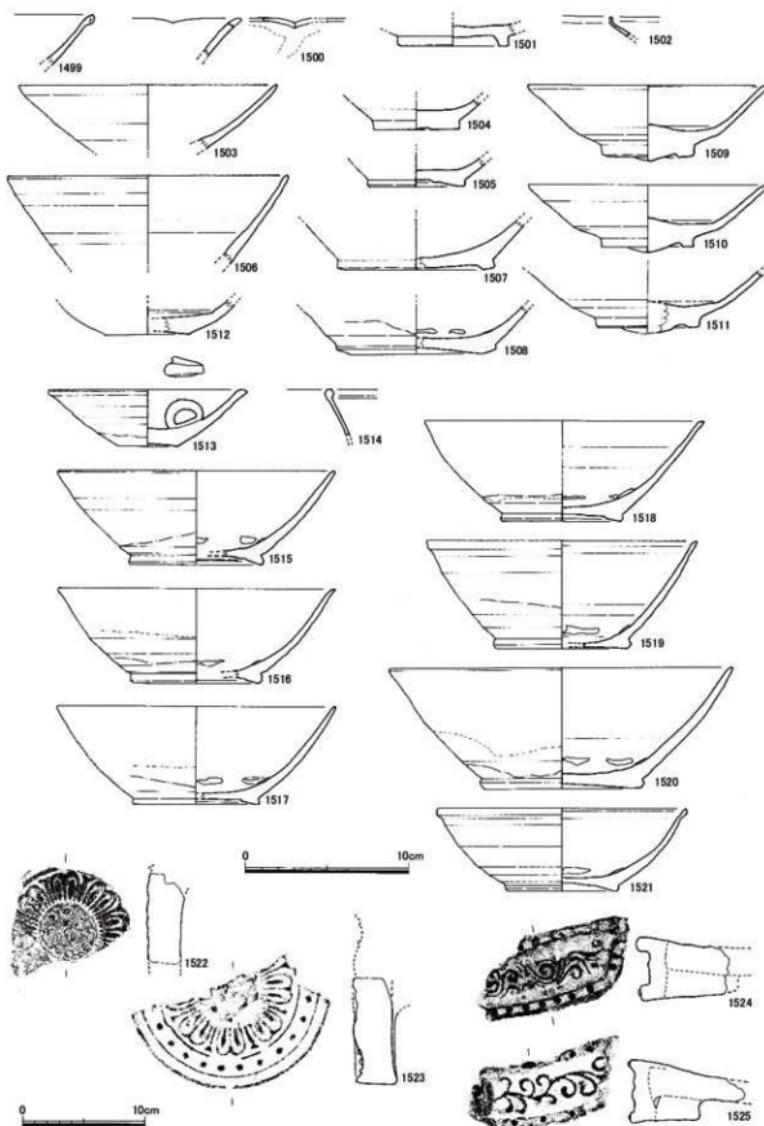


Fig.140 SK229 出土遺物実測図 (1499～1521は1/3、他は1/4)

が肥厚する小碗である。

1522は軒丸瓦で、鴻臚館式に比べて瓦当文様が平たく、224a型式であろう。1523は鴻臚館式軒丸瓦(223a型式)である。1524は軒平瓦662型式、1525は軒平瓦663型式である。

出土遺物はほとんど越州窯系青磁で占められる。第IV期(9世紀後半～10世紀前半)の遺構か。

土坑SK239 Fig.141, PL.16

第6次調査区西部に位置する土坑である。近世溝に北側を切られる。不整な円形プランで、南北長2.7m、東西長2.6m。断面逆台形で、深さ35cmである。底面は平坦で、東端部が若干窪む。図に示した土層図の土質は①暗灰褐色粘質土である。

SK239出土遺物 Fig.142

土師器、須恵器、中国産陶磁器(景德鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器)が少量、瓦がコンテナ2箱出土した。

1526は土師器甕の脚とみられ、円柱形に面取りする。上端に煤が付着する。

1527は景德鎮窯白磁碗である。体下半で屈曲して段をつくる。高台外側まで施釉する。

1528は越州窯系青磁の輪花口縁碗である。全釉で、目跡は高台の内側に付く。見込みに圈沈線を巡らし、その中に毛彫りで施文する。

第V期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構であろう。

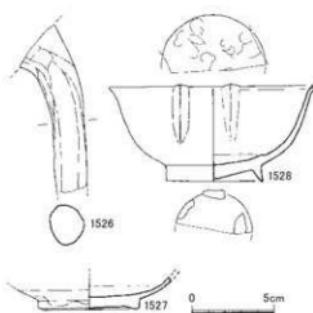
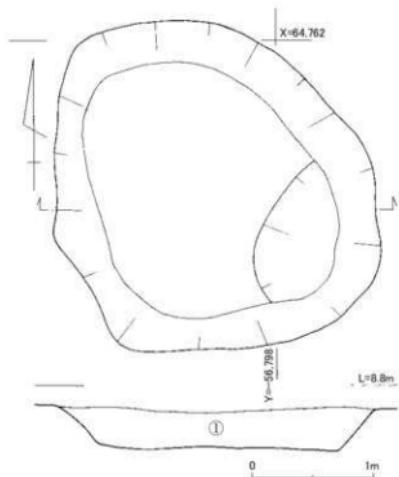


Fig.141 土坑 SK239 実測図 (1/40)

5. 第7次調査の検出遺構と出土遺物(福岡城跡第17次調査/9130)

第7次調査区は第6次調査区の北側に隣接する東西に長い調査区である。調査前は盛土(テニスコート観客席)とフェンスがあり、これの撤去後に調査を行った。遺構面は第6次調査区と連続しており、土坑SK208などは主要部の調査を第7次調査で実施している。

第7次調査区の古代遺構としては、第Ⅰ期掘立柱建物群(SB320~323)、第Ⅱ期布掘り塀と東門等について前年度に報告しており、本書では溝1条と土坑9基を報告する。

土坑SK243 Fig.143, PL.17

第6次調査区の土坑SK211の北東約2mに位置する土坑である。近世溝等により上部の一部が削平されている。東西に長い隅丸長方形プランで、南北長2.6m、東西長3.7mを測る。断面逆台形をなし、壁は緩く立ち上がる。深さ40cmで、底面は南北長1.9~2.2m、東西長2.8~3.0mの隅丸長方形をなし、平坦である。覆土は上層が暗褐色粘質土(風化頁岩粒を含む)、下層が暗灰色粘質土で、平安時代末期の軒丸瓦・軒平瓦の完形品がセットで出土した。ゴミ捨て用の土坑と考えられ、良好な一括遺物が出土したほか、銅鏡や耳環など古墳副葬品とみられる遺物が混じっている。

SK243出土遺物 Fig.144~147, PL.22~23

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・景德鎮窯白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器、銅製品がコンテナ1箱、瓦が20箱出土した。

1529~1533は土師器である。1529・1530は皿で、底部はヘラ切り離しである。口径は順に10.4cm、10.7cm。1531・1532は壺で、底部ヘラ切りである。体部が丸みを持つ。復元口径はそれぞれ12.6cm、12.4cm。1533は椀で口縁が内湾する。

1534~1538は景德鎮窯白磁である。1534は皿で、ヘラ押しによる六輪花口縁とする。口縁は内湾する。内底が小さく盛り上がる。高台外側まで施釉する。1535は碗で、ヘラ押しによる輪花口縁。高台

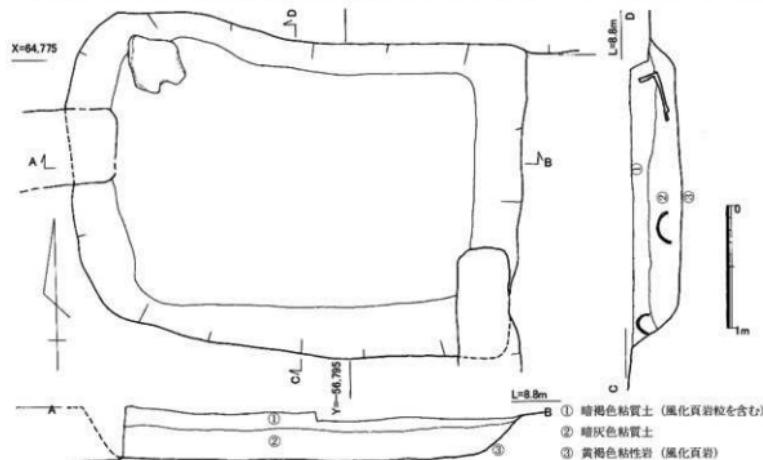


Fig.143 土坑SK243 実測図 (1/40)

外側まで施釉する。1536もヘラ押しによる輪花口縁の碗で、体部が内湾し口縁端部で短く外反する。1537は皿で、口縁が大きく外反する。1538は皿で平底。外底の釉は搔き取る。

1539～1548は越州窯系青磁である。1539は碗で全釉である。1540は蛇の目高台の碗で全釉。1541～1543は碗の底部である。輪状高台ないし平底で、外底部分は露胎である。1544～1548は福建省産粗製の越州窯系青磁碗で、釉下に白化粧を施し、体外面下半から高台は露胎とする。1544は輪花口縁で、1545は外底を削って蛇の目高台風にした底部である。1546は蓋で、内面露胎。1547は粗製の盤口壺で内外に施釉する。1548は水注か。体部はヘラ押しにより瓜状とし、体下半に褐色を施す。内面は露胎である。

1549は朝鮮半島産陶器の底部で、内面は丁寧にナデ調整する。

1550は軒丸瓦で完形品である。瓦当文様は065型式。凸面に目の大きい斜格子目叩きを施す。全長35cm、玉縁長5.7cm。1551も軒丸瓦の完形品で、135Bb型式。さらに目の大きい斜格子目叩きである。全長32.5cm、玉縁長5.2cm。1552～1554は軒平瓦である。1552は鴻臚館式軒平瓦(635型式)で、瓦の凸面には繩目叩きを施す。1553・1554は軒平瓦で、ともに666A型式である。1555は丸瓦で、凸面の叩き文様はFig.145-1550と同じである。1556～1558は文字瓦で、いずれも平瓦に敲打したもの。1556は「平井(左字)」で901J型式、1557・1558はともに「佐」で902J型式である。1559・

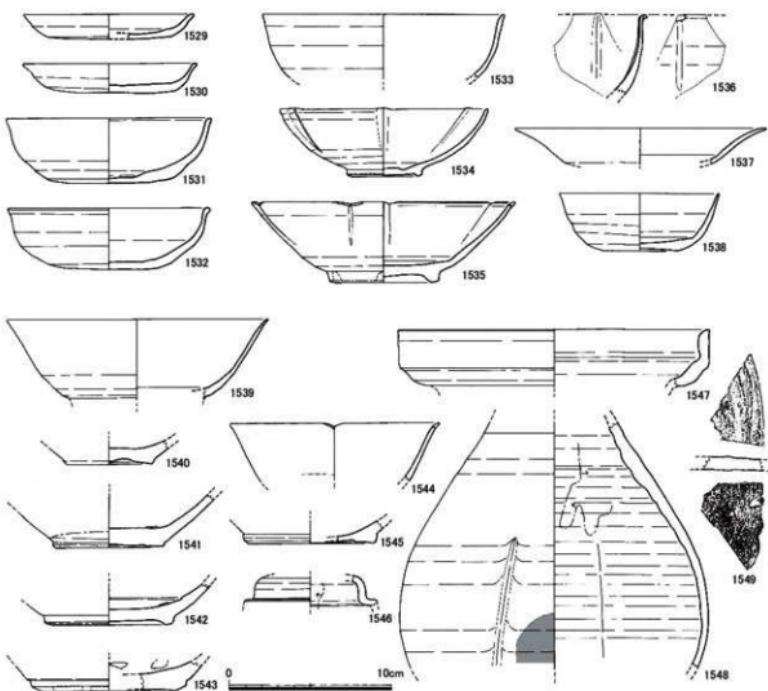


Fig.144 SK243 出土遺物実測図1 (1/3)

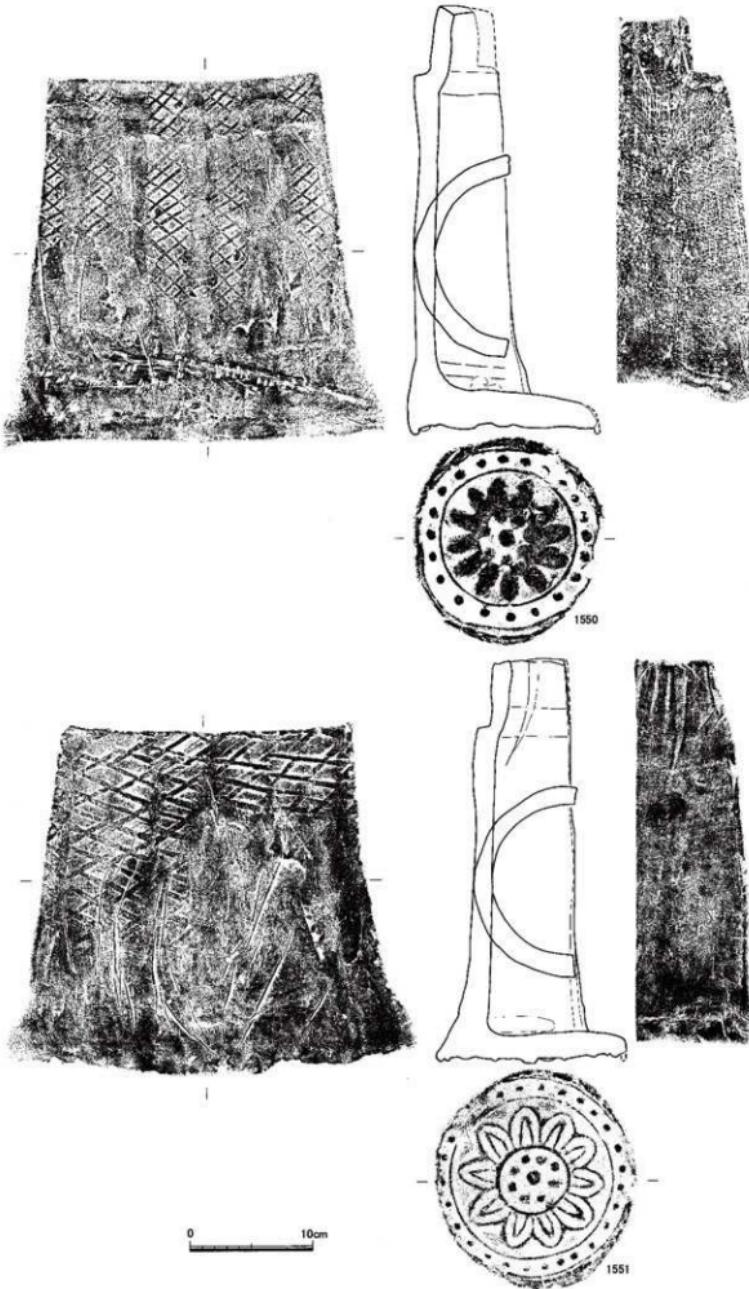


Fig.145 SK243 出土遺物実測図2 (1/4)

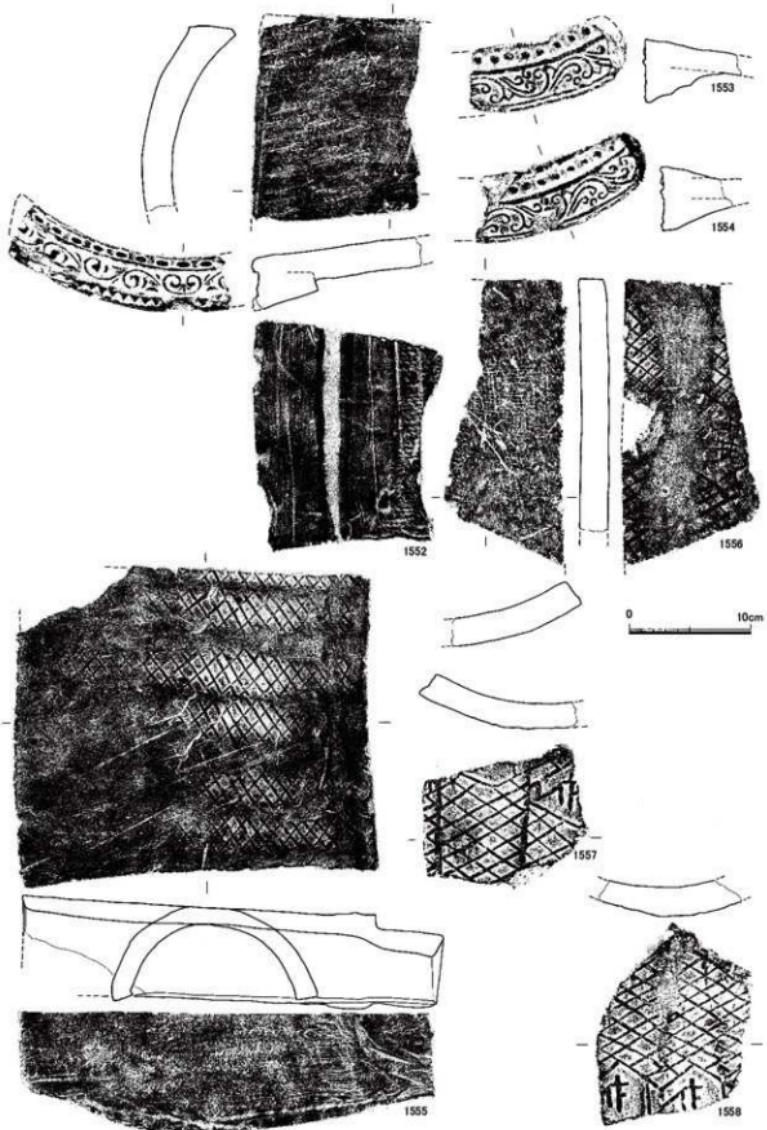


Fig.146 SK243 出土遗物实测图3 (1/4)

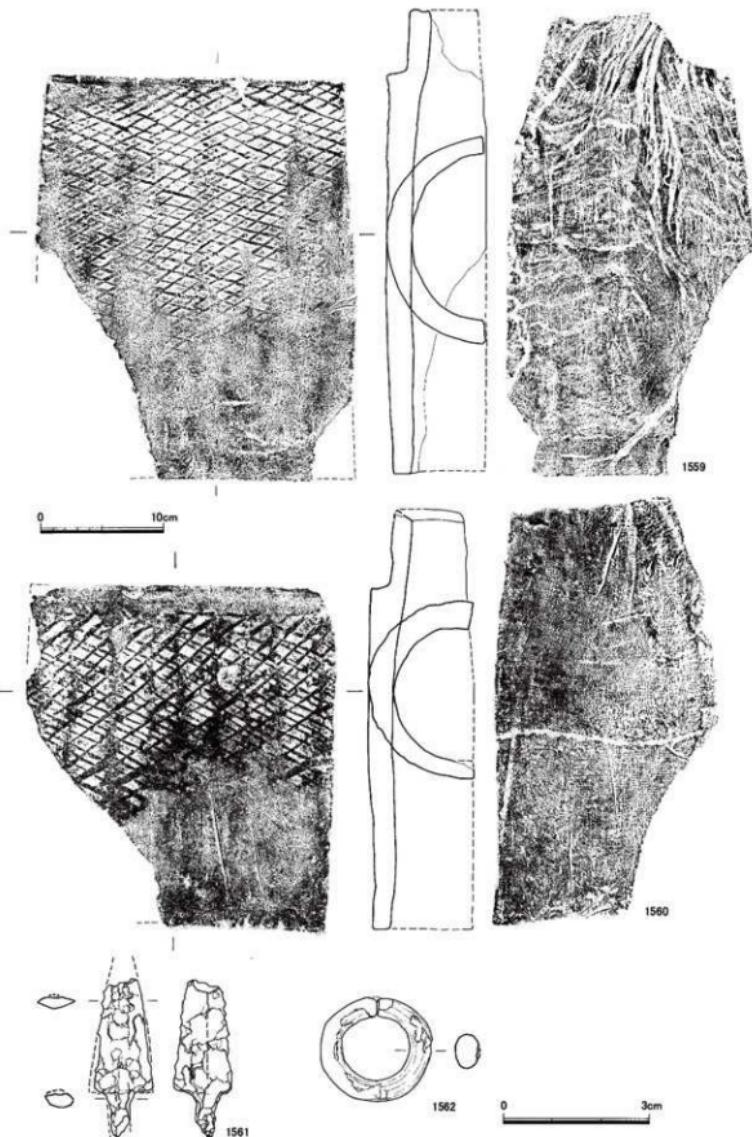


Fig.147 SK243 出土遺物実測図4 (1561・1562は1/1、他は1/4)

1560は丸瓦である。種類の異なる斜格子目叩きを施す。1559は全長38cm、玉縁長5.5cm、1560は全長34.3cm、玉縁長6.4cmを測る。

1561は銅鏡である。全体に腐食剥落が著しい。推定全長4.5cm。1562は耳環である。金箔は全て剥げ落ちている。

第V期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構であろう。

土坑SK245 Fig.148

第7次調査区の中央部に検出した土坑である。他の遺構との切り合いはない。南北に長い不整な楕円形プランであり、南北長3.4～3.7m、東西長2.5mを測る。壁が緩く立ち上がる皿状の断面形をなし、深さ30cm。底面は平坦で、緩い起伏がある。

SK245出土遺物として報告できるものはない。

土坑SK246 PL.16

第6次調査区の土坑SK229の北に隣接する遺構である。中国産陶磁器や瓦類がまとめて出土したが、削平のため遺構の残りが極めて悪く、プラン・規模等は不明である。他の例から押して、廃棄物を処理した土坑の最下部のみが残ったものと考えられる。調査上の都合により出土状況を図示できなかったため、写真表示。

SK246出土遺物 Fig.149・150、PL.23

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・景德鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器)がコンテナ2箱、瓦が3箱出土した。越州窯系青磁の碗類については約半数が未掲載であることから、図を掲載した分を含めて一覧表に法量を示した(199ページ参照)。

1563は須恵器蓋で、口縁端部が断面三角形に肥厚し、内面の稜は明瞭である。1564～1566は土師器である。1564・1565は壺で、底部ヘラ切り。1564は復元口径10.8cm、1565は口径12.0cm。1566は椀の底部小片で、高台を貼付する。

1567は邢窯系白磁の大碗で、体部に外からのヘラ押しを加える。1568は景德鎮窯白磁碗で、外からヘラ押しを加えて稜花口縁とする。体外面下半から高台内は露胎で、高台外面に施釉時の使用したとみられる鉗子痕が残る。

1569～1573は精製の越州窯系青磁である。1569・1570は蛇の目高台の碗で、1569は全釉、1570は半釉。1571は碗の口縁部で、蛇の目高台の碗であろう。1572は輪状高台の皿で、腰折れとなる。全釉で高台疊付は釉剥ぎする。素地に空気が入り底部が火ぶくれする。1573は平底の碗で、体外面下半まで施釉する。1574～1590は釉下に白化粧を施す粗製の越州窯系青磁である。1574～1587は碗で、体外面下半から高台内は露胎で、見込みに粗い白土目が付着する。全て円盤状高台であるが、1574～1582・1584は外底に削りを加えて蛇の目高台風に仕上げる。口縁は直行するが、1586は端部でやや外反し、1587は玉縁状になる。1588は小碗で、口縁が内湾する。1589は水注の口縁部で、1590は同じく把手である。釉下に白化粧を施し、褐彩を加えている。1591・1592は精製の越州窯系青磁である。1591は小片だが合子か。1592は香炉の蓋で、円形の透孔の一部が認められる。小片のため径は不確実である。1593は粗製の越州窯系青磁の四耳壺で、横耳が付く。釉下に白化粧を施しており、体外面下半から外底は露胎とする。

1594は鴻臚館式軒丸瓦(223型式)である。1595は素文磚の角部分である。

出土した数点の北宋代の白磁・青磁を混入遺物と考えれば、第IV期(9世紀後半～10世紀前半)の

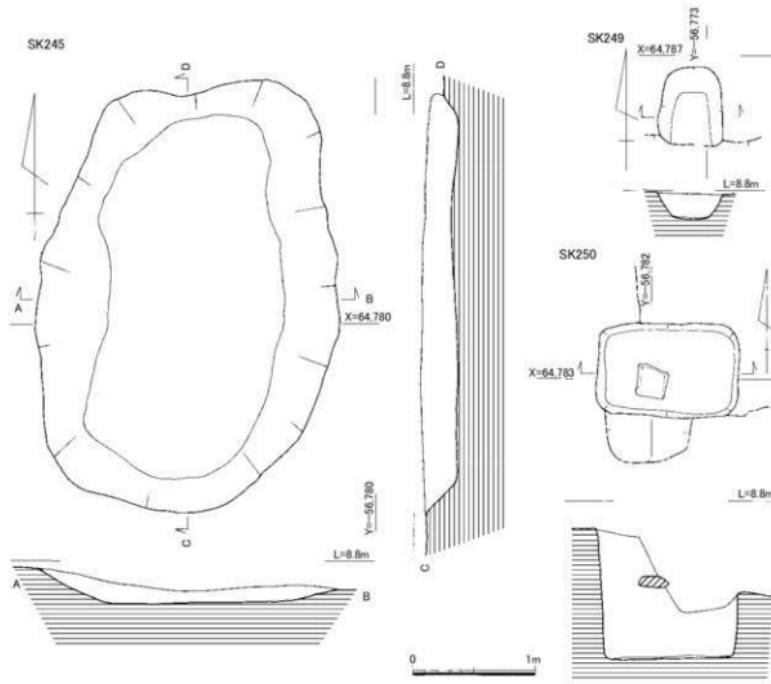


Fig.148 土坑 SK245・249・250 実測図 (1/40)

遺構であろう。

土坑SK249 Fig.148

第7次調査区北東部の土坑SK245の北東9mに位置する。中世溝(道)SD244に南側を削平される。柱穴様の小土坑であり、南北にやや長い楕円形プランで、南北長0.65m以上、東西長0.53m。断面逆台形で、深さ20cmである。

SK249出土遺物 Fig.150, PL.23

土師器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系青磁)、朝鮮半島産陶器が少量、瓦がコンテナ1箱出土した。

1596は邢窯系白磁碗で、蛇の目高台の底部片である。高台疊付は釉剥ぎする。1598は邢窯系白磁とみられる水注の注口である。外面に施釉するが、一部釉がかからない部分がある。

1597・1599・1600は精製の越州窯系青磁である。1597は蛇の目高台の碗で、疊付の幅が広い。全釉で、疊付は釉剥ぎする。1599は越州窯系青磁の香炉である。全体に施釉し、口縁の受け部と高台疊付きを釉剥ぎし、白土目が付着する。1600は越州窯系青磁の大碗である。全釉で、高台疊付は釉剥ぎか。疊付周辺に広く白土目が付着する。

第IV期(9世紀後半～10世紀前半)の遺構であろう。

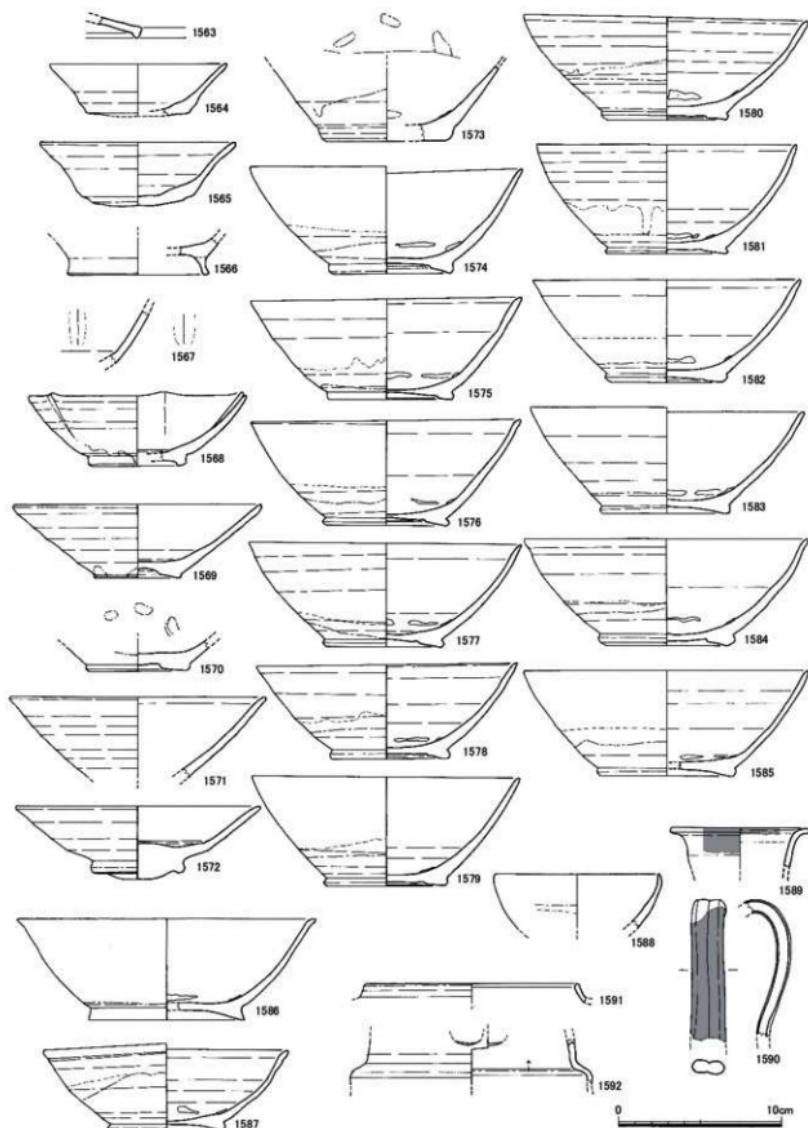


Fig.149 土坑 SK246 出土遺物變測圖 1 (1/3)

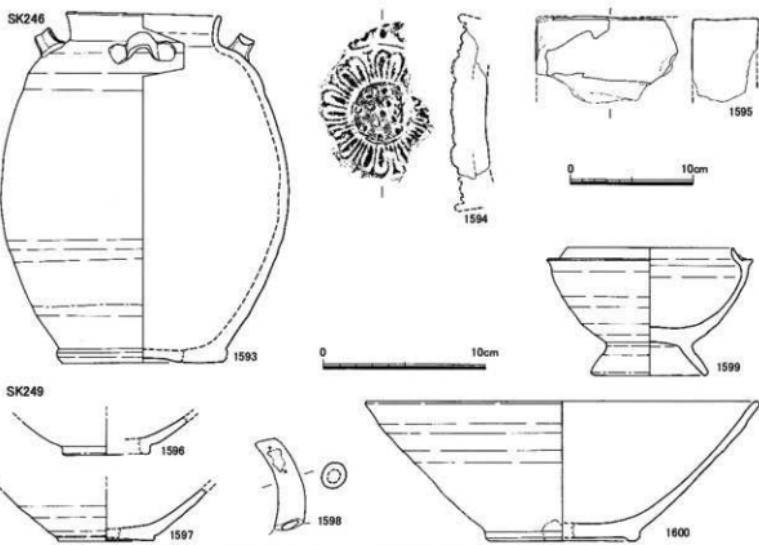


Fig.150 土坑 SK246 出土遺物実測図 2, SK249 出土遺物実測図 (1594・1595 は 1/4、他は 1/3)

土坑 SK250 Fig.148

第7次調査区中央部のSK245の北1mに位置する柱穴状の小土坑である。中世溝(道)SD244により一部が破壊を受ける。東西に長い隅丸長方形プランで、南北長0.8m、東西長1.15m。底面まで105cmと深く、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で整った隅丸長方形をなす。底面よりかなり浮いた位置から礫が出土した。

土器小片と瓦が少量出土したが、SK250出土遺物として報告できるものはない。

土坑 SK251 Fig.151

第7次調査区の北東部に位置し、土坑SK249の北西に隣接する。複数の近世ピットに切り込まれている。南北に長い楕円形プランの小土坑で、南北長1.3m、東西長0.9m。断面逆台形で、深さ15cm。底面は平坦である。

SK251出土遺物 Fig.152

土器器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器)が少量、瓦がコンテナ1箱出土した。

1601～1603は邢窯系白磁碗である。1601は口縁部小片で、小さな玉縁口縁。1602・1603は底部片で、蛇の目高台である。1602は体外面下端近くまで施釉し、高台内は露胎である。1603は高台疊付に平行線の圧痕があり、高台外面には施釉時に使用した鉗子痕が残る。釉は高台内まで施し、疊付にかかった釉を剥ぎ取っている。

1604～1606は精製の越州窯系青磁である。1604・1605は蛇の目高台の碗で、口縁が内湾気味に開く。全釉で、高台疊付の外縁のみ雑に釉剥ぎする。目跡は釉剥ぎ部分を超えて幅広く付着する。

1606は皿で、高台脇で屈曲して開く。削り出しの輪状高台で、高台内は2回に分けて削りを加える。高台脇以下は露胎で、高台疊付に目跡が付く。見込みには白土目が6ヶ所付く。

1607は福建省産無釉陶器の鉢である。口縁内面に受け部を設け、外側に凹線を巡らせる。

第IV期(9世紀後半～10世紀前半)の遺構と考えられる。

土坑SD252 Fig.151

第7次調査区北端部に位置する溝状遺構である。後述の土坑SK255を切っている。東西方向に伸びており、長さ9m分を確認した。東端は浅くなつて収束しており、西端は擾乱に破壊されて消滅している。溝幅は上端で0.45～1.4m、下端で0.3～0.4mである。横断面形は逆台形で、深さ20～35cmである。削平のため西側では溝が浅くなるが、底面レベルは東西でほぼ同じであり、勾配はない。溝の主軸方位は座標北から $88^{\circ} 30'$ 東偏する。第II・III期の建物群の主軸方位(座標北から $1^{\circ} 30'$ 東偏)から 3° 西にずれているが、近似するといえよう。

SD252出土遺物 Fig.153

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器、近世陶磁器(混入遺物)がコンテナ2箱、瓦が4箱出土した。

1608・1609は土師器壊である。ともに口縁部片で、磨滅して調整不明。1608は体部が丸みを持つ。口径は12.0cm、14.0cm。1610～1612は黒色土器A類である。1610は楕

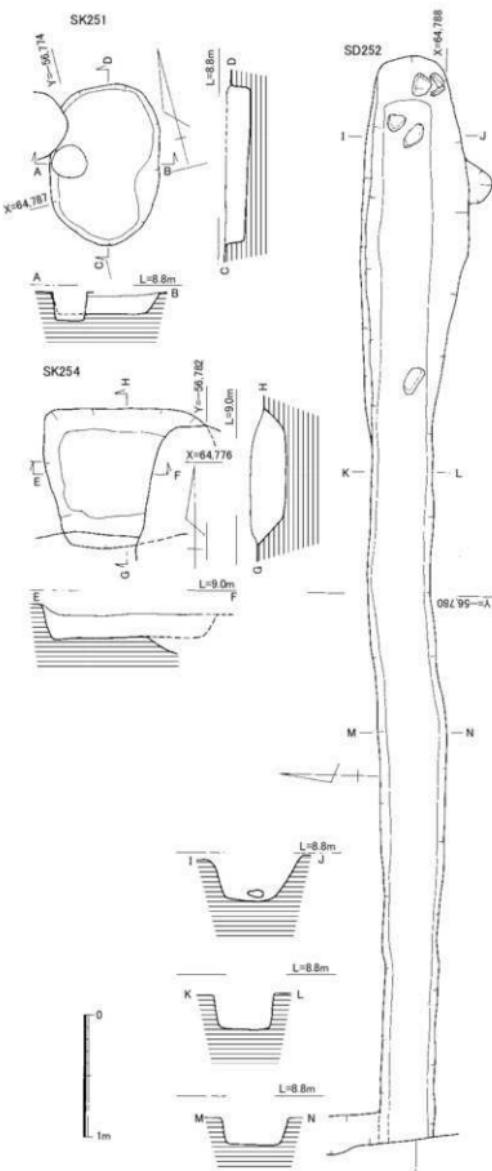


Fig.151 土坑 SK251・254、溝状遺構 SD252 実測図 (1/40)

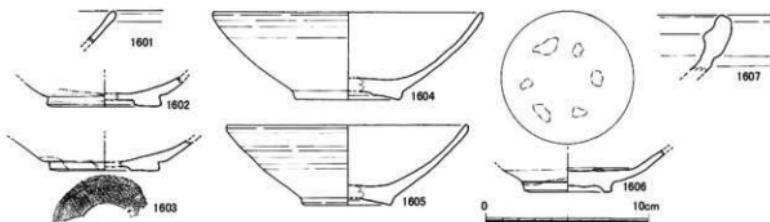


Fig.152 SK251出土遺物実測図 (1/3)

か。磨滅してミガキの有無は不明である。1611は椀の底部である。1612は壺で、横ナデ調整。胴部内面にヘラミガキを加える。小片のため径は不確実である。1613は土師器瓶把手である。横断面形は逆三角形をなす。1614は中～近世の土師質土器鍋である。小片であり混入遺物であろう。

1615～1617は白磁である。1615・1616は邢窯系白磁碗で玉縁口縁である。1617は景德鎮窯白磁の口縁部の小片である。輪花口縁で、体外面からヘラ押しする。

1618は長沙窯系青磁であろうか。碗の口縁部で全釉。1619～1622は精製の越州窯系青磁碗である。1619・1620は輪状高台で全釉。1621・1622は平底で、外底縁辺に削りを加えて面取りする。体外面下半から外底は露胎となる。1623～1628は粗製の越州窯系青磁である。1623～1625は碗で、釉下に白化粧を施し、体外面下半から外底は露胎とする。円盤状高台で、1623は蛇の目高台風に削りを加える。見込みに粗い白土目が付着する。1626は玉縁口縁の碗で、小片のため口径は不確実である。体外面下半は露胎。1627は小碗で、口縁は内湾してぼまる。底部は露胎で目跡が付く。見込みに白土目が付着する。1628は平底の坏で、白化粧は施さない。1629は精製の越州窯系青磁の蓋で、全釉。口縁端部には白土目が付着。1630は精製の越州窯系青磁で、盤口壺または水注であろう。

1631～1633は福建省産陶器である。1631は褐釉小壺で、口縁内面まで施釉する。小片のため径は不確実。1632は褐釉捏ね鉢の口縁部片で、口縁上端部のみに施釉する。1633は無釉の捏ね鉢である。

1634は朝鮮半島産陶器の小片で、内面叩き後ナデ調整。外面に黒色顔料を塗る。

1635・1636は近世陶器で、いずれも小片であることから、攪乱などから混入した遺物と考えられる。

1637は素文磚で、幅14.5cm、厚さ7.0cm。

景德鎮窯白磁や近世遺物等を含むがいずれも小片であり、出土遺物の大半は第IV期(9世紀後半～10世紀前半)に位置づけられよう。

土坑SK254 Fig.151

第7次調査区の土坑SK208の北西に隣接し、これに切られる土坑である。東西に長い隅丸長方形プランをなすものとみられ、南北長1.15m、東西長1.4m以上である。断面逆台形で、深さ30cm。底面は平坦である。

SK254出土遺物 Fig.154

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・景德鎮窯白磁、越州窯系青磁)、朝鮮半島産陶器が少量、瓦がコンテナ1箱出土した。

1638は景德鎮窯白磁の小片で、輪花口縁皿である。外面に縱方向のヘラ彫りを加える。

1639は精製の越州窯系青磁碗である。体部は丸みを持ち、外から縱位のヘラ押しを加える。全釉で、目跡は外底に付く。1640は精製の越州窯系青磁の壺か。内面にロクロ痕が残る。全釉で高台疊

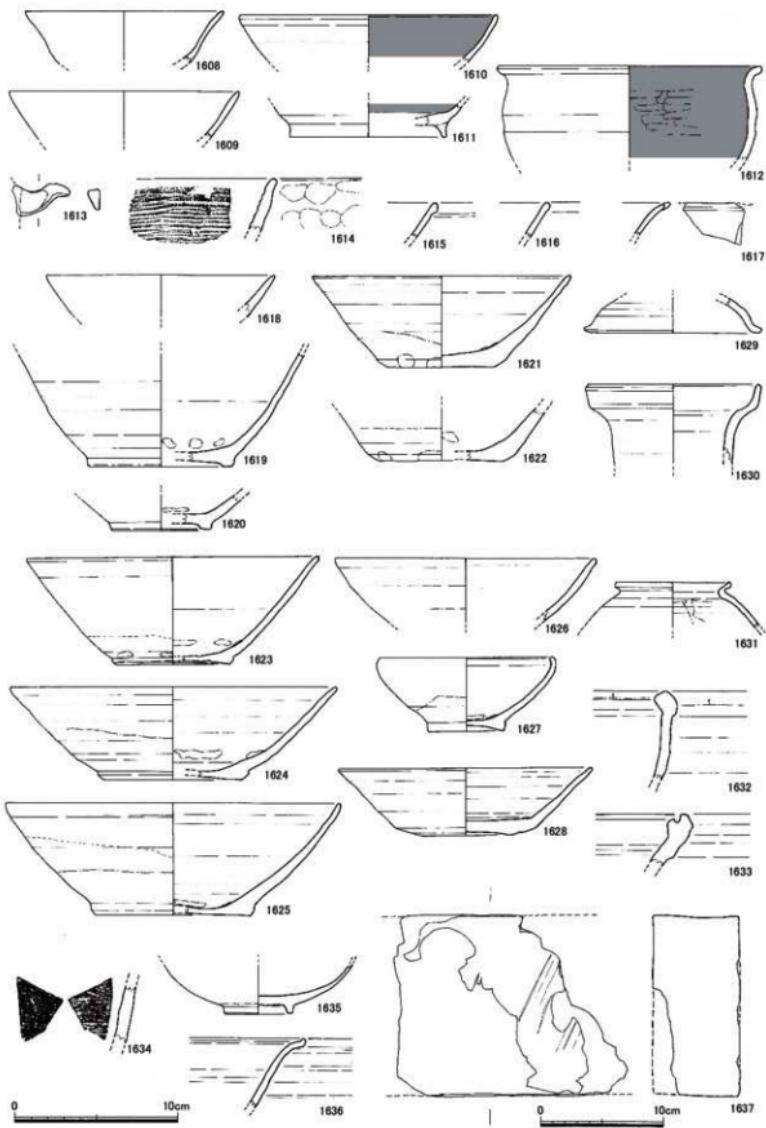


Fig.153 SD252 出土遺物実測図 (1637は1/4、他は1/3)

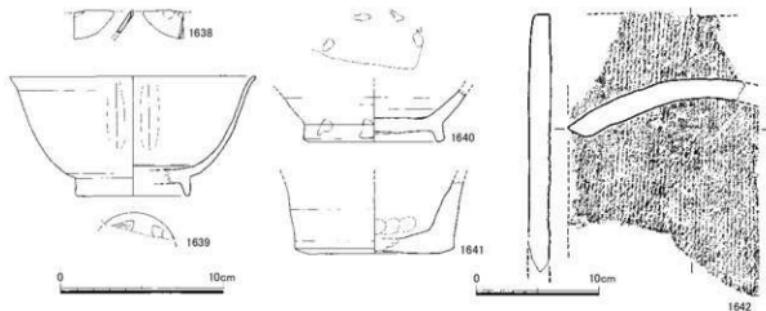


Fig.154 SK254出土遺物実測図 (1642は1/4、他は1/3)

付は釉剥ぎする。高台外面に施釉時につかんだ指痕が残る。見込みの白土目は疊付の目跡よりも径が小さく、内部に小物を入れて焼成したものであろう。

1641は無釉陶器の底部片である。胴部外面ヘラ削りで、外底は工具によるナデ調整。内面は指押えする。朝鮮半島産陶器の可能性もある。

1642は平瓦片で、凸面に縄目叩きを施す。

第V期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構であろう。

土坑SK255 Fig.155、巻頭図版9、PL.18

第7次調査区の北壁際に位置し、北側は調査区外に伸びている。中央部を東西方向に横断する溝状遺構SD252に切られるほか、南端部は中世溝(道)SD244に切られている。平面プランは南側へ尖るような不整な楕円形をなしており、南北長4.5m以上、東西最大長2.8mを測る。東西断面形は浅いU字形を呈し、西側のみ壁の傾斜が急で、他は緩やかに壁が立ち上がる。底面の北西部分が深く、最も深い部分で65cmである。南西隅には礎の詰まつた窪みがあり、不整な楕円形プランで、長径1.2m×短径0.4m。礎を取り上げていないため深さは不明である。

ゴミ捨て用の土坑とみられ、多量の中国産青磁類は二次的に火を受けており、一括廃棄されたものとみられる。また、珍品として滑石製石鍋の把手付き鉢が出土した。

SK255出土遺物 Fig.156～164、巻頭図版9、PL.23・24

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・定窯系・景德鎮窯白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器)、近世陶磁器(混入遺物)、石製品、鉄製品等がコンテナ14箱、瓦が37箱出土した。

1643～1647は須恵器である。1643は蓋で、口縁端部を下方に折り、内面に稜をつくる。1644は脚の端部で、下端部に自然釉を被る。1645は甕の口縁部片である。1646は壺の外耳で方柱状をなす。壺の外面に平行叩き、内面に指押さえ痕が残る。1647は壺で、外面に平行叩き、内面に円弧文の当て具痕がある。口縁内外面横ナデ調整で、頸部内面は板状工具でナデ調整する。1646は朝鮮半島産の可能性もある。

1648～1673は土師器である。1648は小皿で、底部ヘラ切り。復元口径8.4cm。1649は浅い壺で、底部ヘラ切り。復元口径11.0cm。1650～1654は壺で、底部ヘラ切り。体部が丸みを持つものと、直線的に開くものがある。口径は順に12.4cm、12.6cm、13.0cm、13.0cm、13.2cm。1655～1659は碗である。体部はいずれも丸みを持ち、高台が高いものと低いものがあり、1656は外底が高台より下に出る。外底はヘラ切りである。1660～1664は黒色土器A類の椀である。器形は土師器椀に類似する。1660

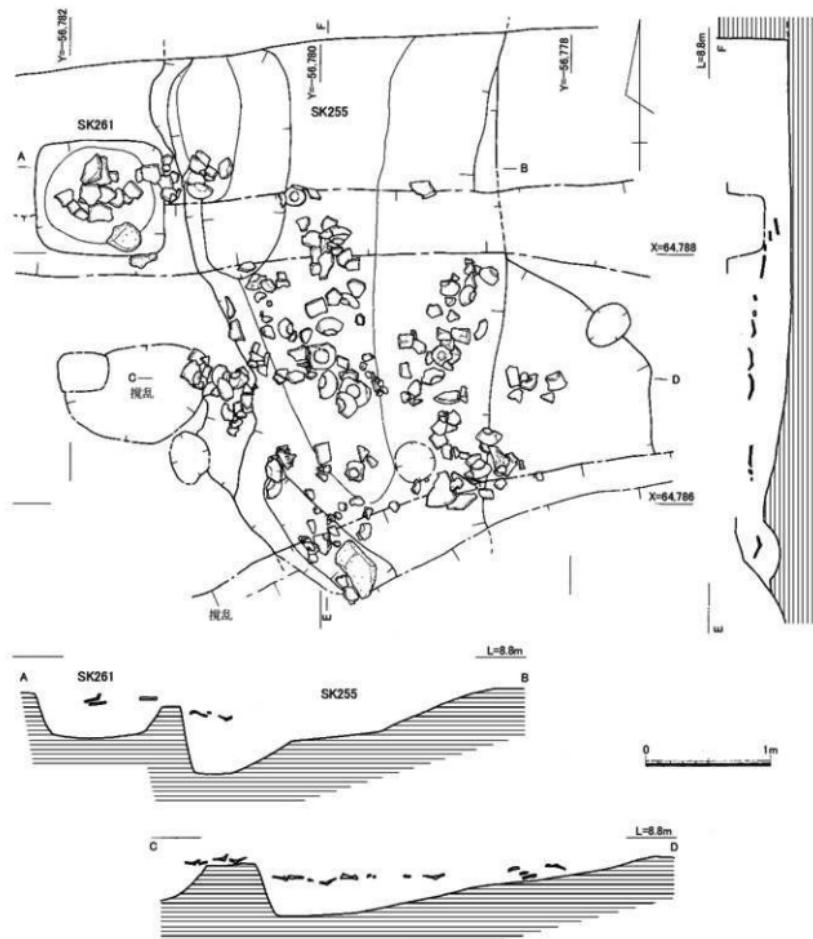


Fig.155 土坑 SK255・261 実測図 (1/40)

のみ内面にヘラミガキ痕が残るが、他は器面が磨滅している。1665～1667・1673は土師器裏で、胴部外面はいずれも刷毛目調整である。1665は胴部内面に粘土接合痕が残りナデ調整、底部内外面を工具ナデ、口縁内外ナデ調整で、外面に指押え痕が残る。1666も口縁ナデ調整で外面に指押え痕が残る。1667は胴部内面にヘラ削りを施す。1673は胴部内面工具によるナデ調整で、口縁は横ナデ調整する。1668・1669は黒色土器A類の壺で、口縁が「く」字形に短く屈曲する。1668は外面横ナデ、口縁内面にヘラミガキを加え、下半はナデ。1669は内面を工具によりナデ調整する。

1670～1672は国産の灰釉陶器で、瓶の口縁から頸部であろう。口縁端部は断面三角形に肥厚し、

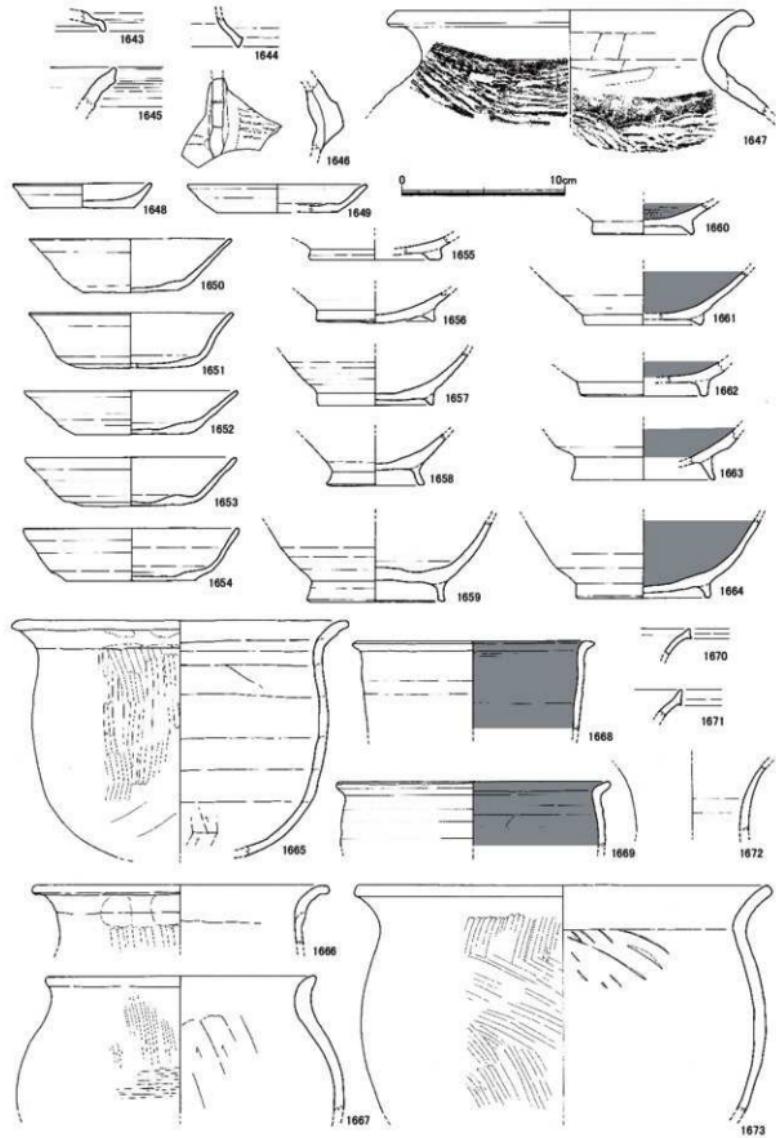


Fig.156 SK255 出土遗物实测图1 (1/3)

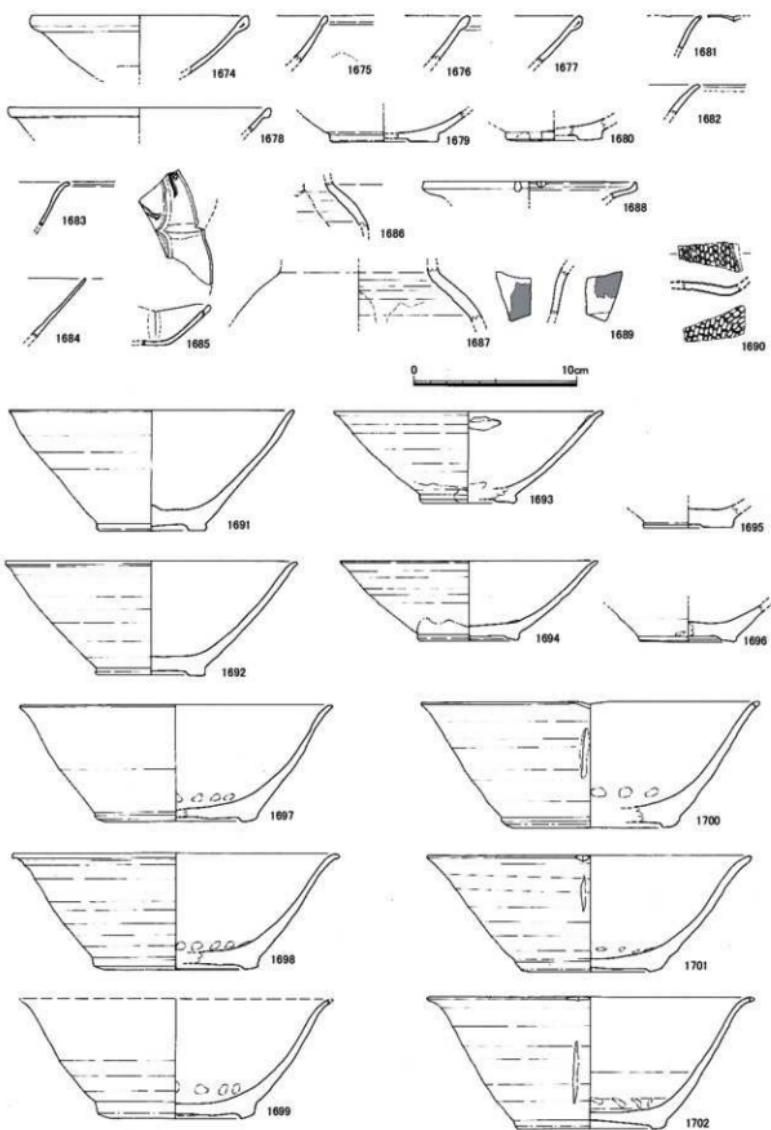


Fig.157 SK255 出土遺物実測図2 (1/3)

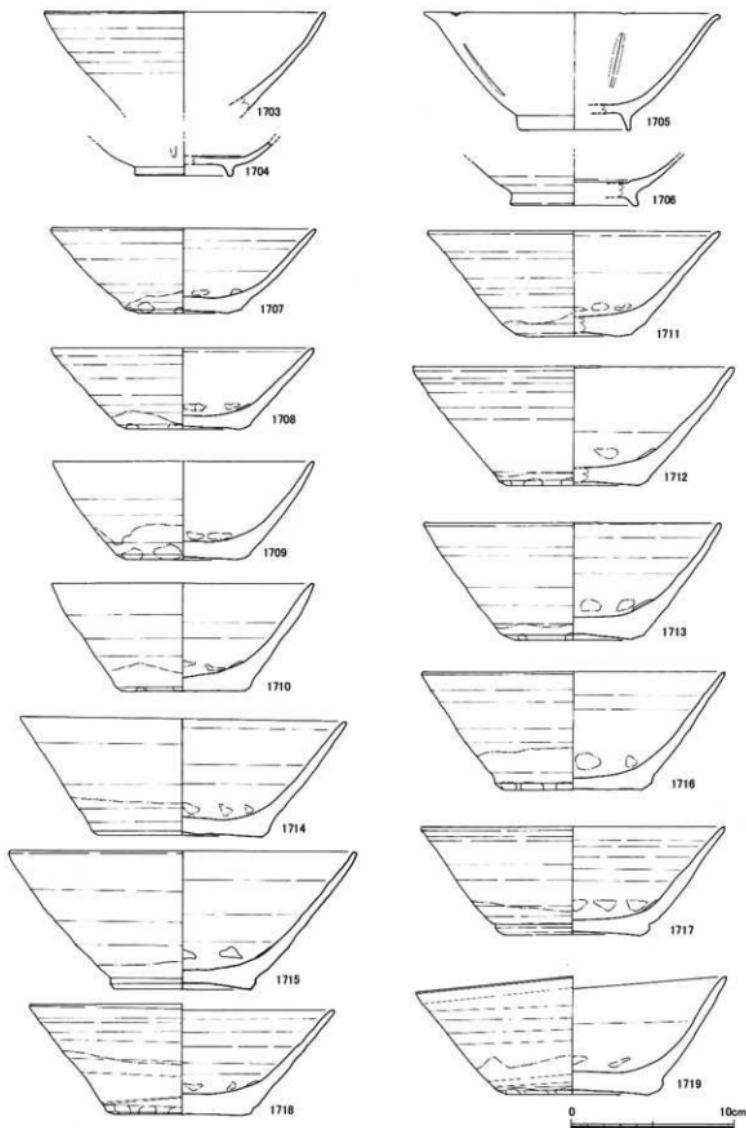


Fig.158 SK255 出土遺物実測図3 (1/3)

内外面に施釉する。猿投窯産か。

1674～1682・1686・1687は邢窯系の白磁である。1674～1678は碗の口縁部で、1674は口縁端部を折り返してやや大きめの玉縁口縁としており、他は小さな玉縁である。1679・1680は底部で、蛇の目高台。1679は全軸で高台疊付は釉剥ぎ、1680は高台外側から外底は露胎である。1681は碗の口縁部小片で、輪花口縁。1682は碗の口縁で、口縁外面から内面に白化粧を施す。1686・1687は壺である。内面露胎で一部釉が垂れ、1687は内面に白化粧が認められる。1683～1685は定窯系と

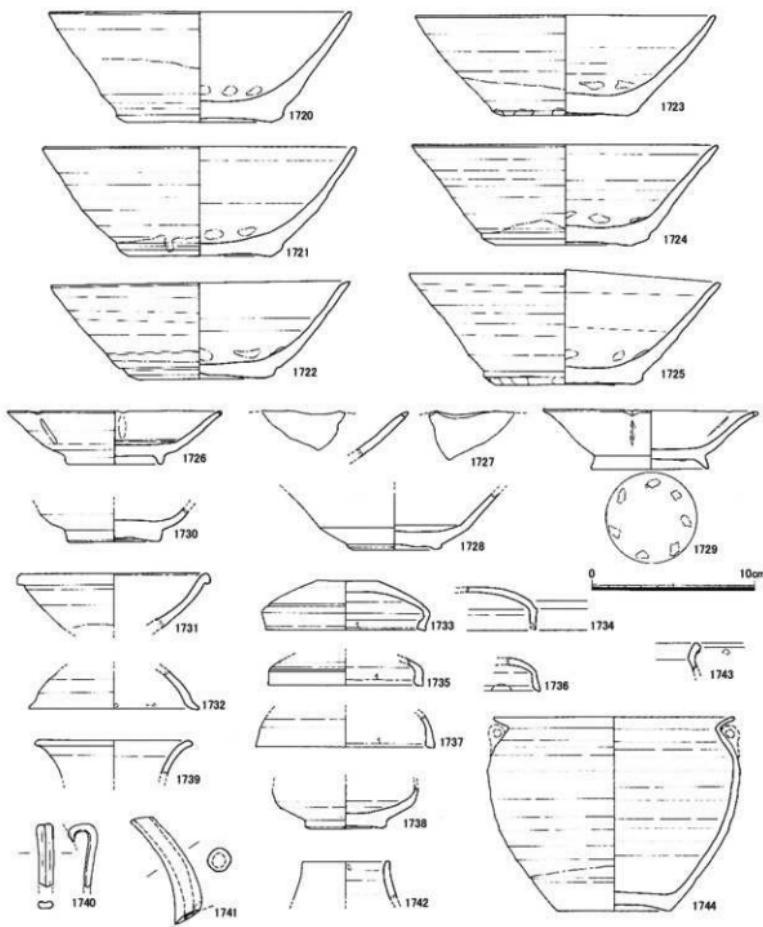


Fig.159 SK255 出土遺物実測図4 (1/3)

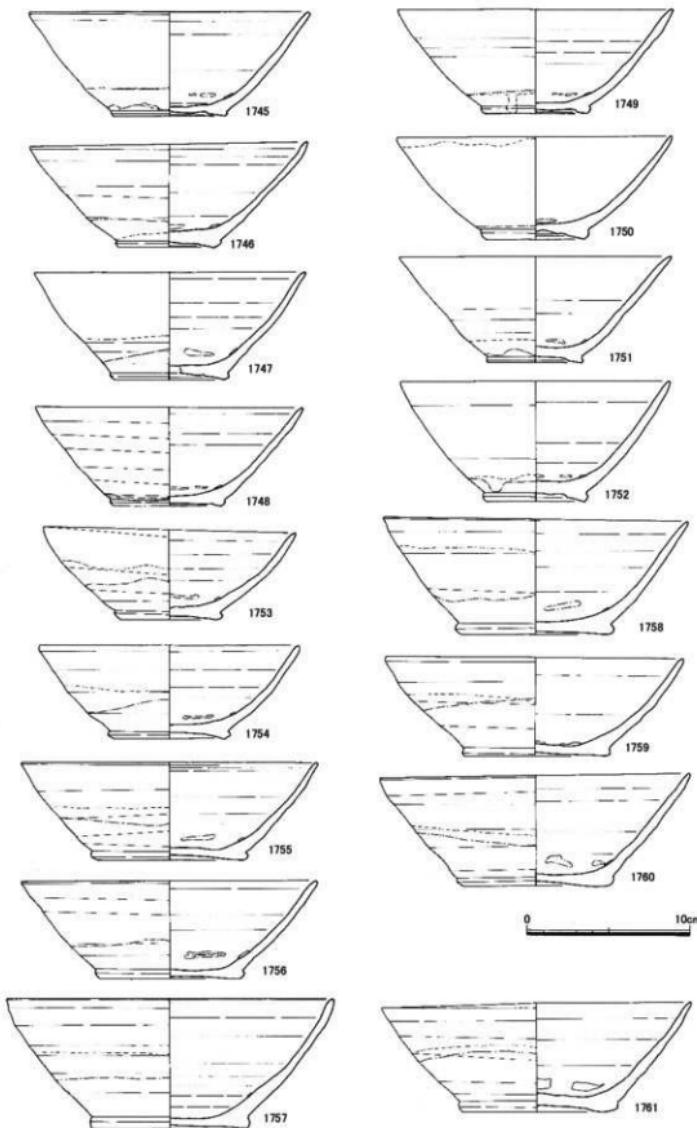


Fig.160 SK255 出土遺物測量圖5 (1/3)

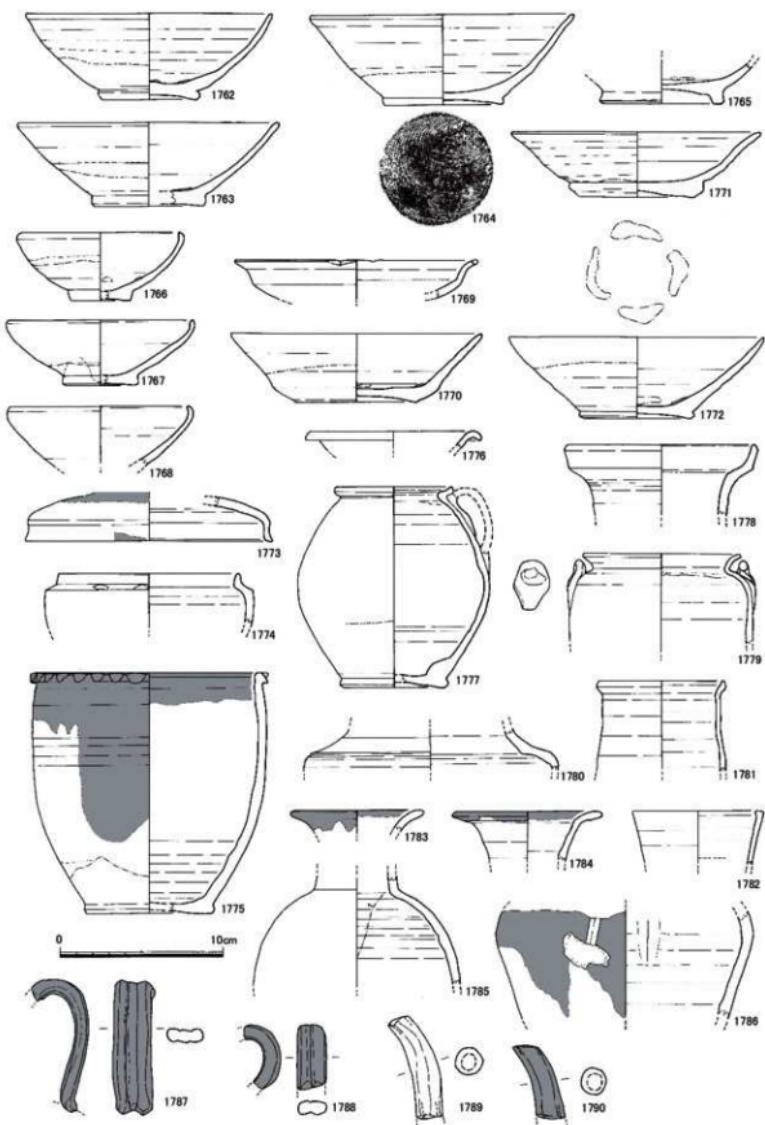


Fig.161 SK255 出土遺物実測図6 (1/3)

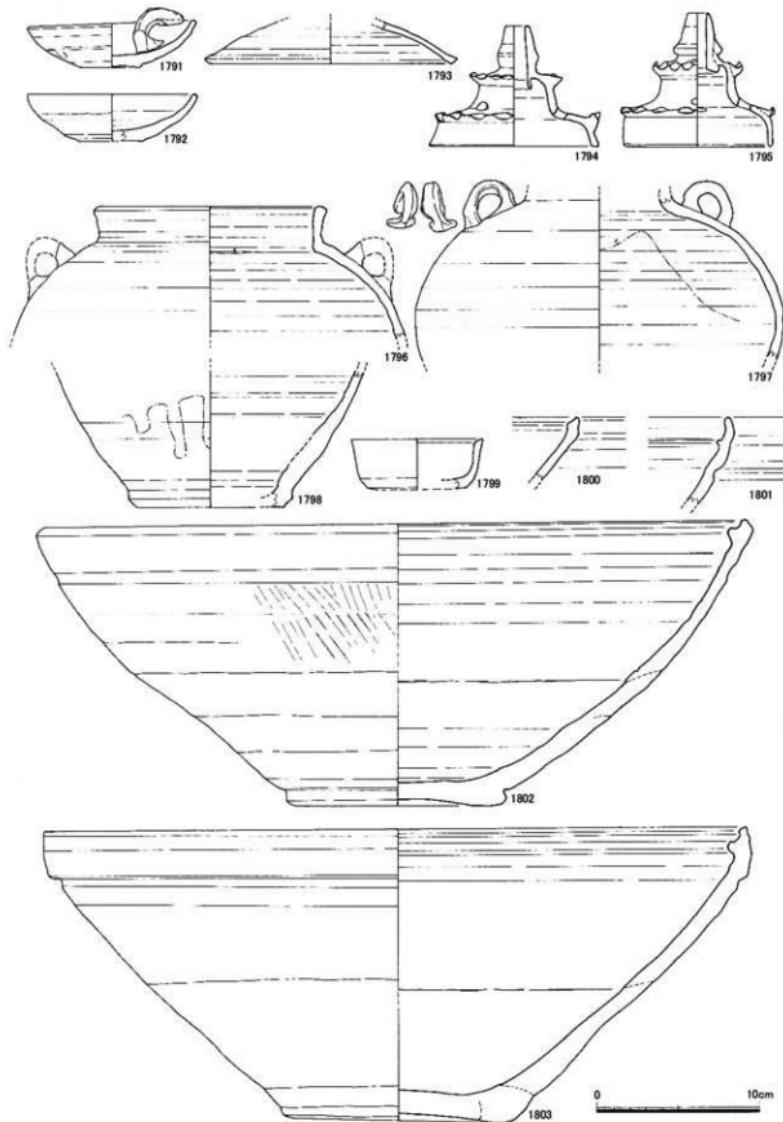


Fig.162 SK255 出土遺物実測図7 (1/3)

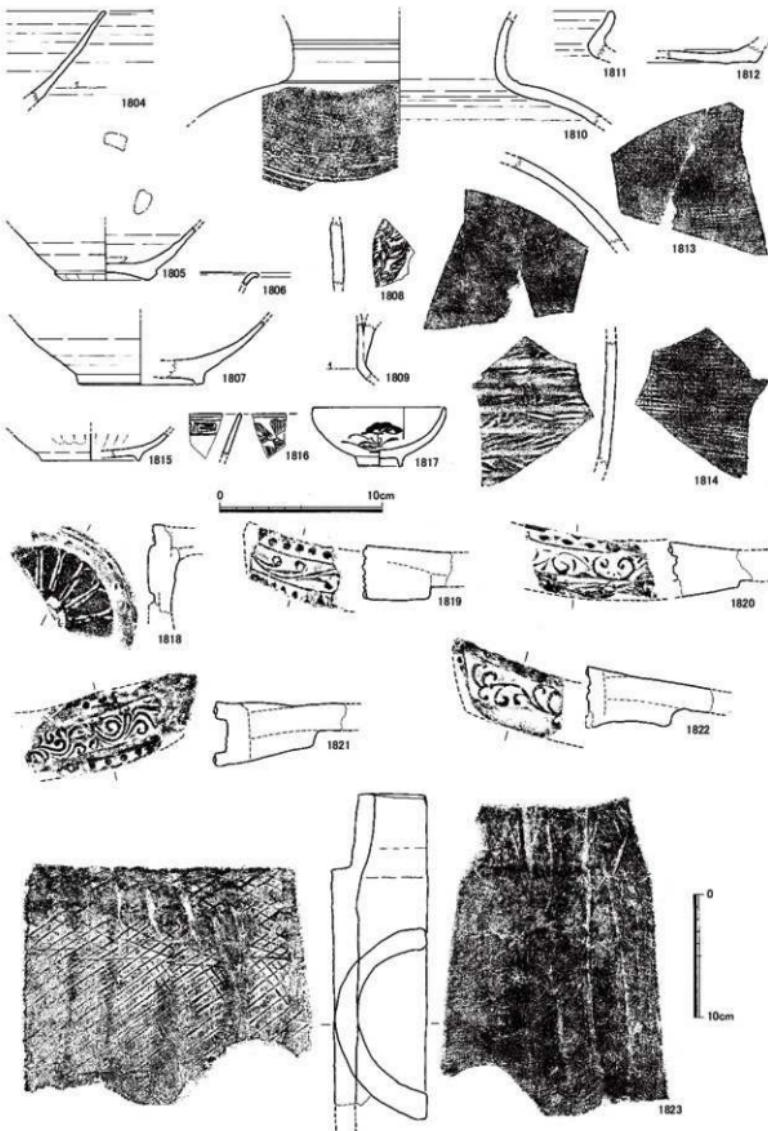


Fig.163 SK255出土物実測図8(1804～1817)は1/3、他は1/4

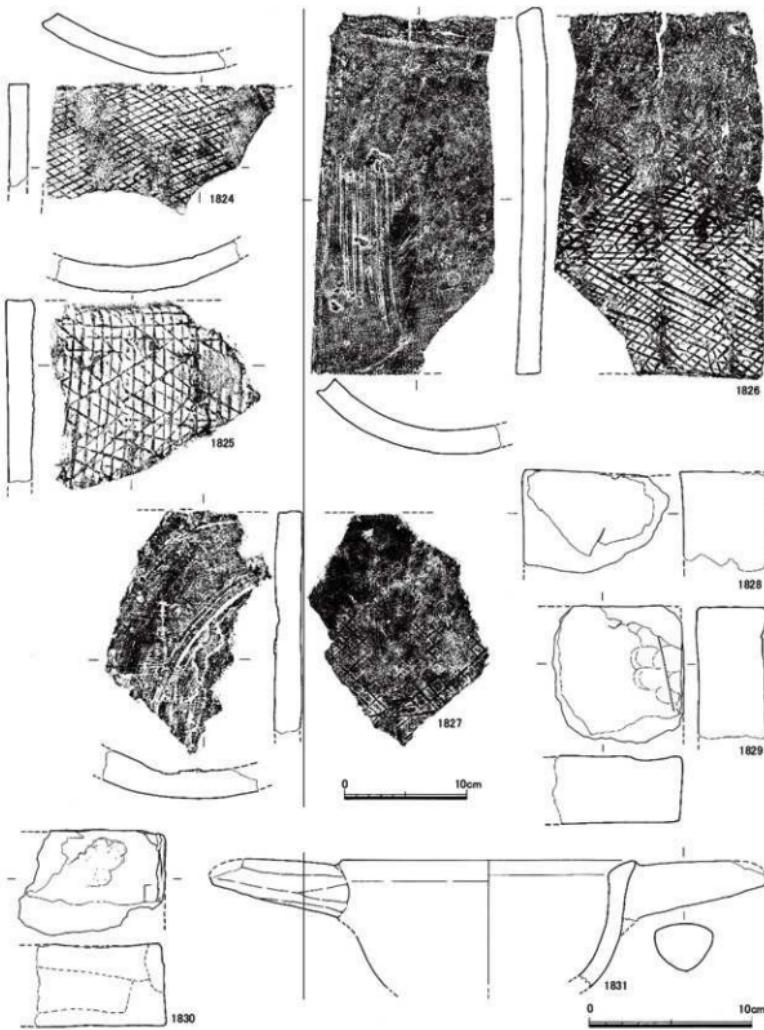


Fig.164 SK255 出土遺物実測図9 (1831は1/3、他は1/4)

みられる白磁である。1683は碗で輪花口縁の可能性がある。1684は碗の口縁部片。1685は蝶花皿で、内面に陽印刻文を施す。外底は釉剥ぎする。1688は景德鎮窯白磁か。壺類の口縁部とみられ、ヘラ押しで輪花口縁とする。

ナデ調整する。

第V期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構であろう。

土坑SK368 Fig.166, PL.17

第9次調査区南部の、土坑SK362の北西に2.5m離れて位置する小型の土坑である。東西にやや長い不整精円形プランをなし、南北長0.85m、東西長0.9m。断面逆台形で、深さ20cm。底面は平坦で、底面に接して越州窯系青磁の碗1点が出土した。

SK368出土遺物 Fig.171, PL.24

越州窯系青磁、朝鮮半島産陶器が少量と、瓦がコンテナ1箱出土した。

1908は粗製の越州窯系青磁碗で、完品。円盤状高台で、外底にナデを加える。体部はやや内湾気味に開き、口縁端部が僅かに外反する。口縁端部の5ヶ所に浅く切り目を入れて輪花口縁とする。内面から口縁外面まで白化粧を施し、ほぼ同じ範囲に黄味を帯びた淡いオリーブ色の不透明釉をかけるが剥落が著しい。内底には目跡が付着する。

1909は朝鮮半島産陶器である。胴部片で、外面に平行叩きを施し、内面に当て具痕が残る。

遺構の詳細時期は不明である。

7. その他の出土遺物

1) 土器類 Fig.172～184, PL.25・26

1910～1918は国産土器である。1910は須恵器杯蓋とみられる。環状の鉢が付き、口縁は屈折して端部を下方へ引き出す。形態的に統一新羅の無釉陶器蓋と近似するが、胎土はそれと異なる。1911は黒色土器B類托形土器。1912・1913は灰釉陶器壺類で、外面にかすかに施釉の痕が残る。猿投窯産であろう。1914・1915は緋窯産須恵器の鉢。1916～1918は国産鉛釉陶器。いずれも黄白色陶胎。1916は緑釉緑彩、口縁から肩部に緑釉を掛ける。1917は手づくね成形で、口縁部のみに緑釉を施し、他は露胎。1918は緑釉緑彩で、頸部分に緑釉が認められる。外底に糸切痕が残る。

1919～1922は中国産鉛釉陶器である。1919は三彩鶯雀文枕である。鶯雀を挟んで中央部分に青、他は緑釉が残るが、東京国立博物館蔵の同類製品の例から恐らく黄釉も使用されていたであろう。1920・1921は緑釉碗。1921は口縁端部を押圧してヒダ状にする。釉下に白化粧を施す。1922は白釉緑彩。河南省鞏義窯の製品であろう。

1923～1930はイスラム陶器壺である。黄白色軟陶質で、厚い青釉が掛かる。釉は外面は良く焼け透明ガラス質であるが、内面は白濁する。肩部から体部中位までは平行条線文を施し、その上に珠文と波状文を貼付する。形態的には福建省福州の五代劉華墓出土品と類似する。

1931～1968は邢窯、或いは定窯系白磁である。1931～1956は碗。蛇の目高台で玉縁口縁、或いは内湾口縁のもの(1931～1947)と、肉厚の輪状角高台でやや端反り口縁のもの(1948～1956)の二種類がある。前者は高台内まで施釉するものと体外面下半まで施釉するものがあり、後者は疊付から外底は露胎となる。釉下に白化粧を施すものや高台脇に施釉時に使用したと思われる鉗子痕が残るものがある。1951～1956は内面に白堆線、1949は体外面からヘラ押しを加える。1957～1960は皿。1957は内面に白堆線を加える。1961～1966は五代～北宋前期の定窯の製品と思われる。1961～1965は碗で細く小さな輪状高台で高台内まで施釉。1966は恐らく蝶花皿と思われ、内面に陽印刻文を入れる。1967・1968は壺。胎土・釉調から邢窯、或いは定窯系白磁と判断したが、全形がわからず不明確である。

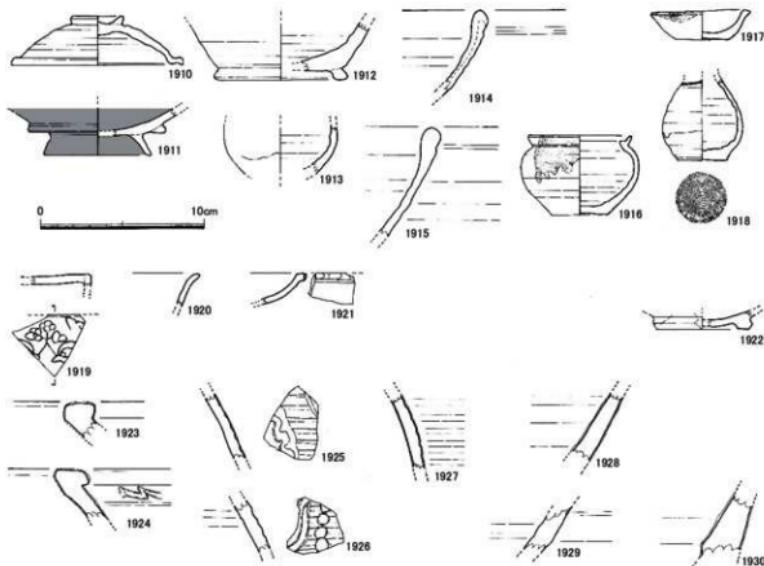


Fig.172 その他の出土遺物 土器1 (1/3)

1969～1988は北宋早期景德鎮産白磁である。高台内に褐色に変色した窯具痕が円形に残るものが多い。また、高台脇に邢窯系白磁碗と同様の鉗子痕が残るものもある。1969～1983は碗。1969・1970は内底に白土目が残り、他と焼成方法が異なる。他より若干早い五代～北宋早期の製品か。1971・1972は輪花口縁で体外面からヘラ押しを加える。1973～1976は玉縁口縁。1982・1983は体外面に削り出しによる蓮弁文を施す。1984～1988は皿。1984の外底には墨書きがあり、不鮮明であるが「綱」とも読める。

1989～2125は浙江省産越州窯系青磁で、1989～2077は晚唐～五代の製品と思われる。1989～1996は碗。1989～1995はいわゆる蛇の目高台で、外底まで施釉。1994・1995は内底に目痕がある。1996は低い肉厚輪状高台の浅碗で、外底まで施釉。1997～2005は皿。2003・2004は腰折れになり、2003の内底には大きな円形の目痕が残る。2005は先の尖る棱花形口縁で五代の製品と思われる。2006～2012は平底坏。2006・2007は口縁部が短く内に折れる。外底まで施釉。2008～2012は口縁部が外に折れ、2008のように玉縁状になるものもある。口縁上端面に目痕が残る。体外面下半から外底は露胎。2013は灯盞で、形態的には2008・2009と同じ。2014は擂鉢で、内外とも露胎で内面に摺り目に入る。2015・2016は内面に細い線描きで魚文が施される。2015は口縁部のみを巻くように施釉。2016は外表面は外底まで施釉され、内面下半は露胎となるが、擂鉢かどうかは不明。共に日本国内では初出と思われる。2017～2019は托。2020～2022は小形壺で、2020・2021は蓋、2022は身。2023～2029は壺の蓋と思われ、2025・2026は宝珠鉢が付く。2030～2034は小形合子蓋、2035～2042は合子で、2035～2040は蓋、2041・2042は身。2041は中に小形品を入れて焼いたと思われ、内底に目痕が残る。2043・2044は天井部に透孔が認められ、香炉の蓋と思われる。2045・2046も同様の口縁形態を呈す。北宋まで下る可能性がある。2047は全形が不明だが脚状の部分が残り香炉か。全面施釉。2048は広口壺と

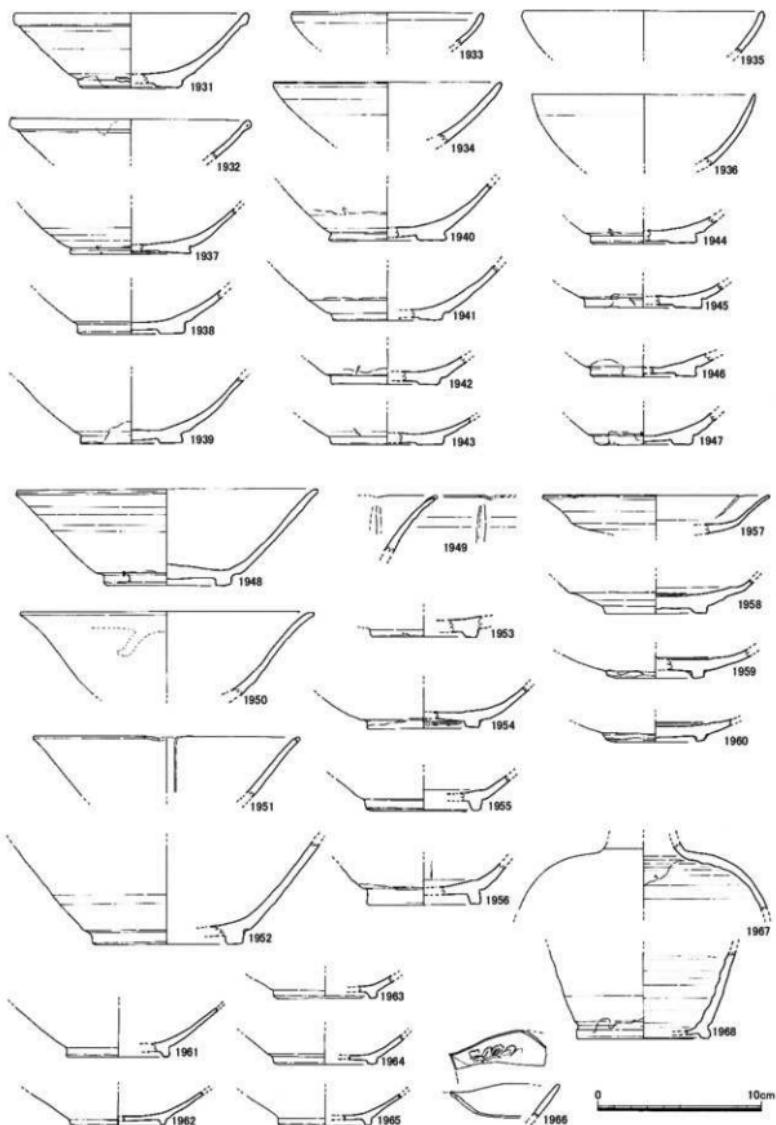


Fig.173 その他の出土遺物 土器2 (1/3)

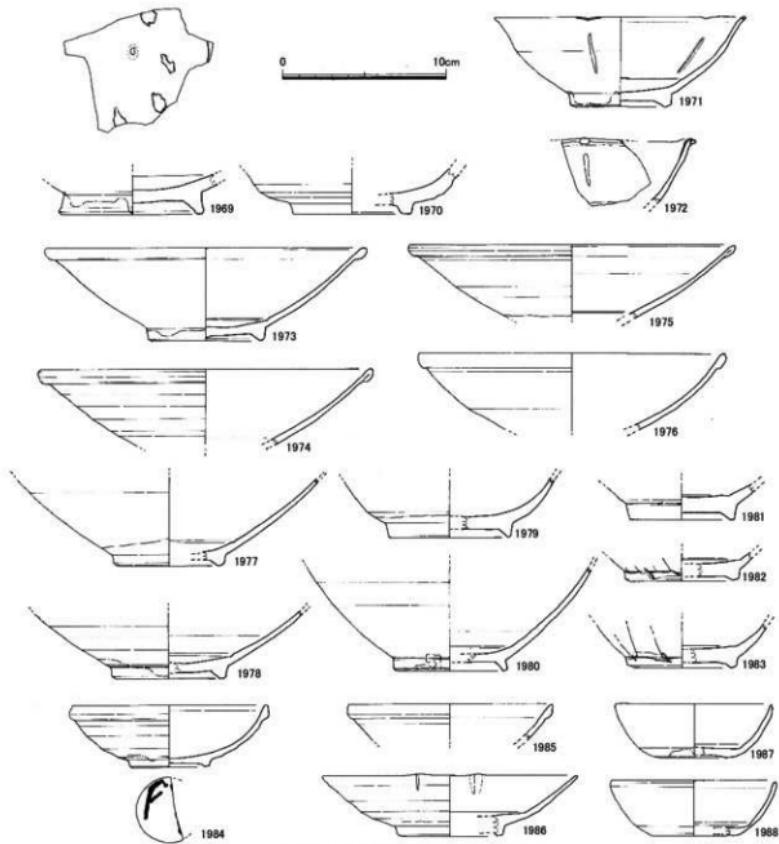


Fig. 174 その他の出土遺物 土器3 (1/3)

みられ、内底に小物を入れて焼いた目痕がある。2049は簡状の壺。外面中位に細い沈線が2条巡り、それ以下は手持ちヘラ削りによる器面調整を施す。2050～2052は小形瓶。2053～2055は脚部分であるが、器形は不明。2056は大形鉢で、口縁を外に折り返す。他と比べ器壁が薄く、時期的に下る可能性もある。2057は鉢。口縁を小さな玉縁状に仕上げる。2058～2061は広口壺で、2058は頸に小さな耳が付き、高台は基筒底状になる。2062・2063は盤口壺。2064・2065・2077は四耳壺。2066～2070は水注。2075・2076は耳。2075は貼り付け面の傾斜から縦方向に貼り付けられたと思われる。2076はかなり大きな方形の耳で横方向に貼付する。この二種類の耳を組み合わせた五耳壺の中国出土例がある。

2078～2121は五代～北宋前期の製品である。いずれも外底に目痕が残り、細長、小さな円形、大きく粗雑なものなどがある。2078～2099は碗。高台は極めて低く小さなものから細身で高く撥状に開くものまでバリエーションが多い。内底に毛彫りによる草花文を施すものが多く、いずれも文様パターンは同じで

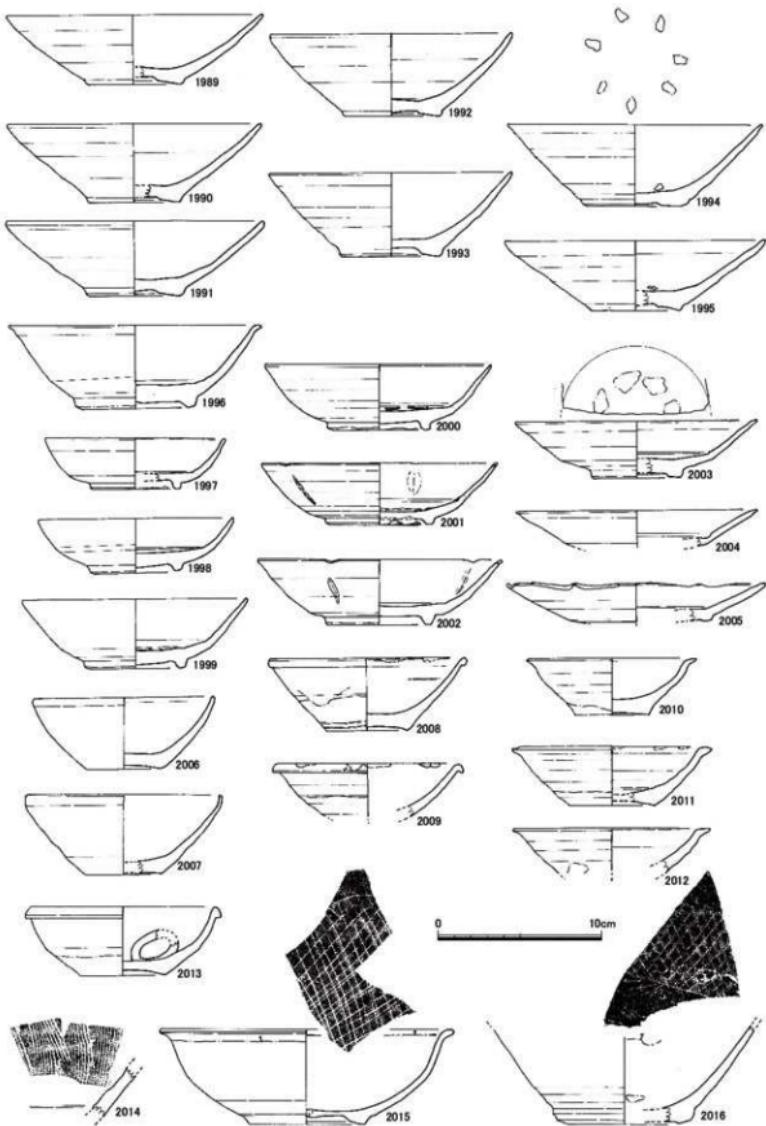


Fig.175 その他の出土遺物 土器4 (1/3)

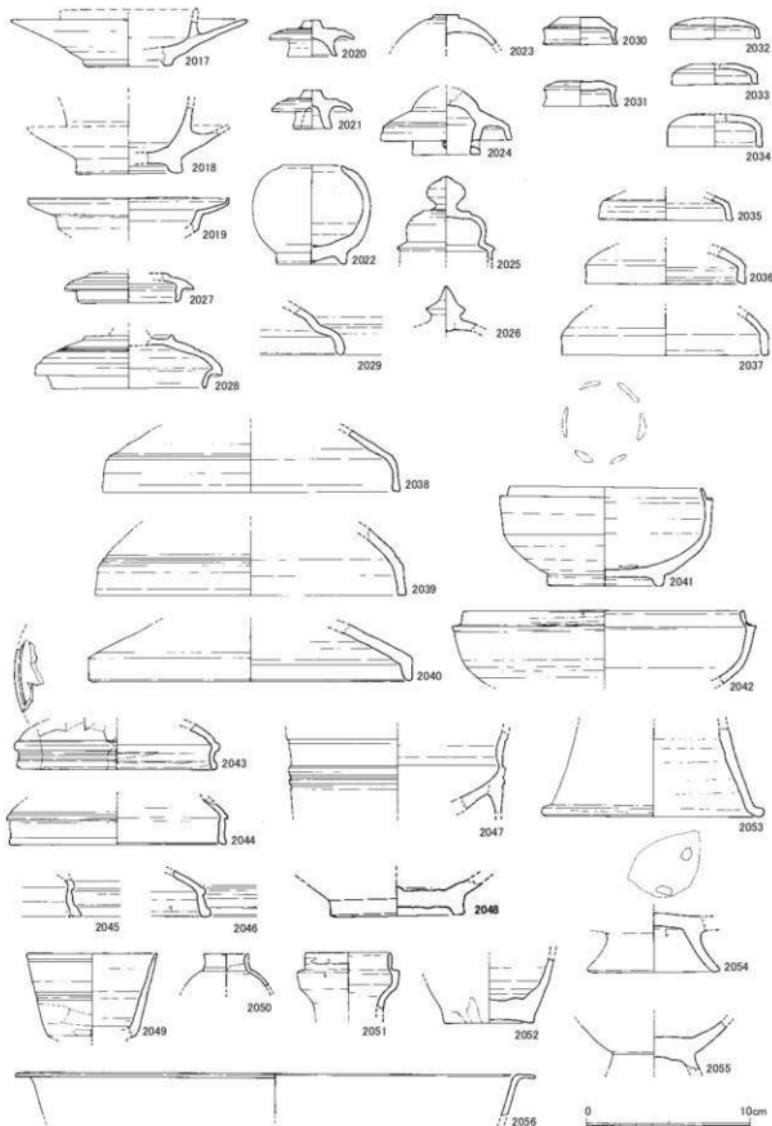


Fig.176 その他の出土遺物 土器5 (1/3)

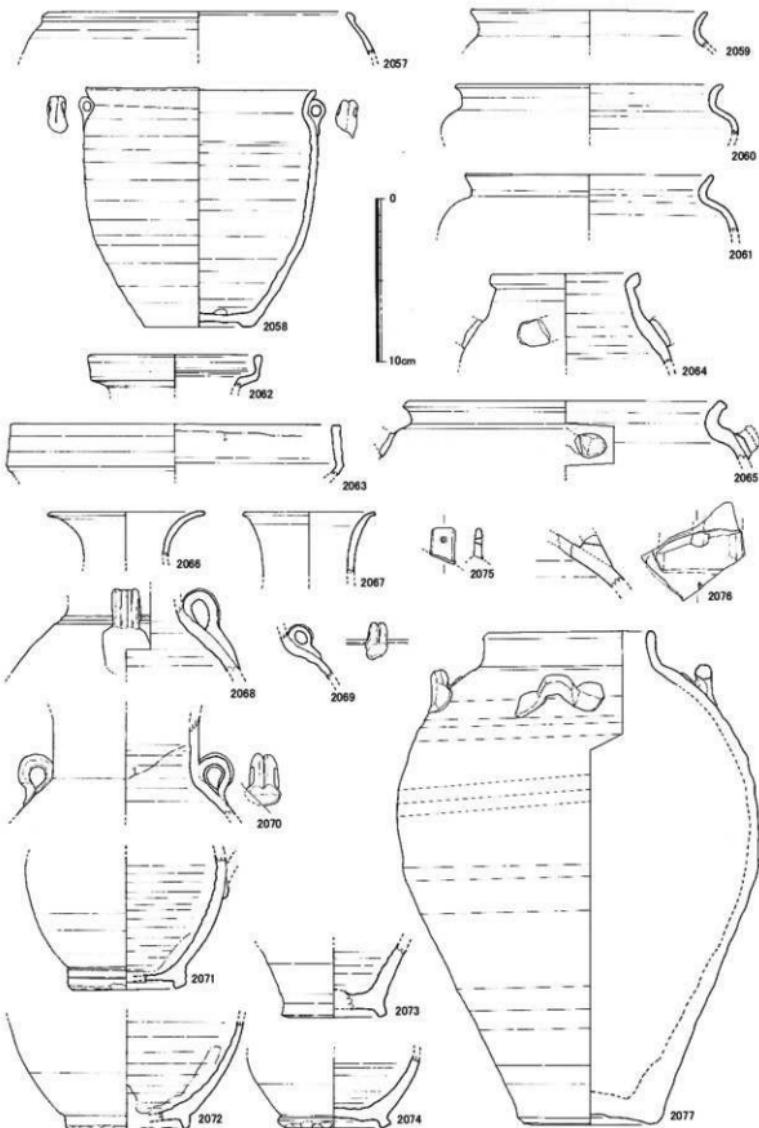


Fig.177 その他の出土遺物 土器6 (1/3)

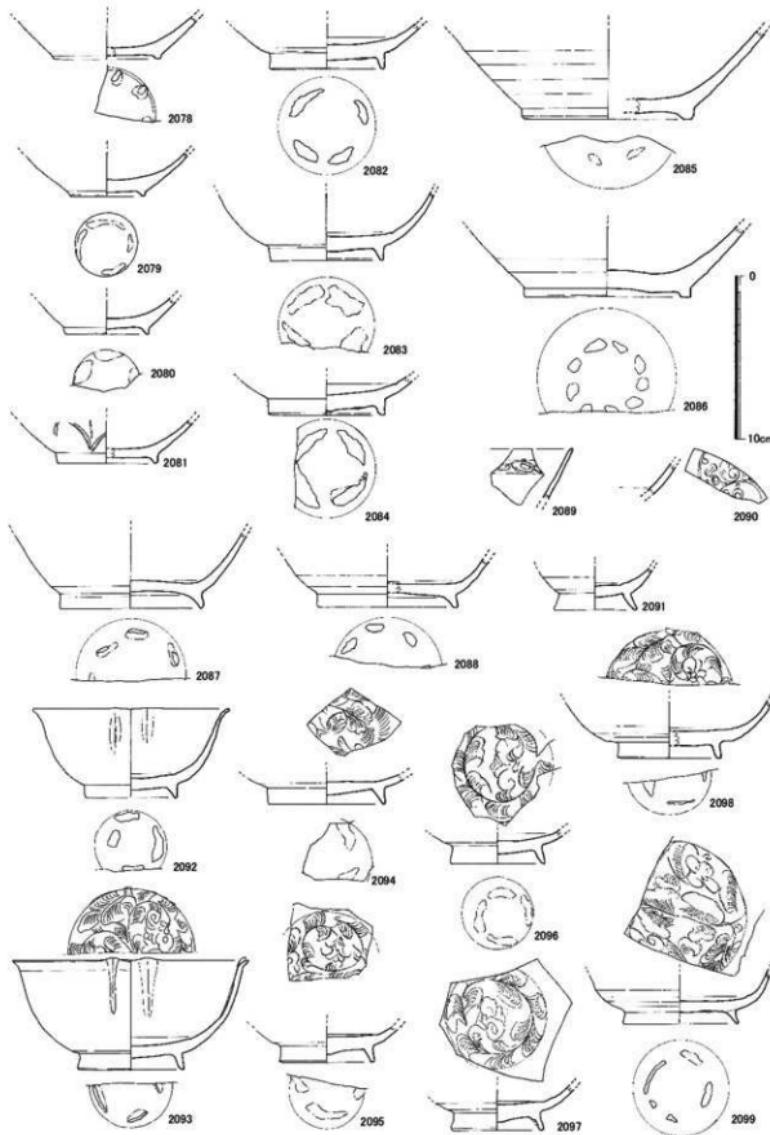


Fig.178 その他の出土遺物 土器7 (1/3)

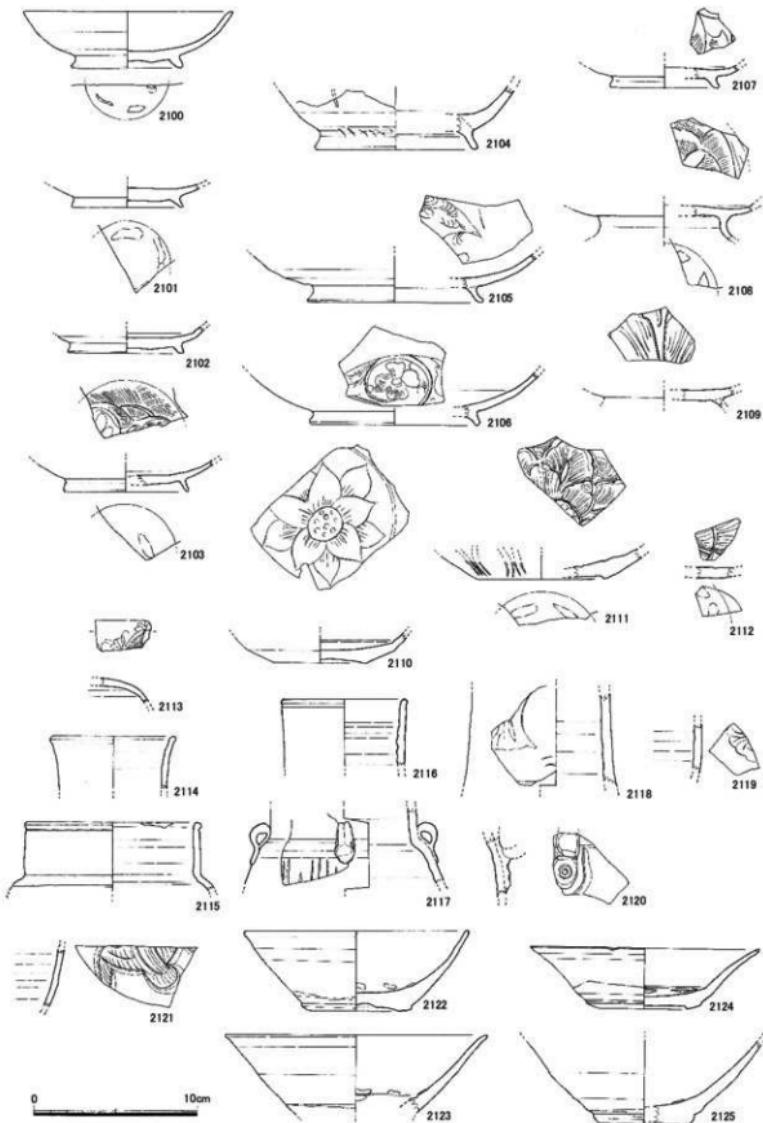


Fig.179 その他の出土遺物 土器8 (1/3)

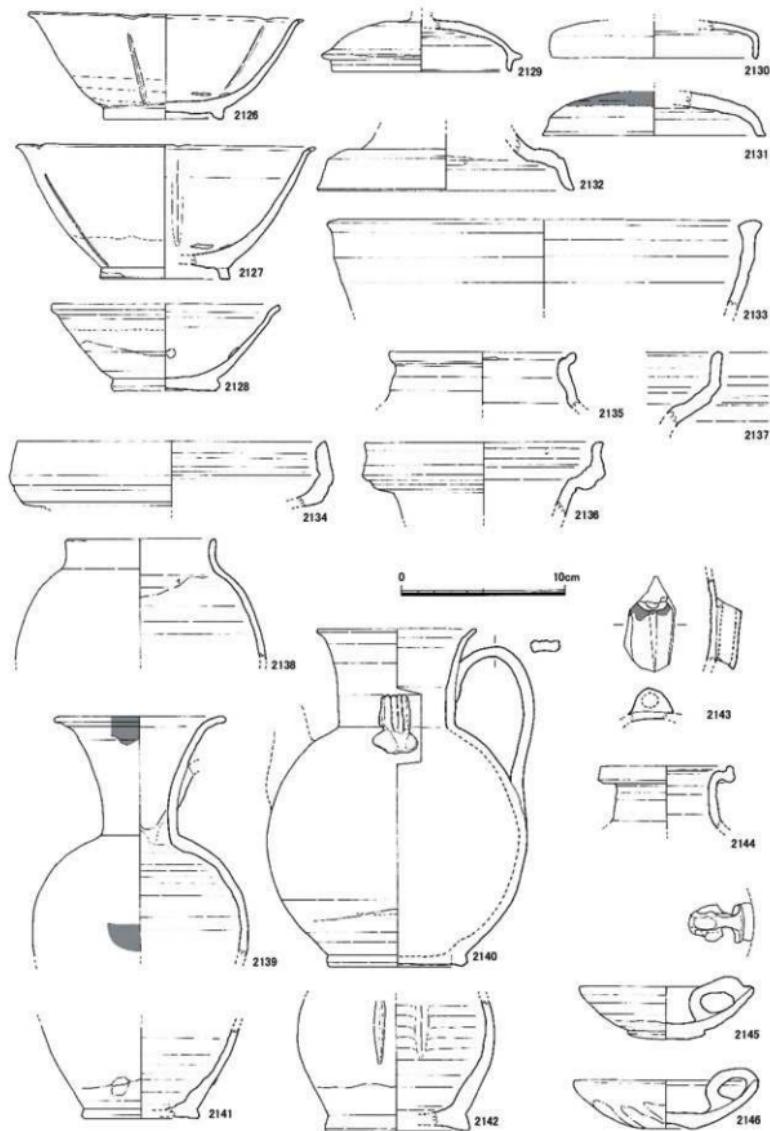


Fig.180 その他の出土遺物 土器9 (1/3)

1689は中国産白釉緑彩陶器である。小片のため傾きは不確実であるが、碗であろうか。黄白色で精良な陶胎で、光沢の強い乳白色の透明釉をかけ、緑釉で彩る。1690は中国産緑釉陶器柳斗文鉢である。型打ちによる成形で、内外面に編みかごを模した印花文が施される。上げ底状の平底となる。黄白色で精良な陶胎に、不透明な緑釉を薄くかける。陝西省黄堡窯の五代の製品に類例がある。

1691～1790は越州窯系青磁で、1744までは浙江省産精製の青磁である。1691～1696は疊付の幅が狭い蛇の目高台の碗である。1691・1692は全釉で、高台疊付に白土目が付く。ともに内底の釉が煮え、1691は火彌れがある。1693・1694は体外面下端から高台は露胎である。1695・1696は底部片で、全釉で高台疊付は釉剥ぎする。1697～1702は低い輪状高台の碗で、体部はやや丸みを持つ、口縁は外反する。全釉で高台疊付は釉剥ぎ。1700～1702は口縁に小さく刻みを入れて輪花口縁とし、対応する体部にへラ押しを加える。1704～1706は細く高い高台の碗である。全釉で高台疊付は釉剥ぎする。1703は口縁部で、内面下端に灰被りがある。1705は輪花口縁。1706は外底に目跡が付く。1707～1713は平底碗で、高台外縁に削りを加えて面取りする。1707～1710は小碗。体外面下半～外底は露胎で、外底縁辺に目跡、見込みに白土目が付着する。1714～1725も平底碗だが、体部下端を削って抉りを入れる。外面下半以下は露胎で、外底縁辺に目跡、見込みに白土目が付着する。1726は輪花皿で、全釉である。1727・1728は稜花皿で全釉。1729は五輪花皿。全釉で、目跡は外底に付く。1730は小碗。外底部を「の」字形に削り、蛇の目高台とする。体部は丸みを持つ。全釉で、疊付の釉は誰に削り取る。内底には砂粒が付着している。1731は杯で、口縁を折り返して玉縁状にする。1732は蓋で全釉である。口縁上面に白土が付着する。1733～1737は合子蓋である。1736は内面露胎で、他はいずれも全釉で口縁端部を釉剥ぎする。1738は合子身で全釉である。高台外周を雑に釉剥ぎし、白土目が付着する。外底に網目状の白色付着物がある。1739～1741は水注、1742は瓶である。1743は小壺で、外反する口縁外面に白土目が付く。1744は双耳鉢で、体外面下半から外底は露胎である。

1745～1790は粗製の越州窯系青磁である。1745～1771は碗・皿類で、釉下に白化粧を施し、体外面下半から外底は露胎である。1745～1752は碗で、外底に削りを加えて蛇の目高台風とする。1753～1764は削りを加えない円盤状高台の碗である。1764は外底に糸切り痕が残る。1765は貼り付け輪状高台の碗で、高台外側まで施釉する。見込みと疊付に目跡が付く。1766～1768は小碗で、口縁が内湾する。1769は皿、1770は平底の褐彩坏、1771は福建省産陶器の円盤状高台の皿である。胎土中に細かな砂粒を多く含む。1772は碗で、白化粧ではなく、施釉範囲が口縁外面までと狭い。福建省産か。1773は褐彩蓋、1774は合子身である。1775は褐彩鉢で、口縁端部に押圧を加えてヒダ状にする。白化粧を施し、内面から外面下端近くまで施釉する。体部の3ヶ所に楕円形の褐彩を施している。1776は壺蓋。1777は褐釉水注である。口縁内面から体外面下半まで施釉する。1778は盤口壺。1779は双耳広口壺で、白化粧を施し、体部内面は露胎である。1780～1782は壺である。内外面に施釉しており、1782は白化粧がある。1783～1790は水注で、1783・1784・1786～1788・1790は褐彩を施す。

1791～1795は褐釉陶器である。1791・1792は灯蓋で、外底は糸切り。内面から口縁外面まで施釉する。1793は蓋である。1794・1795は香炉の蓋で、天井部を2段につくり、屈曲部に突帯2条を貼付して押圧を加え、ヒダ状の装飾を施す。頭頂部の筒状の透孔のはか、下段の天井部にも透孔を3ヶ所あける。内面露胎で、1794は筒状の透孔の内面まで施釉する。1796・1797は施釉陶器の双耳壺で、口縁内側まで施釉し、胴部内面は露胎。1798は褐釉陶器壺で、釉は体外面の上半のみ施す。1799は無釉陶器の小壺。1800～1803は無釉陶器の捏ね鉢である。1802・1803は完形品で、使用により内底が磨滅する。横ナデ調整で、1802は外面に平行叩き痕が残る。

1804～1807は青磁碗で、いずれも淡黄白色陶胎で淡黄緑色透明釉をかける。1804・1805は体外面上半から外底は露胎で、回転ヘラ削りを加える。広東省産の可能性がある。1807は全釉で、内底に白土目が残る。1808は長沙窯黄釉褐彩貼花文水注で、内面は露胎である。1809も長沙窯褐釉水注か。胴部内面は露胎である。

1810～1814は朝鮮半島産陶器の壺で、外面は格子目叩き。1810は頭部に沈線2条と突帯1条を回し、胴内面は當て具痕を横ナデする。1812は平底で、内底に指押え痕が残り、胴部への移行部を横ナデ。1813は内面横ナデで、指押え痕が僅かに残る。1814の内面は當て具痕を横ナデ調整する。

1815は明代白磁菊皿、1816・1817は近世染付で、いずれも混入遺物であろう。

1818は軒丸瓦で、082B型式である。1819～1822は軒平瓦である。1819は600A型式で、瓦当に布目痕が認められる。1820は鴻臚館式軒平瓦(635型式)である。1821は662型式、1822は663型式である。1823は丸瓦である。凸面に平行線の一部が斜格子目となる叩き目を施す。1824～1827は平瓦である。1824は小さめの斜格子目、1825は平行線を加えた斜格子目、1826は軒平瓦663型式に対応する不整な斜格子目、1827は文字様

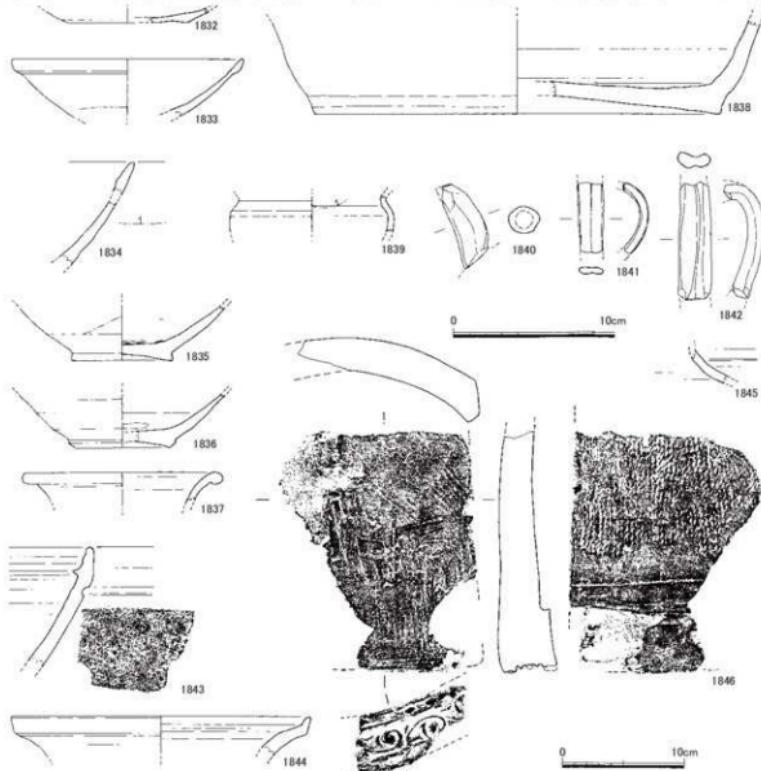


Fig.165 SK261出土遺物実測図 (1846は1/4、他は1/3)

の短線が加わる斜格子目の叩きを施す。1828～1830は素文磚で、いざれも角部分にあたる。

1831は滑石製石鍋である。球形体部に棒状の把手が付くが、破片のため対になるかどうか不明。内外面とも精緻に削りを加えて丁寧に仕上げる。

9世紀中～後半頃の土器類が多数を占めるが、一部に北宋前半期の中国陶磁器や近世遺物が含まれる。遺構の時期としては第IV期(9世紀後半～10世紀前半)としておきたい。

土坑SK261 Fig.155

土坑SK255の西側に隣接する。南側を溝状遺構SD252に切られる。東西にやや長い隅丸長方形プランの小土坑で、南北長0.9m、東西長1.0m。断面逆台形で、深さ30cmである。底面から浮いた状態で瓦や土器類がまとまって出土しているが、出土状況からみて隣接するSK255に伴う遺物の一部がSK261の上部にまで広がっている可能性も考えられる。

SK261出土遺物 Fig.165

土師器、中国産陶磁器(那窯系白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器が少量、瓦がコンテナ3箱出土した。

1832は土師器壊の小片で、底部へラ切りである。

1833は那窯系の白磁碗で、口縁は折り返して玉縁とする。体外面下半は露胎である。1834～1838は越州窯系青磁で、1836・1838は精製品。1834～1836は碗で、体外面下半は露胎とする。1837は水注の口縁部で、軸下に白化粧がある。1838は大鉢か。外面は露胎。1839～1842は褐釉陶器である。1839は小壺で体内面は露胎。1840～1842は水注の注口と把手である。1843は無釉陶器捏ね鉢。体外面は平行叩きにナデ調整を加える。

1844・1845は朝鮮半島産の無釉陶器壺か。1844は横ナデ調整で内面に自然釉を被る。1845は高麗期とみられ、頭部外面に沈線が巡る。

1846は鴻臚館式軒平瓦(635型式)で、瓦凸面に繩目叩きを施す。

出土遺物が少なく詳細時期は不明だが、SK255と同時期か、もしくは先行する遺構と考えられよう。

土坑SK262 Fig.166

第7次調査区の東端付近に位置する深い土坑である。第II期東門の柱穴の上面で検出しており、これに後出する遺構である。北側は中世溝(道)SD244に大きく切られている。東西に長い隅丸長方形で、北へやや開くプランをなす。南北長1.8m以上、東西最大長3.7mである。極めて浅く、深さ10～15cmである。土坑の北半部で遺物がまとまって出土している。

SK262出土遺物 Fig.167～169

土師器、須恵器、中国産陶磁器(白磁片、越州窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器、青釉陶器(イスラム陶器か)がコンテナ2箱、瓦が10箱出土した。

1847は須恵器蓋の小片で、天井部は低く、端部の返りは退化している。1848～1852は土師器である。1848～1850は碗で、体部は丸みを持つ。外底へラ切り。1851・1852は甕で、口縁は外反するが、頭部内面に稜はない。胴外面刷毛目、内面へラ削り調整で、口縁内外は横ナデ調整する。頭部内面には指押え痕が残る。

1853～1857は精製の越州窯系青磁である。1853は蛇の目高台の碗で全釉。高台疊付に目跡が付く。1854は碗で、口縁端部が外反する。外底を浅く削って低い高台を作り出し、外縁を狭く面取りする。全釉で高台疊付は釉剥ぎ。内底に21個の白土目が整然と密に並ぶ。1855は平底の碗で、外底縁辺をへラ削りで面

取りする。外底は板起しのままで露胎。内外底に目跡が付く。1856は稜花皿。1857は合子蓋で全軸。口縁端部に目跡がある。

1858～1882は粗製の越州窯系青磁である。1858～1881は碗・小碗で、軸下に白化粧を施し、体外面下半ないし中位から外底にかけては露胎とする。1858～1865は外底に再削りを加えて蛇の目高台風につくる碗である。内底に粗い白土目が残るものがある。1866～1877は円盤状高台の碗で、体部が内湾気味にそのまま開くものと、口縁端部が僅かに外反するものがある。外底は板起し後、雑にナデ調整している。内底に粗い白土目が付着する。1878は玉縁口縁の碗で、口縁端部が僅かに外に屈折する。施釉範囲は内面から体外面中位までに留まる。1879～1881は小碗で、体部から口縁にかけて内湾し、口縁端部がすぼまる。1882は輪花口縁の皿である。

1883は褐釉陶器の灯蓋で、内面のみ施釉。1884・1885は無釉陶器である。1884は口縁が屈曲内湾する深鉢である。1885は捏ね鉢で、口縁外面に沈線1条が巡る。

1886は青釉陶器で、高台の付く皿か。小片で径は不確実である。胎土は淡赤褐色の陶胎でやや粗く、白化粧を施して青釉をかける。二次被熱で釉が変色する部分がある。イスラム陶器の可能性がある。

1887・1888は朝鮮半島産陶器である。1887は小片で、外面は細かい格子目叩き、内面は格子目叩きをナ

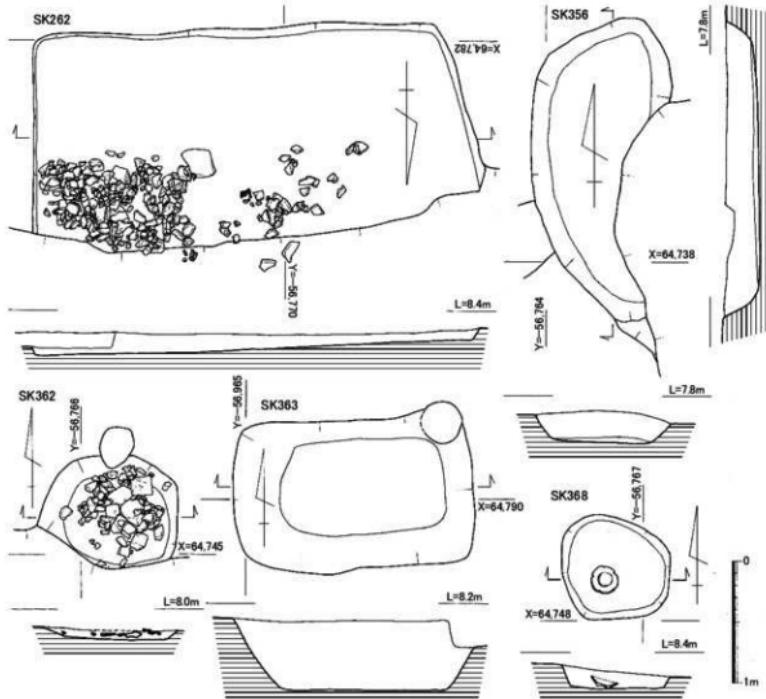


Fig.166 土坑 SK262・356・362・363・365・368 実測図 (1/40)

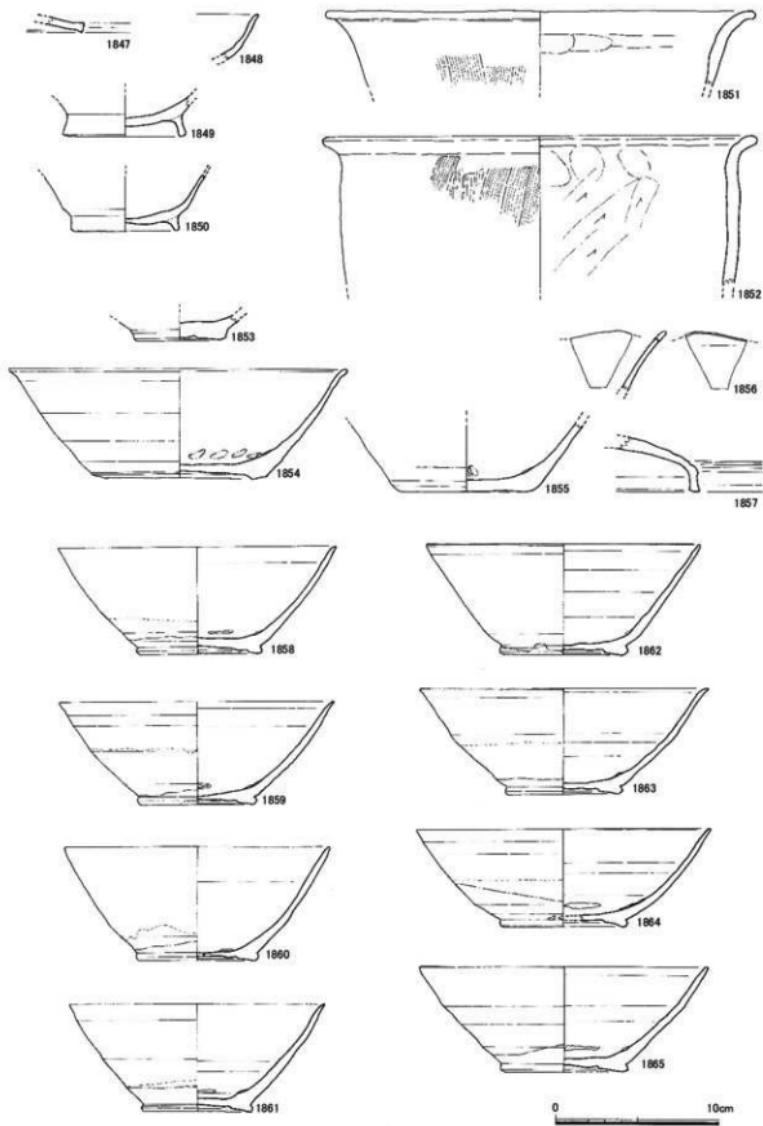


Fig.167 SK262 出土遺物実測図1 (1/3)

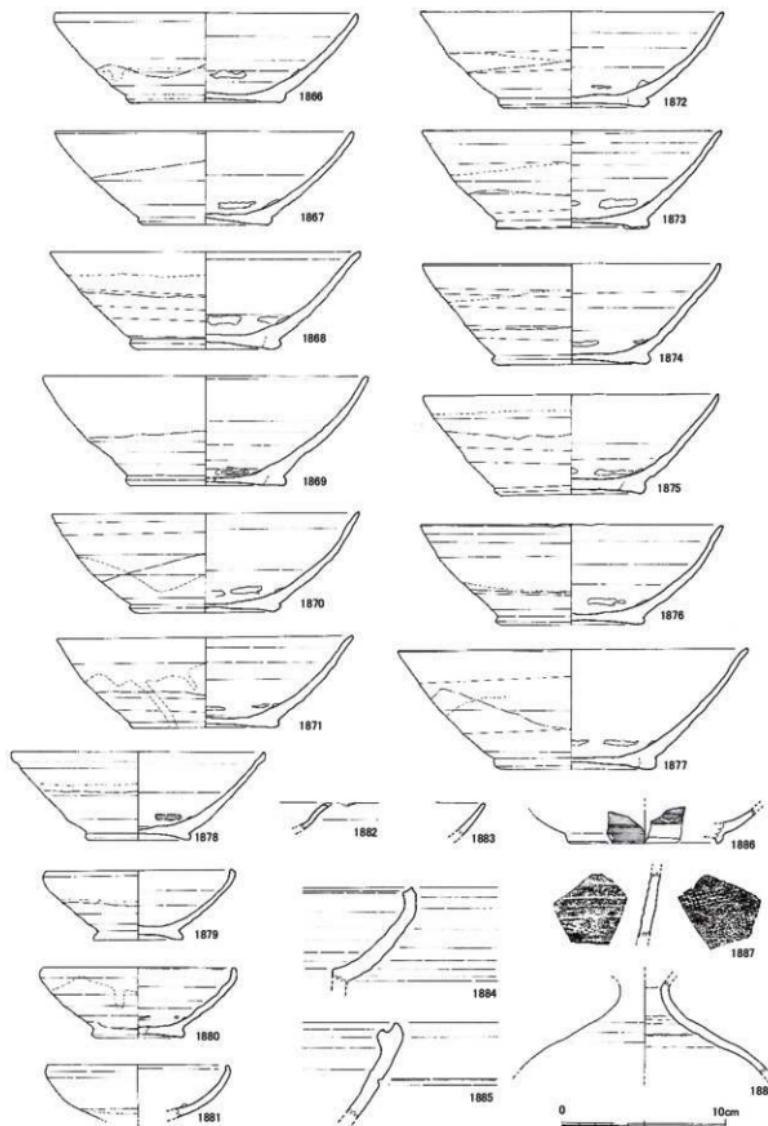


Fig.168 SK262 出土遺物実測図2 (1/3)

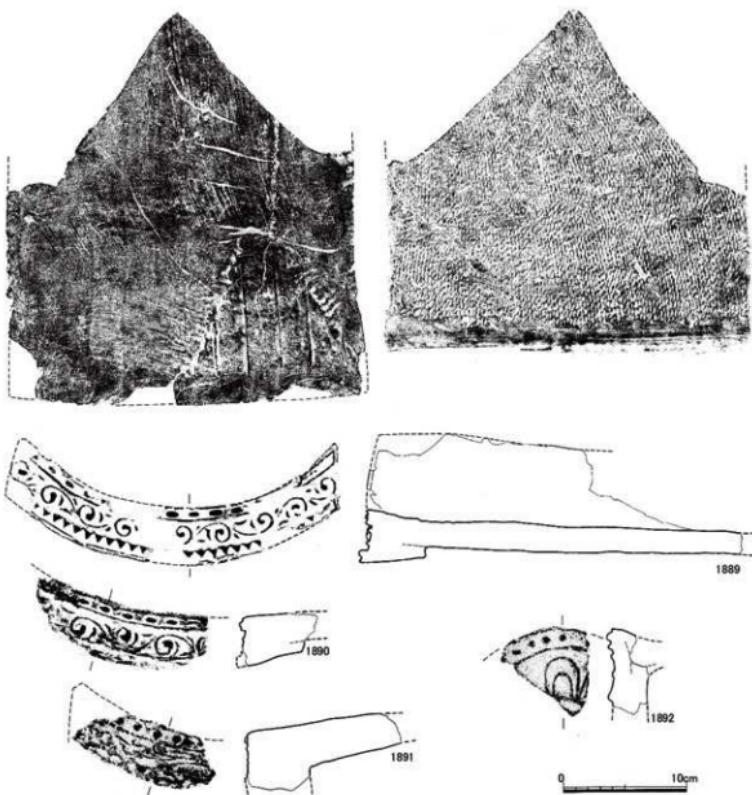


Fig.169 SK262 出土遺物実測図3 (1/4)

デ調整する。1888は瓶で、頸部が細くびれる。胴部内面に半円文当て具痕が残る。胎土はアズキ色で硬質、内外面が白濁しており釉がかかっていた可能性があるが剥落する。朝鮮王朝時代の製品の可能性があり、とすれば混入遺物であろう。

1889は鴻臚館式軒平瓦(635B型式)である。凸面は網目叩きで、頸は横ナデ。凹面は布目の隙間に板圧痕が明瞭に残る。1890は鴻臚館式軒平瓦(635型式)。1891は軒平瓦で757b型式。1892は軒丸瓦で132型式である。

第IV期(9世紀後半～10世紀前半)の遺構であろう。